福岡市城南区

浄泉寺遺跡

—遺構編—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第99集

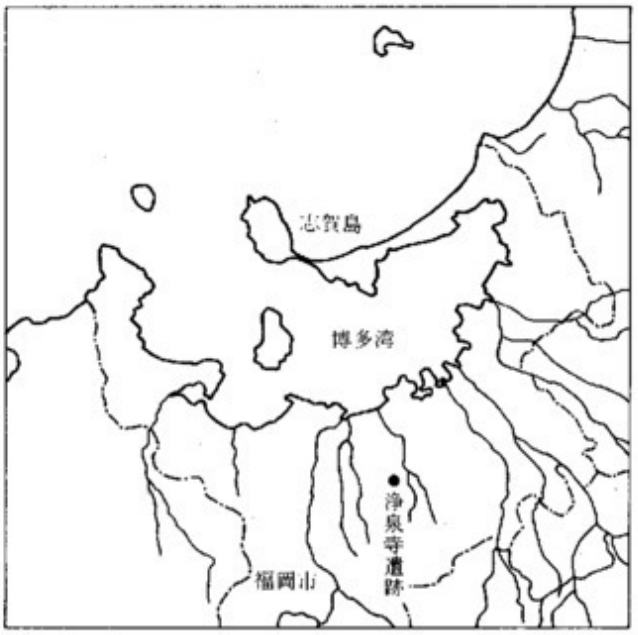
1983

福岡市教育委員会

福岡市城南区

浄泉寺遺跡

—遺構編—



1983年3月

福岡市教育委員会

序　文

福岡市西部地区の人口増に伴う開発事業は，減少することなくつづいているところであります。

本書は，民間の開発事業に対し，昭和56年度福岡市教育委員会が受託事業として，実施した埋蔵文化財の調査の成果を収録したものです。

昭和56年６月から10月にかけての発掘調査により弥生時代の貯蔵穴，古墳時代の住居跡など各種の遺構が検出され，多くの成果をあげることができました。

本書の作成にあたり発掘調査から出土資料の整理に至るまで，多くの人々の御協力をいただいたことに対し感謝の意を表するものです。

本書が埋蔵文化財の理解と認識を深める一助となり，合せて研究資料の一つとしても活用いただけることを願うものです。

昭和58年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　西　津　茂　美

例　　言

1．本書は東峰住宅産業株式会社による福岡市西区（現城南区）片江神松寺1752番地外の宅地開発計画に伴い，同社の委託を受け福岡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書であり，発掘調査は1981年６月５日から同年10月４日迄実施した。

2．当該地南側隣接地は1973年に発掘調査され，浄泉寺遺跡として調査報告書がすでに刊行されているところであり，合わせて参照されたい。

3．本書は調査成果の内，遺構編をなすものであり，遺物・総括編は別途刊行する予定である。

4．本書に報告する遺構の記号は次のとおりとし，遺構番号を符している。

袋状竪穴…ＳＦ，甕棺墓…ＳＫ，竪穴住居跡…ＳＡ，掘立柱建物…ＳＢ，

土壙・土壙墓…ＳＤ，溝…ＳＣ，不明遺構…ＳＸ

5．実測図中の方位はすべて磁北を示している。

6．本書で使用した地図は，国土地理院発行の２万５千分の１地形図「福岡南部」と「福岡西南部」を集成したものである。

7．遺構実測図の縮尺は，袋状竪穴が40分の１，甕棺墓が30分の１，竪穴住居跡・掘立柱建物60分の１，土壙・土壙墓40分の１を基本としている。

8．実測図の製図は，常松幹雄，藤尾慎一郎の両氏が全て行なった。

9．本書の執筆，編集は塩屋勝利，田中寿夫が担当したが，作成に当っては常松，藤尾両氏の協力を得ると共に，池崎譲二，木村幾多郎の両氏から多大の助言と指導を得た。

10．表紙題字は古藤国生氏の揮毫になる。

本 文 目 次

—遺 構 編—

Ⅰ．序　説……1
　1．調査に至る経過……1
　2．発掘調査の経過……1
　(1)　発掘調査の組織と関係者……1
　(2)　調査経過……2
Ⅱ．遺跡の位置と環境……7
　1．位置と地理的環境……7
　2．周辺の遺跡……7
Ⅲ．発掘調査の概要……11
　1．遺跡の立地……11
　2．発掘調査区……11
　3．遺跡の層序……13
　4．遺構の配置……13
Ⅳ．遺構……15
　1．袋状竪穴……15
　2．横穴墓……28
　3．竪穴住居跡……32
　4．掘立柱建物……47
　5．土壙，土壙墓……52
　6．その他の遺構……54

挿 図 目 次

Fig. 1　浄泉寺遺跡周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）……6
Fig. 2　神松寺丘陵の地形と遺跡分布図（縮尺1/5,000）……8
Fig. 3　浄泉寺遺跡の地形および発掘区域図（縮尺1/900）……11
Fig. 4　袋状竪穴実測図Ⅰ（縮尺1/40）……18
Fig. 5　袋状竪穴実測図Ⅱ（縮尺1/40）……19
Fig. 6　袋状竪穴実測図Ⅲ（縮尺1/40）……20
Fig. 7　袋状竪穴実測図Ⅳ（縮尺1/40）……21
Fig. 8　袋状竪穴実測図Ⅴ（縮尺1/40）……22
Fig. 9　袋状竪穴実測図Ⅵ（縮尺1/40）……23
Fig.10　袋状竪穴実測図Ⅶ（縮尺1/40）……24
Fig.11　袋状竪穴実測図Ⅷ（縮尺1/40）……25
Fig.12　袋状竪穴遺物出土状況実測図（縮尺1/30）……26
Fig.13　ＳＦ09内ＳＫ01出土実測図（縮尺1/30）……28
Fig.14　ＳＦ21内ＳＫ02，ＳＫ03出土状況実測図（縮尺1/30）……29
Fig.15　ＳＫ01，ＳＫ02，ＳＫ03実測図（縮尺1/6）……31
Fig.16　ＳＡ01，ＳＡ02実測図（縮尺1/60）……（折り込み）
Fig.17　ＳＡ03実測図（縮尺1/60）……33
Fig.18　ＳＡ04実測図（縮尺1/60）……（折り込み）
Fig.19　ＳＡ05実測図（縮尺1/60）……（折り込み）
Fig.20　ＳＡ06実測図（縮尺1/60）……35
Fig.21　ＳＡ07，ＳＡ08，ＳＢ02，ＳＤ02実測図（縮尺1/60）……36
Fig.22　ＳＡ09，ＳＡ10実測図（縮尺1/60）……37
Fig.23　ＳＡ11，ＳＡ12実測図（縮尺1/60）……38
Fig.24　ＳＡ13，ＳＡ14，ＳＡ15実測図（縮尺1/60）……39
Fig.25　ＳＡ16実測図（縮尺1/60）……40
Fig.26　ＳＡ17，ＳＡ18，ＳＢ05，ＳＢ06実測図（縮尺1/60）……（折り込み）
Fig.27　ＳＡ19実測図（縮尺1/60）……43
Fig.28　ＳＡ20，ＳＢ04実測図（縮尺1/60）……44
Fig.29　ＳＢ01実測図（縮尺1/60）……47

Fig.30　ＳＢ03実測図（縮尺1/60）……48
Fig.31　ＳＢ07実測図（縮尺1/60）……49
Fig.32　ＳＢ08実測図（縮尺1/60）……50
Fig.33　ＳＤ04実測図（縮尺1/40）……52
Fig.34　ＳＤ05，ＳＤ06実測図（縮尺1/40）……53
Fig.35　ＳＸ12実測図（縮尺1/60）……54

図　版　目　次

PL.1　1．浄泉寺遺跡遠景（北から）　2．浄泉寺遺跡発掘前近景（北西から）
PL.2　1．浄泉寺遺跡完掘状況（西から）　2．浄泉寺遺跡完掘状況（東から）
PL.3　1．浄泉寺遺跡完掘状況（南から）　2．浄泉寺遺跡完掘状況（西南から）
PL.4　1．ＳＦ01完掘状況　2．ＳＦ02遺物出土状況
PL.5　1．ＳＦ03遺物出土状況　2．ＳＦ04完掘状況
PL.6　1．ＳＦ05完掘状況　2．ＳＦ06貝層出土状況
PL.7　1．ＳＦ06遺物出土状況　2．ＳＦ07完掘状況
PL.8　1．ＳＦ08完掘状況　2．ＳＦ09完掘状況
PL.9　1．ＳＦ10完掘状況　2．ＳＦ11完掘状況
PL.10　1．ＳＦ13完掘状況　2．ＳＦ15完掘状況
PL.11　1．ＳＦ14，ＳＦ15，ＳＦ16完掘状況　2．ＳＦ16完掘状況
PL.12　1．ＳＦ18完掘状況　2．ＳＦ20遺物出土状況
PL.13　1．ＳＦ21完掘状況（奥ＳＫ02，手前ＳＫ03）　2．ＳＦ22完掘状況
PL.14　1．ＳＦ23完掘状況　2．ＳＦ24完掘状況
PL.15　1．ＳＦ25，ＳＤ03完掘状況　2．ＳＦ26完掘状況
PL.16　1．ＳＦ27完掘状況　2．ＳＦ28遺物出土状況
PL.17　1．ＳＦ29遺物出土状況　2．ＳＦ30貝層出土状況
PL.18　1．ＳＦ30完掘状況　2．ＳＦ31貝層出土状況
PL.19　1．ＳＦ31完掘状況　2．ＳＦ32断面土層
PL.20　1．ＳＦ33完掘状況　2．ＳＦ34完掘状況
PL.21　1．ＳＦ09内ＳＫ01出土状況　2．ＳＦ21内ＳＫ03出土状況
PL.22　1．ＳＡ01，ＳＡ02，ＳＤ01完掘状況（西から）

2．ＳＡ02周溝内遺物出土状況
PL.23　1．ＳＡ03完掘状況（南から）　2．ＳＡ04完掘状況（東から）
PL.24　1．ＳＡ05，ＳＡ06完掘状況（南西から）　2．ＳＡ05完掘状況（南西から）
PL.25　1．ＳＡ06完掘状況（南から）　2．ＳＡ07検出状況
PL.26　1．ＳＡ07，ＳＡ08，ＳＤ02完掘状況（北西から）
2．ＳＡ09完掘状況（南西から）
PL.27　1．ＳＡ10完掘状況（西から）　2．ＳＡ11完掘状況（西から）
PL.28　1．ＳＡ12完掘状況（西南から）　2．ＳＡ13発掘状況（東南から）
PL.29　1．ＳＡ14完掘状況（南から）　2．ＳＡ16完掘状況（南から）
PL.30　1．ＳＡ16北東壁隅土器出土状況　2．ＳＡ17，ＳＡ18完掘状況（南西から）
PL.31　1．ＳＡ19完掘状況（南から）　2．ＳＡ20，ＳＢ04完掘状況（南から）
PL.32　1．ＳＡ14かまど　2．ＳＡ16かまど
PL.33　1．ＳＢ01完掘状況（北西から）　2．ＳＢ02完掘状況（南東から）
PL.34　1．ＳＢ03完掘状況（北東から）　2．ＳＢ05完掘状況（北西から）
PL.35　1．ＳＢ06完掘状況（北西から）　2．ＳＢ07完掘状況（南から）
PL.36　1．ＳＤ02完掘状況　2．ＳＤ04完掘状況
PL.37　1．ＳＤ05完掘状況（東南から）　2．ＳＤ06完掘状況（北から）

表　目　次

Tab.1　浄泉寺遺跡周辺調査遺跡一覧表……9
Tab.2　袋状竪穴一覧表……27

付図　浄泉寺遺跡遺構配置図（縮尺1/150）

Ⅰ．序　説

1．調査に至る経過

浄泉寺遺跡は，1973年５月から６月にかけて宅地造成に伴う緊急調査が福岡市教育委員会文化課によって行なわれ，「福岡市文化財分布地図（中部・南部）」に『浄泉寺遺跡』として登載されている周知の遺跡である。1973年の調査では，弥生時代の袋状竪穴46基，住居跡５軒，古墳時代の住居跡２軒その他の遺構が検出された。遺構は造成区域北側の谷を挟んで向かい合う丘陵上にも広がることが予測されたが，今回の調査まで開発を受けず，山林のまま残されていたものである。

今回の発掘調査に至る契機は，1979年10月31日付で株式会社西松建設から本遺跡の所在する福岡市西区（現城南区）片江神松寺1752の１番地および，1753の１番地外（総面積5547.2㎡）に対する都市計画法に基く開発事前審査願が提出されたことに始まる。同年12月に，東峰住宅産業株式会社への所有者変更手続を経て，翌1980年１月26日に同社から福岡市教育委員会（文化課）に埋蔵文化財試掘調査願が提出されるところとなり，これを受けて埋蔵文化財包蔵の有無を確認するため，３月５日に試掘調査が実施された。調査は，現地が山林のため対象地の頂上部および西側斜面に限って行なわれたが，竪穴住居跡などの遺構が確認された。この試掘調査結果から福岡市教育委員会は同社に対して文化財保護法に基づく協力を要請し，保存措置について協議するところとなった。協議の結果，記録保存のための発掘調査を実施することが決定した。しかしながら，調査費，調査期間等を積算するためにはさきの試掘では不充分であり，さらに同年８月23日，25日の両日，遺構の範囲を確認するための試掘調査が再度実施された。その後同社の開発計画と文化課の発掘調査の工程に関する協議が重ねられ，翌1981年４月27日付で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を東峰住宅産業株式会社と福岡市長との間で締結し，発掘調査に着手することとなった。

2．発掘調査の経過

（1）発掘調査の組織と関係者

調査委託　東峰住宅産業株式会社
　　代表取締役　山本博久

調査受託　福岡市長　進藤一馬

調査主体　福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

文化部長　志鶴幸弘

文化課長　甲能貞行

埋蔵文化財第２係長　柳田純孝

事務担当　岡嶋洋・吉藤国生　赤池能里子

発掘調査　塩屋勝利　田中寿夫

作業員　牛尾準一　大原義雄　柴田大正　真子康次郎　萩原敏樹　吉上宣行　石見良一　丸尾朗　石見良次　井上淳　辻敬二　渡辺泰　岩下新一　松尾泰　大穂玉枝　伊藤みどり　大穂栄子　結城キミエ　牛尾クメ　牛尾二三子　細川マサエ　吉住フサノ　倉光ナツ子　柳浦八重子　八尋カオル　八尋君代　天野希代子　大穂アサ子　白坂フサヨ　結城千賀子　鍋山千鶴子　八尋アサ子　牛尾シキヨ　牛尾静子　宮崎ミキ　中嶋ヒサ子　伊藤紀美子　平嶋あや子　小田切裕見子　佐藤田鶴子　鴨川真由美　白土文子　村上かをり

整理補助員　的場由利子　下尾美成子　檜崎多佳子　高野直子　栗原由美子

（２）調査経過

発掘調査は，開発面積の内，遺構の範囲が確認された約3,000m²を調査対象として，1981年６月５日より着手した。梅雨期に続き炎天下の作業を挟んで，涼風そよぐ10月５日に全ての発掘作業を完了した。降雨による調査地からの雨水流出防止のため，貯水溝の掘削や土のう設営などの災害防止や，発掘作業中はもとより終業後における現場の安全管理に留意した。しかしながら，７月13日の大雨で一部雨水が道路に流出，地元からの苦情があって，下水道局との連絡を急遽行なう場面が起きたこともある。市街地における埋蔵文化財発掘調査のより万全な配慮が痛感された。また，調査が夏休みにかかったことで小中学生の遺跡見学が頻繁にあり，百道中学校社会科クラブの要請で体験発掘なども行なった。このようなできごとを経ながらも，発掘調査は無事に終了することができた。以下，調査経過について調査日誌を要約して記す。

発掘調査日誌抄

６月４日　晴　午前中，搬入機材の点検。午後から機材搬入を行なう。

６月５日　晴　午前中，事務所の整理。午後２時から調査関係者列席の下，安全祈願の供養を行なう。

６月８日　晴　発掘作業に着手する。調査区域の樹木伐採，杭打ち，縄張りを行なう。

６月10日　曇　発掘区を設定し，ユンボによる表土剥ぎを開始する。東端部から始める。

6月11日　曇　ユンボによる表土剥ぎと並行し，表土除去範囲の遺構検出作業にとりかかる。地山は黄赤褐色の花崗岩風化土で，その上に黄褐色粘質土があり，弥生土器片，須恵器片を混在する。東西方向に走る溝状の落ち込みを検出。

6月13日　曇　不整楕円，円，方形プランを呈する竪穴，隅丸方形の竪穴住居跡2軒を検出。

6月15日　曇　表土除去範囲の10mグリット設定。包含層中より抉入片刃石斧出土。

6月19日　雲　表土剥ぎ，伐根および遺構検出作業。グリット杭打作業を行なう。

6月22日　雨　台風5号接近下で表土剥ぎ，遺構検出作業を継続。午後から現場の囲りに土のうを積み，台風による流水防止に備える。午後4時頃から土砂降り。

6月23日　晴　調査区全域の表土剥ぎを本日で終了。南側崖の崩壊土を除去し，土留めをする。

6月24日　曇　調査区北東部斜面の清掃作業。急傾斜のため滑りやすく，二人がころぶ。安全第一。遺構は柱穴状小竪穴，土壙墓などを検出。

6月29日　曇　午前中，調査区周囲の溝に溜った土砂を掘り上げ，排水の便を図る。午後，調査区南西隅の堆積土の除去を行ない，調査区北東端の平坦部分の検出面清掃。

7月1日　曇　調査区東端部高地のG－8～10，H－8～10区の精査。溝と円形住居跡の他，不整円，方，楕円形の竪穴？を検出。

7月2日　晴　竪穴住居跡ＳＡ01，溝ＳＣ01，袋状竪穴ＳＦ01，不明竪穴ＳＸ01～04の発掘。

7月4日　晴　ＳＡ01の埋土掘り下げ。ＳＦ01の土層写真と土層図作成。ベルト除去。

7月6日　晴　竪穴住居跡が重複するＳＡ01，ＳＡ02の発掘作業。

7月8日　曇　ＳＡ01・02の排水作業。Ｇ7～8，Ｈ7～8区域の遺構検出作業。

7月9日　晴　ＳＡ02，ＳＤ01，ＳＦ02，ＳＢ02，ＳＸ06およびＳＸ07の発掘作業。

7月11日　晴　ＳＡ02の清掃並びにＳＤ01，ＳＤ02の発掘作業。西方から中央ベルトの土層状態を写真撮影。

7月13日　雨　午前中，現場作業中止。午後よりＳＡ01～02，ＳＸ07などの排水作業。その後，ＳＡ06・07の発掘作業。

7月14日　晴　排水対策のため，土のう積みを行なう。ＳＡ01・02・06の排水作業後，遺構露呈作業を行なう。ＳＡ07は床面までの露呈作業。4時過ぎより雷雨。

7月16日　晴　ＳＡ02・05・06，ＳＦ03およびＳＡ01の発掘作業。炎暑の中で作業能率低下。

7月18日　晴　ＳＡ05，ＳＡ07覆土の発掘作業。ＳＡ05平面図にレベル注記。Ｇ7～8，Ｈ7～8の平板による実測作業を行なう。本日も，ものすごく暑かった。

7月20日　晴　ＳＡ05，ＳＦ02，ＳＦ03の遺構露呈作業。Ｈ7・8区にまたがり，住居跡を検出，ＳＡ09と命名。ＳＡ07・08，ＳＤ02の発掘作業終了。写真撮影を行なう。

7月23日　晴　ＳＡ09，ＳＡ05のベルトを残した状態の写真撮影。後に土層図作成。ベルト除

去後，再び写真撮影。ＳＦ01・02の発掘作業。午後，百道中学の社会科クラブ生徒10数人，見学に訪れる。

安全祈願（６月５日）

7月25日　晴　ＳＡ04，覆土掘り下げ作業。ＳＦ02，遺物出土状態の写真撮影。ＳＡ04北側の落ち込みの掘り下げ，袋状竪穴となる。丘陵北端の平坦面を精査，袋状竪穴２基検出。

7月27日　曇　午前中，排水作業と遺構検出作業。午後は雨のため土器洗い。

炎天下で続く発掘作業（８月）

7月28日　晴　ＳＡ04，埋土掘り下げ作業。ＳＦ05完掘。ＳＦ06より貝層が出る。ＳＡ05の平面図完了。ＳＡ04の北側に住居跡を検出，ＳＡ03とする。

7月30日　晴　ＳＡ03・04を完掘し，写真撮影と土層図作成。ＳＦ02出土状態図完了。ＳＦ05完掘。

百道中学校生徒の体験発掘（８月）

8月1日　晴　ＳＦ05の完掘状況写真撮影と，ＳＦ06の遺物出土状況写真撮影。ＳＦ07～09・13の掘り下げ作業。ＳＦ12の写真撮影とＳＡ03の平面図作成。ＳＦ16の北側にＳＦ22を検出する。

8月3日　晴　ＳＦ02～03・07～15・17～20の埋土掘り下げ作業。

8月5日　晴　ＳＦ01の露呈作業およびＳＦ02・03・09・11・12・17・18の掘り下げ。ＳＦ07の土層断面，写真，実測。ＳＦ14・19のベルト除去。ＳＦ16，遺構面の清掃とＳＦ20の遺構露呈作業。ＳＢ01・02は完掘した後，写真撮影。

8月6日　晴　ＳＦ09・07・11・18・02・20・03の発掘ならびに記録作成。ＳＢ02の写真撮影

とG～H6区の遺構検出作業。

8月10日　晴　SA10・11，SF09・20・21の発掘作業。SA04，SF18の実測図完成。SA10の断面土層図と完掘状況写真撮影を終了。

8月11日　晴　午前中，現場の縄張りとその他の安全管理。

8月12日
｝
8月15日　盆休み。

8月17日　晴　SA12～14，SF20～23の掘り下げ作業。SF20の遺物出土状態写真撮影。

8月19日　晴　SA11・14の土層写真撮影と土層図作成後，ベルト除去。SA12・13のベルト除去。SA13の床面に袋状竪穴と住居跡を検出，SF24，SA15とする。

8月20日　晴　SA15・16の埋土掘り下げおよびG5区段落部の発掘作業。4時過ぎからにわか雨。めぐみの雨!!

8月22日　晴　SA15～17の埋土掘り下げ作業およびSA11の実測作業。

8月24日　晴　SA15・17・19，SF29の掘り下げ作業。SA16の断面土層図，写真撮影後，ベルト除去。F5区に竪穴2基を検出，SF25，SF24とする。

8月26日　曇　E～G4列区の遺構露呈作業。SX12，SA17～18の土層断面図，写真撮影。SA19の掘り下げ作業。並行して，調査区北側周縁のユンボによる削平作業。

8月28日　曇　削平作業後，SB04，SA19・20，SD03，SF25の露呈作業。SA17・18の土層断面図作成。

8月31日　晴　SA17・18の完掘状況，SA19の土層堆積状況写真撮影。SA20の土層堆積状況および完掘状況写真。調査区南西側斜面の遺構検出，露呈作業。本日は35.8°Cだった。ものすごく暑かった。

9月1日　曇　SA17～20の完掘状況写真撮影。調査区南西～西側斜面の遺構検出作業と露呈作業。SF25，SD03の土層断面写真撮影。SF23の土層断面図作成。明日，台風が接近予定のため，現場の保安を行なう。

9月3日　台風　台風18号のため現場作業休止。遺物整理作業。

9月7日　晴　D～E6区の表土Ⅱ層掘り下げ作業およびSF26・27，29～32，23・24の発掘作業。

9月9日　晴　D～E6区に竪穴住居跡を確認。E7区に遺構検出。SF23の写真撮影と平面図作成。SF26の実測完了。SF29の遺物露出完了。SF27・30～32の発掘。

9月11日　曇　E7～8区の遺構検出，SF27・30・33の発掘作業。

9月12日　晴　SF21・22・27・30・33の発掘作業。SF24の土層断面図と，土層写真撮影。SF31の完掘状況およびSF32の土層断面写真と完掘状況写真撮影。

9月14日　晴　E９区～G10区に遺構検出，ＳＤ06と命名。ＳＦ21・22・24・27～30・33の掘り下げ作業。ＳＦ24・27は完掘。

9月16日　晴　ＳＢ07の露呈作業。ＳＦ02・22・30・33の掘り下げ作業。ＳＦ21の土層断面写真撮影と土層図。

9月17日　晴　Ｅ７～８区の調査。ＳＦ04・21を完掘。ＳＦ22・24の完掘状況写真撮影。

9月21日　晴　ＳＡ13・15の平面実測図作成。ＳＦ21・22の割り付けおよびＳＢ01の平面実測補正作業。ＳＦ33・28の掘り下げ作業。

9月24日　曇　袋状竪穴とＳＤ06の清掃。ＳＦ28の遺物出土状況，ＳＦ16の断面土層，ＳＦ33の完掘状況写真撮影。ＳＦ21，ＳＤ05の実測図作成。

9月28日　曇　ＳＦ02・20の完掘状況写真。ＳＦ05・06・08・29・21，ＳＫ02・03の実測図作成。ＳＦ15・16の間に貯蔵穴検出，ＳＦ14とする。

10月１日　晴　ＳＦ14～15，ＳＡ07・08，ＳＤ02の実測図作成。ＳＦ34の遺物出土状況，ＳＦ14～16，ＳＢ03・05・06の完掘写真撮影。

10月３日　曇　遺構の清掃作業と杭抜き。ＳＦ34，ＳＢ08の実測および遺構配置図の作成。

10月６日　曇　遺構清掃後，高所作業車にて近景写真撮影。午後から地形測量と機材撤収。本日にて現場作業終了。６月５日から，ちょうど４ヶ月であった。

II．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境

博多湾に北面して扇形に展開する福岡平野は，西側を背振山地より派生する長垂丘陵，東側を由郡山地より分岐してのびる月隈丘陵によって限られている。この福岡平野は，油山山塊から北方に突出する鴻ノ巣山丘陵を中心帯として，西側を早良平野，東側を福岡平野とに狭義に画される。早良平野は室見川水系によって形成された複合扇状地であるが，浄泉寺遺跡の位置する地域は，地理的には平野東縁部に属しながら，地形的には一つのまとまった小地域を画している。すなわち，この地域は，油山山塊から分岐するいくつかの低平狭小な丘陵が，駄ヶ原川，片江川，一本松川，樋井川などの小河川の間を縫ってのび，西方を飯倉丘陵，東方を鴻ノ巣山丘陵によって限られる小地域をなし，室見川水系とは異なる地形を呈している。これらの小河川は丘陵の間を開析して流れ，流域に小規模な沖積地を形成しつつ，やがて合流して樋井川となって博多湾に注いでいる。このような地形的まとまりをなす樋井川水系のこの地域が，律令時代の早良郡畉伊郷に比定され，その範囲は福岡市に合併する以前の早良郡樋井川村とほぼ重なるものと考えられる。

浄泉寺遺跡は，福岡市城南区片江神松寺1752および1753番地に所在し，油山北麓から分岐して北へのびる茶山丘陵の一支脈である神松寺丘陵にある。ちなみに国土地理院発行地形図福岡南部二万五千分の一図幅で示すと，北西隅から南へ13.6cm，東へ0.8cmの交点に当る。

2．周辺の遺跡(Fig.1)

浄泉寺遺跡周辺の地域は，近年までは福岡市近郊の農業地帯であり，田畑や山林などの緑豊かな自然環境が保全されていた。しかしながら，最近の都市開発の進展はこの地域のみならず，油山北麓の丘陵深部までに拡大し，急激に宅地化されつつある。また，このような開発の進行に伴ない，埋蔵文化財の緊急発掘調査も相ついで行なわれ，この地域の埋もれていた過去の歴史が次第に明らかにされていることも事実である。この地域の歴史的環境については，これまで発掘調査された遺跡の報告書に詳しく述べられているので多くはそれに譲り，ここでは簡単にこの地域の遺跡の特徴を概観したい。

この地域の先土器・縄文時代の資料は，五ヶ村池や箱ヶ池などの池畔から，断片的に石器や土器などが採集されていたが，1976年のカルメル修道院内遺跡の発掘調査，翌1977年の神松寺遺跡の発掘調査で尖頭器が出土して先土器時代の資料を増している。また，1979年から始まっ

Fig. 1　浄泉寺遺跡周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）

Tab. 1　浄泉寺遺跡周辺調査遺跡一覧表

対図番号	遺跡名	時代	遺構・遺物	文献・備考
1	田島オゴモリ遺跡	弥生前期～古墳	袋状竪穴，住居跡，掘立柱建物	1978年福岡市教委調査
2	京の隈遺跡	古墳，平安	前方後方墳，粘土槨鉄製品，鏡塚，銅製経筒，陶磁器，	①段谷地所開発株式会社「京の隈遺跡」1976年
3	神松寺遺跡	弥生前期	甕棺群	②水野清一，島田貞彦「北九州における甕棺調査報告」(人類学雑誌第43巻10・11号) 1928年
4	神松寺御陵古墳	古墳後期	前方後円墳，横穴式石室	福岡市教育委員会「神松寺遺跡」1978年
5	浄泉寺遺跡	弥生，古墳	住居跡，竪穴群	③東洋開発株式会社「浄泉寺遺跡」1974年
6	カルメル修道院内遺跡	先土器，弥生前期	尖頭石器，甕棺，土壙墓，銅鋼	文献①所収，銅鋼副葬土壙墓は1976年7月に調査
7	片江辻遺跡	古墳後期	住居跡	福岡市教育委員会「片江辻遺跡」1977年
8	片江西遺跡	弥生中期	甕棺	文献②所収
9	五ヶ村池遺跡	縄文前期	曽畑式土器，石器	④福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第1集」1969年
10	七隈古墳群	古墳後期	古墳群8基	1969年第1次，1970年第2次調査
11	大谷古墳群	古墳後期	20基以上の古墳群	⑤福岡市教育委員会「大谷古墳群」1972年
12	倉瀬戸古墳群	古墳後期	9基以上の古墳群	⑥倉瀬戸古墳群調査団「倉瀬戸古墳群」1973年
13	片江古墳群	古墳後期	6基以上の古墳群	⑦福岡市教育委員会「片江古墳群」1973年
14	早苗田古墳群	古墳後期	8基以上の古墳群	文献⑦所収
15	鳥越古墳群	古墳後期	5基以上の古墳群	文献⑦所収
16	小笹遺跡	弥生後期	石蓋土壙墓，祭祀遺構，土器群，石器，鉄器	⑧福岡市教育委員会「小笹遺跡発掘調査報告書」1973年 ⑨福岡市教育委員会「小笹遺跡第2次発掘調査報告」1975年
17	宝台遺跡	弥生，古墳	住居跡，甕棺，祭祀	⑩日本住宅公団「宝台遺跡」1970年
18	丸尾台遺跡	弥生中期	甕棺，鉄刀，前漢鏡	文献⑩所収
19	笹栗遺跡	縄文，弥生，奈良	縄文晩期土器，石器，弥生土器，製鉄遺構	⑪福岡市土地開発公社「笹栗古代製鉄遺跡発掘報告書」1969年
20	瀬戸口古墳群	古墳後期	9基以上の古墳群	⑫株式会社リコー「瀬戸口古墳群」1975年
21	井手古墳群	古墳後期	4基以上の古墳群	⑬福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第2集」1970年，1974年秋発掘調査，未刊
	大平寺古墳群	古墳後期	8基からなる古墳群	文献⑬
	箱ノ池遺跡	縄文早，晩期	押型文土器，石器	文献⑬
	四十塚古墳群	古墳後期	25基以上の古墳群	文献⑬
	大牟田古墳群	古墳後期	43基以上の古墳群	⑭福岡市教育委員会「大牟田15号，43号墳発掘調査報告」1971年
	柏原遺跡	先土器，縄文早期～後期，古墳，中世		1979年から福岡市教委によって調査中。

て現在も調査中の柏原遺跡では，広大な調査地に先土器時代から縄文時代ほぼ全期間，そして中世に至る遺構，遺物が検出されており，この地域の先土器・縄文時代のさらに詳細な様相が，明らかにされると思われる。

弥生時代になると，この地域においても遺跡数は急激に増加し，人々の生活空間として積極的に利用されるようになったことを示すが，早良・福岡の広大な沖積平野部とは異なり，前期初頭からの連続的発展を示す拠点となる遺跡は，これまでのところ発見されていない。今のところこの地域の弥生時代の幕開けは，前期も後半以降からであり，樋井川に望む丘陵先端部に立地する田島オゴモリ遺跡をはじめとして，神松寺丘陵の神松寺・浄泉寺・カルメル修道院内遺跡などに集落や墳墓が営まれている。その後の発展過程は，宝台遺跡の集落構造や，前漢鏡や鉄製武器を副葬した甕棺墓で知られる丸尾台遺跡に見るように，この地域も北部九州弥生時代中期社会の一般的形態にある。弥生時代後期についても遺跡の分布はさらに拡大すると考えられ，発掘調査では樋井川右岸の丘陵上に立地する小笹遺跡や神松寺遺跡から，前半から中葉にかけての祭祀遺構，住居跡などが検出されている。しかしながら，弥生時代後期後半から古墳時代に至る集落や墳墓についてはこれまで調査されておらず，この地域の古墳時代前夜の様相は明らかではない。

古墳時代では，樋井川の西岸の丘陵頂部に立地する田島京ノ隈遺跡で，4世紀末に築造された割竹形木棺を内部主体とする前方後方墳が調査され，この地域への畿内型古墳の伝播が認められている。また，神松寺丘陵には6世紀後半に築造された横穴式石室を内部主体とする神松寺御陵古墳がある。両墳は，この地域の古墳時代の大きな特徴をなす油山北麓一帯，および鴻ノ巣山丘陵に展開する後期古墳群の在り方とは様相を異にした独立墳であり，この地域に君臨した首長墓の系譜を示す古墳であろう。この時代の集落は，田島オゴモリ遺跡，片江辻遺跡，浄泉寺遺跡の調査で断片的に明らかにされており，この地域の古墳時代における発展過程を経済的基礎と政治的諸関係との相互の関係において把握する課題を示している。

続く歴史時代の遺跡については，笹栗遺跡の奈良時代製鉄遺構，京ノ隈遺跡で平安時代末期の経塚が発見されているにすぎなかったが，最近の調査では，柏原遺跡から鎌倉時代の館跡を含む遺構が発見されており，律令制下の早良郡此伊郷に比定されるこの地域の古代中世史の解明に新たな資料を提供しつつある。

III．発掘調査の概要

1．遺跡の立地(Fig. 2)

すでに述べたように，浄泉寺遺跡は茶山丘陵より分岐する神松寺丘陵に立地する。この丘陵は，標高54.8mの金山から派生して北東にのびる支脈で，長さ約500m，幅100m，標高20～30mの細長い台地が，片江川，一本松川と樋井川の合流する友泉付近まで続いている。この台地は，両側に小さな谷間が所々に開析され，いくつかの頂部をつくり出しつつのびている。かつて丘陵の大部分は山林や果樹園であったが，現在は大部分が宅地造成によって削平され，自然地形を残すところはほとんどない。

浄泉寺遺跡は，この神松寺丘陵のほぼ中間に位置する丘陵上に占地する。この部分は，さらに南側に2ヶ所，北側に1ヶ所の頂部をもつ丘陵で形成され，南側丘陵は，東西に並ぶ二ヶ所の頂部が標高25.6mの等高線に囲まれてあり，北側丘陵との間には東西から小さな谷が入り，鞍部となっている。北側丘陵は最高位の標高24.5mを測り，四方に傾斜しているが，すでに南と東側は宅地化されて失われている。浄泉寺遺跡は，この南北両丘陵を中心とする範囲に立地しているが，1973年に南側丘陵が発掘され，今回調査した区域は北側丘陵部分に当る。

ところで浄泉寺遺跡の占地する神松寺丘陵には，ほぼ全域にわたって遺跡の分布が認められ，神松寺遺跡群を形成している。この遺跡群は時期的には先土器時代から古墳時代を含むが，先土器，縄文の両時代については確実な包含層や遺構は検出されてはおらず，主体となる時期は弥生時代前期後半から古墳時代後期までである。神松寺丘陵に人々が初めて進出し，集落や墳墓を営み始めたのは，弥生前期後半の頃であり，カルメル修道院内遺跡，浄泉寺遺跡，神松寺遺跡（第1地区）において示される。これら3つの遺跡は約100mの距離をへだてて連続しており，これら遺跡間の相互関係および変遷過程の解明は，小地域における弥生時代社会の政治的，経済的発展過程の研究に重要な示唆を与えるものとなろう。また，古墳時代については，浄泉寺遺跡は4世紀末から5世紀にかけての住居跡群が複合しており，6世紀には神松寺遺跡と重なって御陵古墳が築造され，神松寺丘陵は引き続き人々の生活の場となるのであるが，これらの神松寺丘陵遺跡群の消長と変遷については，今回の発掘調査結果を踏まえて最後に考察する。

2．発掘調査区

今回発掘調査を行なった区域は1973年調査地の北側に隣接し，現況は周囲が宅地化されたものの，独り山林のまま残されていたところである。発掘調査区の設定は，対象地南側の東西に

Fig. 2　神松寺丘陵の地形と遺跡分布図（1/5000）

1．浄泉寺遺跡第2次調査区　2．カルメル修道院内遺跡　3．須恵器表採地点
4．浄泉寺遺跡第1次調査区　5．神松寺遺跡第2地区　6．神松寺御陵古墳
7．神松寺遺跡第1地区　8．神松寺遺跡第3地区

走る道路上に基準線を設け，対象地全域を覆う10m×10mの方眼を組んだ。そして北西隅から東へアラビア数字，南へアルファベットを付し，発掘区の呼称はその東南側方眼とした。この発掘調査区はあくまで任意的なものであり，1973年調査時の基準線と何ら一致しない。

3．遺跡の層序

本遺跡は1973年調査区域の北側に連続する丘陵にあり，標高24.50mを最高位として西側に張り出す尾根とその斜面を含んでいる。北側は尾根の平坦面から急傾斜をなして下り，西側と南側はややゆるやかな傾斜でのびている。傾斜面は自然地形ではなく，人為的に削られている痕跡があり，現況は山林であるが，段々畑として土地利用されていたことが知られる。基盤土は花崗岩風化土で，削平されている南側崖面には花崗岩の混入が認められた。この基盤土の上には灰褐色土が被っており，弥生土器，須恵器などの遺物を包含している。この層は尾根頂部においては殆ど認められず，傾斜にしたがって次第に厚くなり，北側や西南側斜面下部では厚さ40～50cmで堆積している。長い間山林として残されていたため，表土は竹木の根を含む腐植土が厚さ10～15cmで覆っている。

4．遺構の配置

1973年の発掘調査では，南側丘陵部が調査対象となり，弥生時代の袋状竪穴群，竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡などの遺構が検出され，今回の調査対象地についても，これらの遺構が連続することが当然予想された。また，二度にわたる試掘調査の結果，弥生土器，須恵器，土師器などを含む包含層を検出すると共に，竪穴住居跡などの遺構を確認し，やはり今回の調査対象地は第1次調査地区から連続する弥生時代，古墳時代の集落遺跡であることが知られた。本調査はこれらの結果を念頭に置いて遺構と遺物の検出に努め，多大の成果を得ることができた。検出した遺構は弥生時代の袋状竪穴31基，甕棺墓3基，竪穴住居跡1軒，古墳時代の竪穴住居跡19軒，掘立柱建物8棟，中世の墳墓を含む土壙6基，溝状遺構，その他である。

ところで，これらの遺構は全体として丘陵尾根の稜線に沿って展開する状況を示している。弥生時代の袋状竪穴群は，調査区東端部のH－9区を東限として尾根に沿って西側に連続する。尾根の先端付近に集中する傾向を見せるが，全体的にはまばらに分布している。E－3区にあるSF24は最も西端にあり，袋状竪穴群の分布域を限るものと思われる。また，北側急斜面E－8区にあるSF34についても同様であろう。甕棺墓は小児用甕棺3基のみであり，G－8区とF－6区に分布する。いずれも袋状竪穴の内部から検出した。これら3基以外には全く認められず，その出土状況の特異さと合わせ，甕棺墓地の一般的な在り方とは異なっている。弥生時代の竪穴住居跡は，調査区東端部H－9区に1軒だけ検出された。時期的に前段階である袋

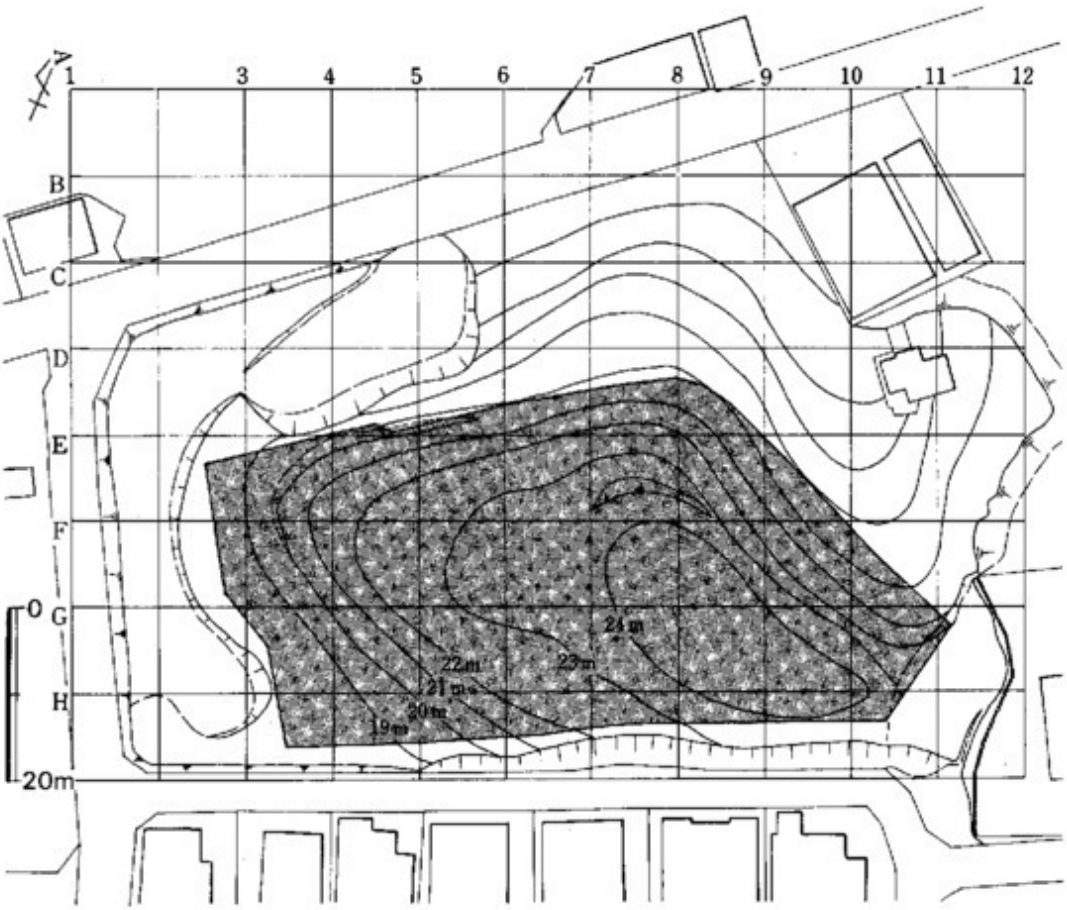


Fig. 3　浄泉寺遺跡の地形および発掘区域図（縮尺1/900）

状竪穴群の分布とは重ならず，1973年調査区から連続する住居跡群の分布域の北限となるものであろう。古墳時代竪穴住居跡群は，袋状竪穴群の分布と重複し，尾根に沿って東から西へ連続する分布を示している。Ｅ－４区のＳＡ19が最も西側にあり，分布の西を限ると考えられる。北側斜面部には検出されず，南側から西側斜面部にかけての展開を示している。掘立柱建物は，尾根先端部Ｆ－７区にあるＳＢ01を除き，尾根を囲むように南側から北側にかけての斜面に分布する。これらは竪穴住居跡の分布と重なっているが，Ｅ－６区からＥ－８区にかけては急斜面を造成しており，竪穴住居跡の分布域とは重複しない。土壙，土壙墓は調査区域に散在しており，特別な分布を示していない。

以上のように，今回の発掘調査区域には弥生時代，古墳時代を中心とする遺構を良好な状態で検出した。これらの遺構と1973年の調査成果とを合わせて分析すれば，両時代における集落構造の一端を明らかにできると考えられる。

次に各々の遺構について報告する。

Ⅳ. 遺　構

1．袋状竪穴

竪穴遺構のうち，床面および上面の平面形が円形もしくは楕円形で，断面形がフラスコ状あるいは円筒形の形態を有するものを袋状竪穴と総称した。今回の調査では31基を確認した。1973年の南隣地における調査例を含めると，当該遺跡が立地する神松寺丘陵では77基の袋状竪穴が検出，調査されたことになる。これらの袋状竪穴は神松寺丘陵の原地形の変化に対応するかのように大きく4つのグループにそれぞれまとまって分布しているが，今回の調査地点は，この4つのグループのうち最も北側に位置するグループの分布範囲に相当する。以下袋状竪穴について記述するが，個々の竪穴の所見については，Tab.2を参照されたい。

袋状竪穴の分布

今回の調査区における分布のあり方について見ると，丘陵尾根頂部に比較的密集するグループと，尾根の西側緩斜面上に散在しているものとに分けられる。細かな時期ごとの分布状況の差異については総括編で検討するが，尾根上のものがやや新しい傾向を示すと思われる。

袋状竪穴の形態

検出された袋状竪穴のほとんどは，その上部が削平されており，さらに内壁が剝落しているため原形を保っているものは少ない。その中にあって，ＳＦ26は内部埋土の堆積状況や，内壁の遺存状況からみてほぼ原形を保っていると考えられる。その他若干の原形を保っているものとして，ＳＦ06・08・11・20・30・33・34があるが，いずれも内壁が崩落しており，完全なものではない。遺存状況が比較的良好なものを基準として，土層堆積の状況，および削平の度合を加味して形態的な特徴をまとめると以下のようになる。

Ⅰ類　断面形がフラスコ状のもので，竪坑と袋状部分とが区分できるもの(Ⅰ－ａ類)と，竪坑がなく，地表面から直接円錐台形状に掘りくぼめたと考えられるもの(Ⅰ－ｂ類)とに分けられる。上部の削平の度合で，両者の区分は難しいが，後者の内壁の立上りが前者と比べ，やや直角に近く，床面も若干深い。

Ⅱ類　断面形が円筒状をなすもので，床面から内壁がほぼ垂直に立ち上り，除々にすぼまって地表に至るもの。

Ⅲ類　内壁が床面から，垂直よりもやや外傾して立ち上がり，ふくらみをもったあと，とっくりの口のようにすぼまって地表へ続くと思われるもの。

床面，上面の平面形は，ＳＦ30・31を除いていずれも基本的には円形であったと考えられる。

またⅠ～Ⅲ類にまたがって，ＳＦ20のように床面中央に柱穴状小竪穴をもつものがある。

袋状竪穴内の埋土及び自然・人工遺物の堆積状況

今回の調査では，遺物を全く出土しなかったもの５基（ＳＦ04・07・10・11・18），床面および中層にかけて多量の土器等の遺物とともに，カキ，アサリを主体とする貝殻を出土したもの４基（ＳＦ06・27・30・31）が特に対照的な例としてあげられるが，これは明らかにその用途，機能の異なりがあることを表現しているものと思われる。したがって竪穴内の埋土，遺物の堆積のあり方について観察する必要があると考えられる。そして埋土の堆積状況について分類すると次の４類に分けられる。

Ａ類　竪穴内の埋土が一時的にまとまって堆積したと考えられるもので，堆積土は地山を形成する花崗岩風化土である。若干の腐植土壌が混入しているが，旧地表と考えられる。なお，床面から竪穴の深さの中位ぐらいまで，花崗岩風化土が堆積した後，有機質を含む腐植土が自然堆積しているものもあり，前者をＡ－１類，後者をＡ－２類とする。

Ｂ類　床面からある程度の厚さまで，有機質に富む腐植土が堆積しており，その後，壁の崩壊あるいは埋め戻された後，完全に埋まるまで自然堆積が続くもの。

Ｃ類　床面から上面まで，有機質腐植土壌が除々に自然堆積しているもの。

Ｄ類　Ａ～Ｃ類にまたがるが，堆積と堀削とを数回にわたり行なった痕跡があるもの。

さらに遺物の出土状況のあり方について分類すると次のようになる。

１類　袋状竪穴内から全く出土しないが，出土しても極めて少なく二次的な混入と考えられる状況のもの。

２類　床面には遺物がみられず，竪穴の中位あるいは上位に遺物がまとまって出土するもの

３類　床面あるいは床面から若干浮いて遺物が主としてみられるもので，遺物（特に土器）の量が最も少なく，また接合関係がルーズなものと，遺物の組み合わせ組成が推定できるようなまとまった在り方を示す場合がある。

４類　床面から竪穴の中位まで，何らかの間層をはさみながらも，大量に出土すると同時に遺物の組み合わせ（組成）が推定できるようなまとまった在り方を示すもの。

以上，各項目にわたる内容で調査所見を述べたが，その詳細な検討は総括編で行ないたい。ところで今回の調査の反省点は，木炭片・有機質分を多量に含む袋状竪穴の土壌サンプリングを行なうべきであったことである。なぜならば弥生時代前期末から中期初頭にかけて，稲作農耕が飛躍的に展開するといわれている中で，具体的にどのような経過を経て展開してゆくのか不明確な状況であるが，袋状竪穴の用途と機能は，それが集落と切り離して考えられないものであるがために，意外と多くの情報を提供してくれるかも知れないからである。調査担当者の反省として記しておきたい。なお袋状竪穴から出土した貝殻はすべて採取し分析を行なった。

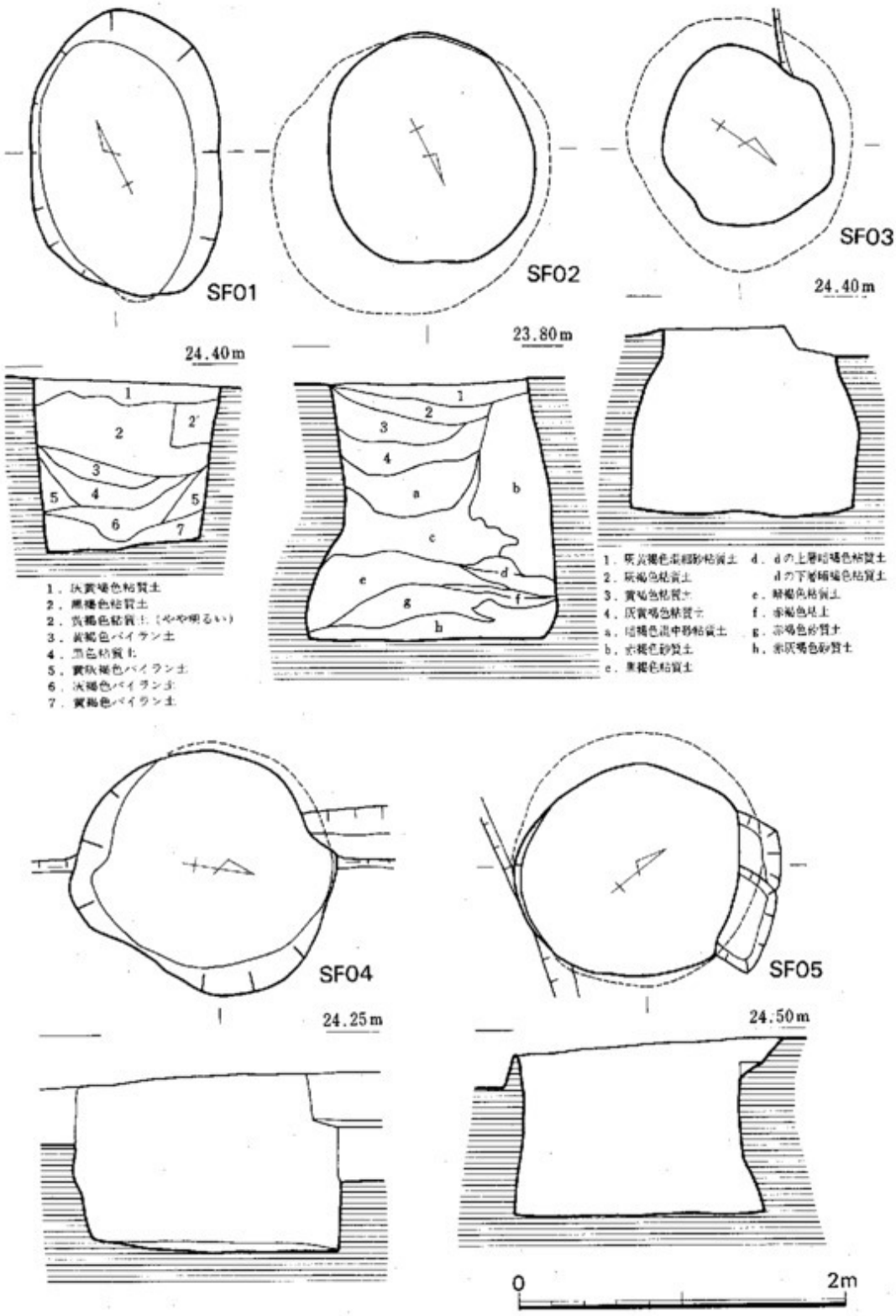


Fig. 4　袋状竪穴実測図 I（縮尺1/40）

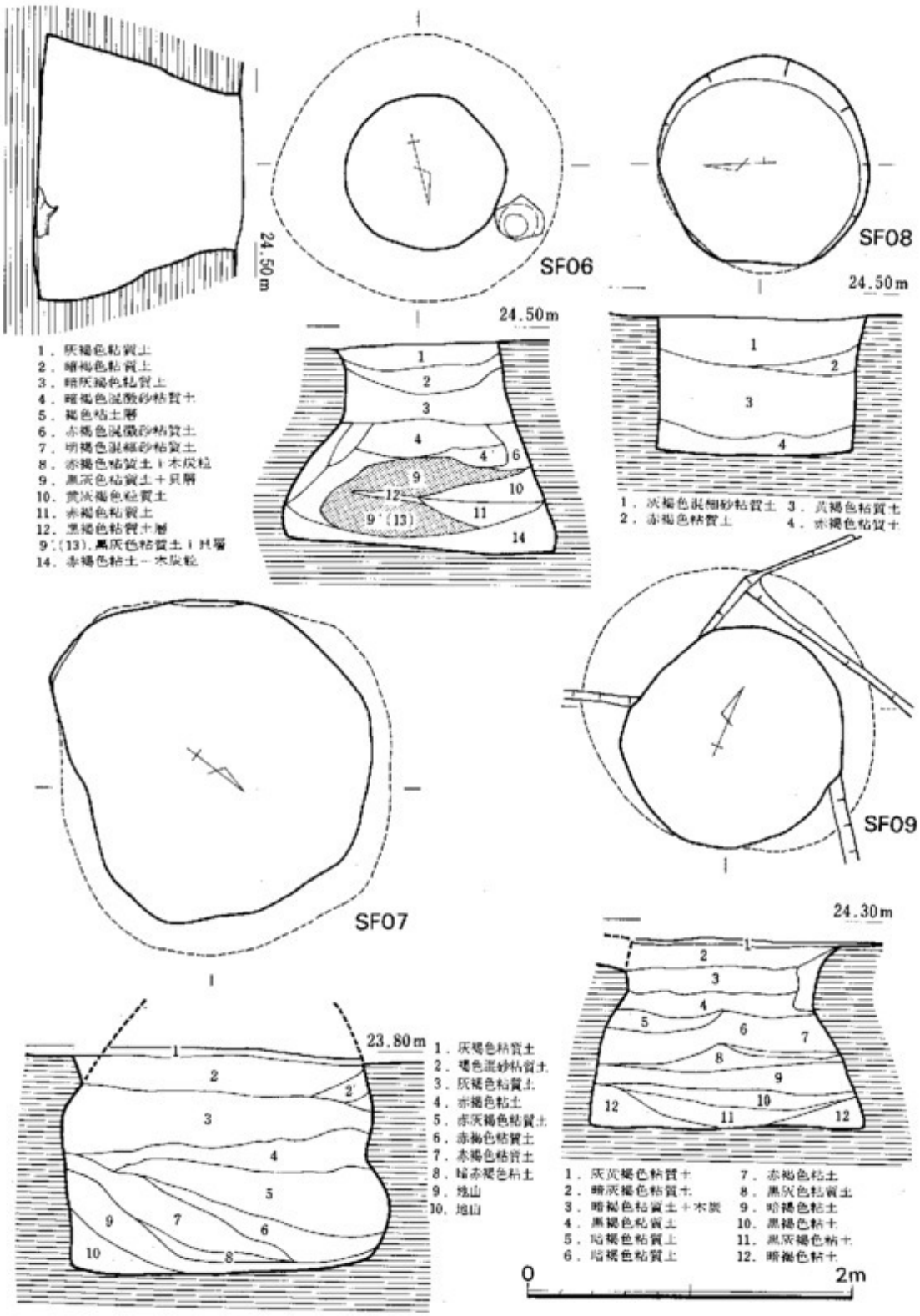


Fig. 5　袋状竪穴実測図 II（縮尺1/40）

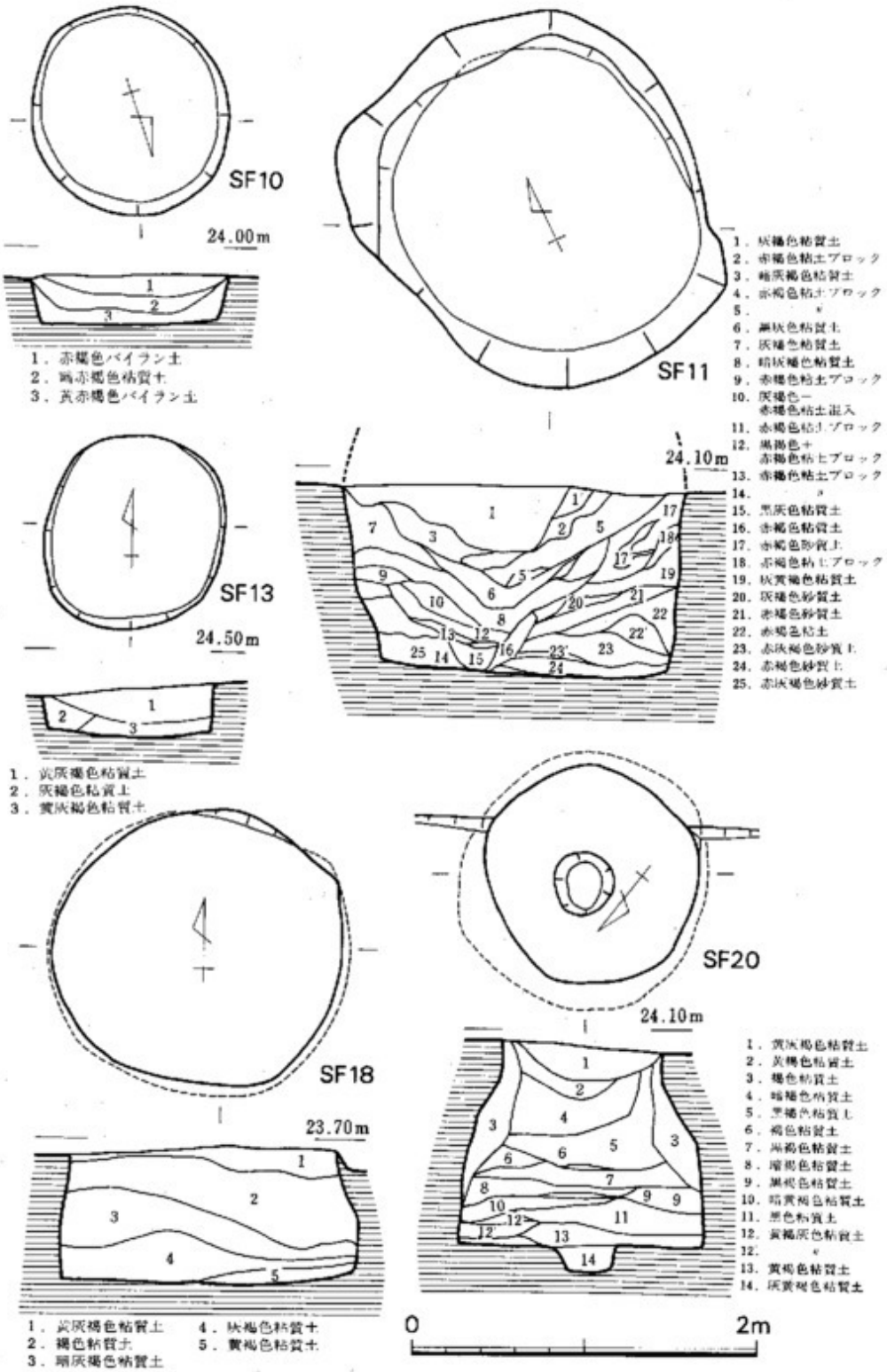


Fig. 6　袋状竪穴実測図 III（縮尺1/40）

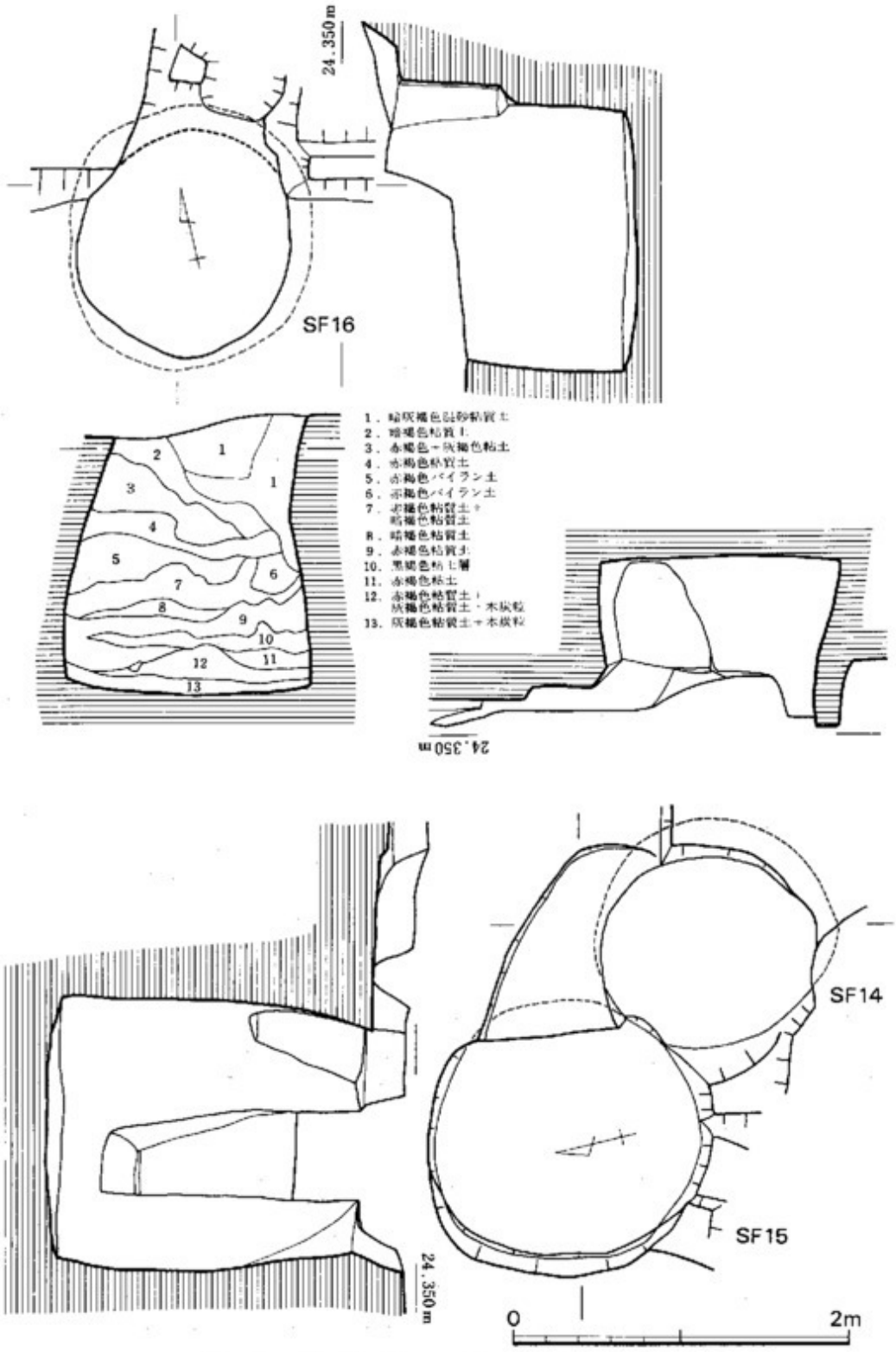


Fig. 7　袋状竪穴実測図Ⅳ（縮尺1/40）

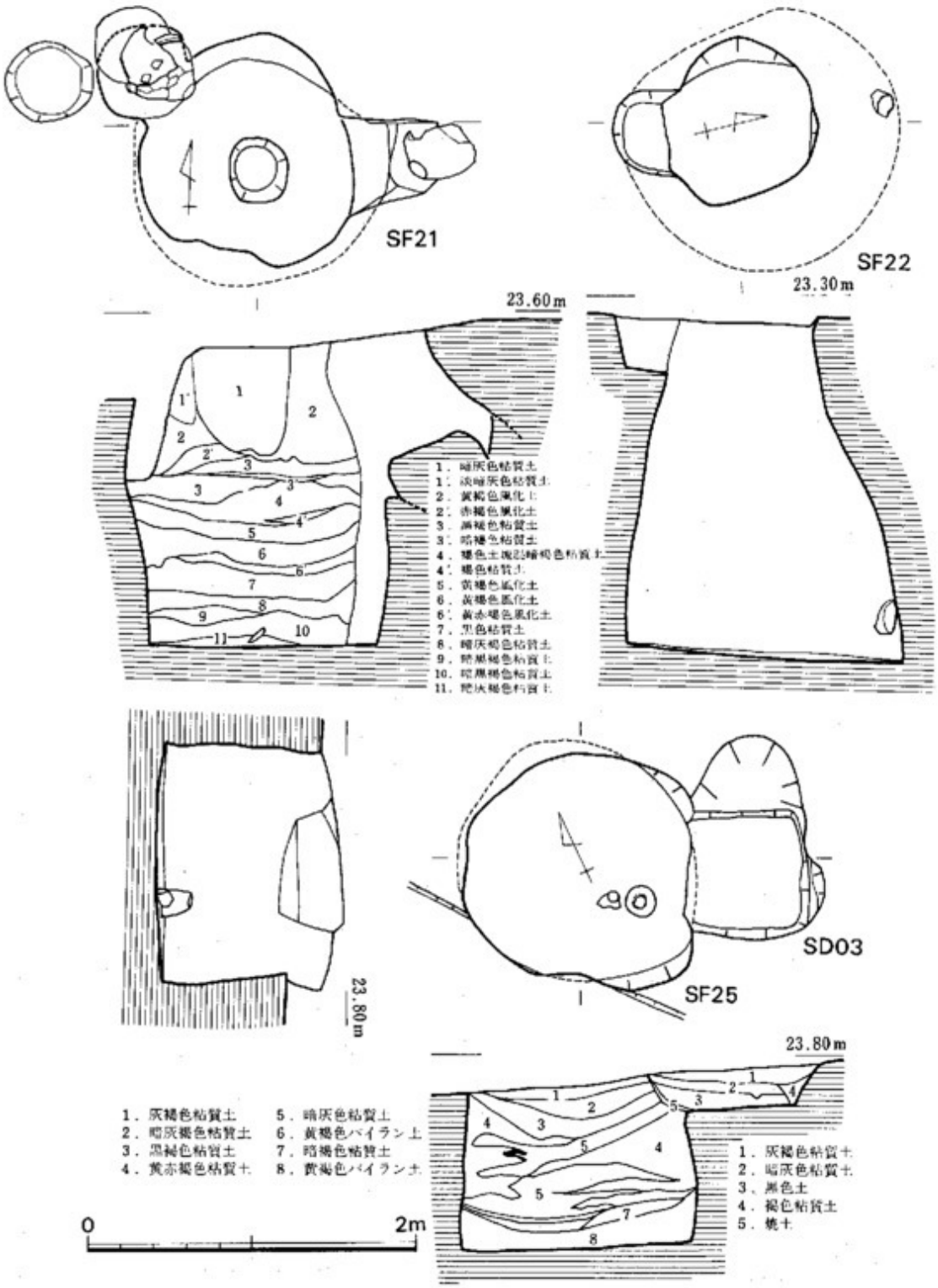


Fig. 8　袋状竪穴実測図 V（縮尺1/40）

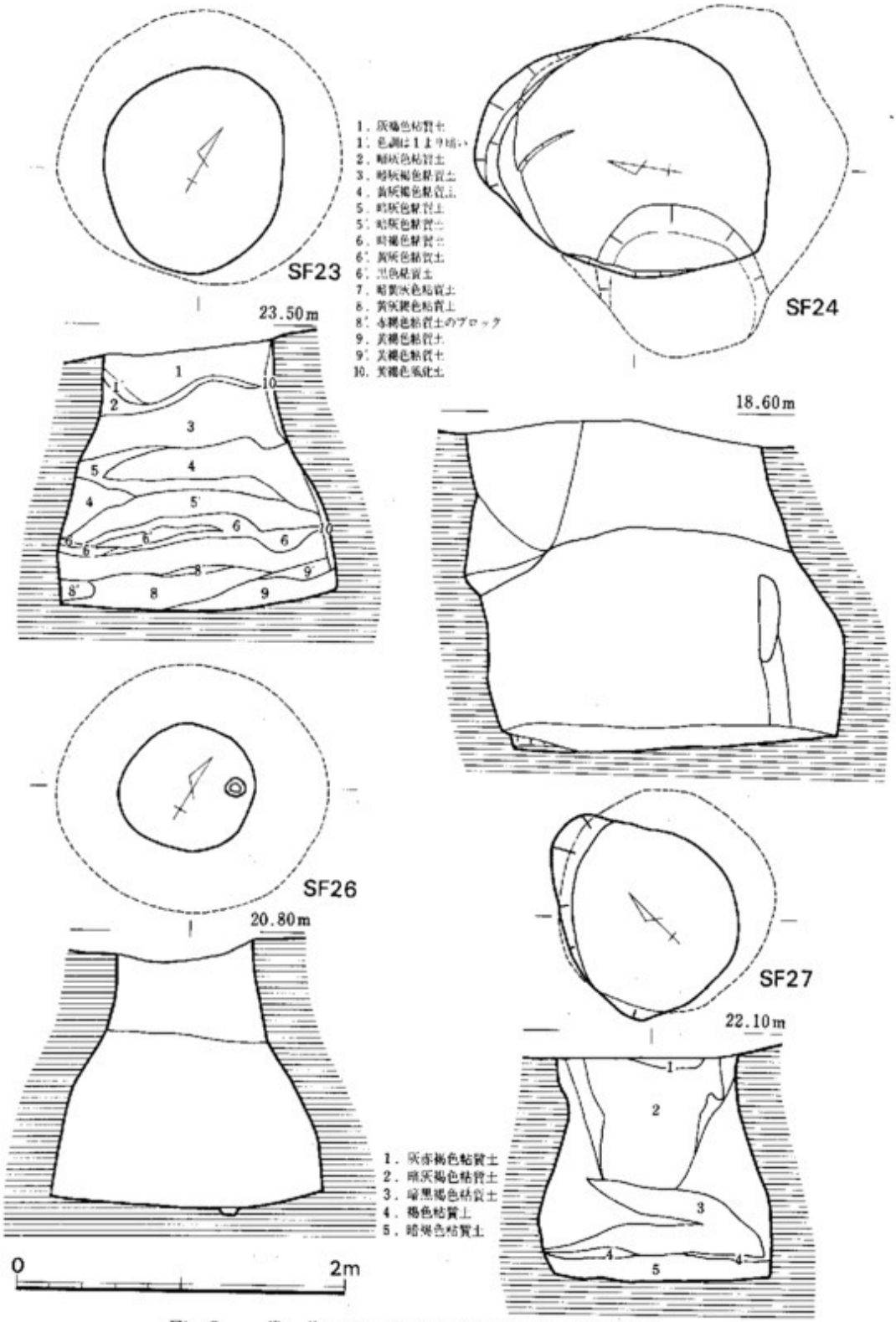


Fig. 9　袋状竪穴実測図 VI（縮尺1/40）

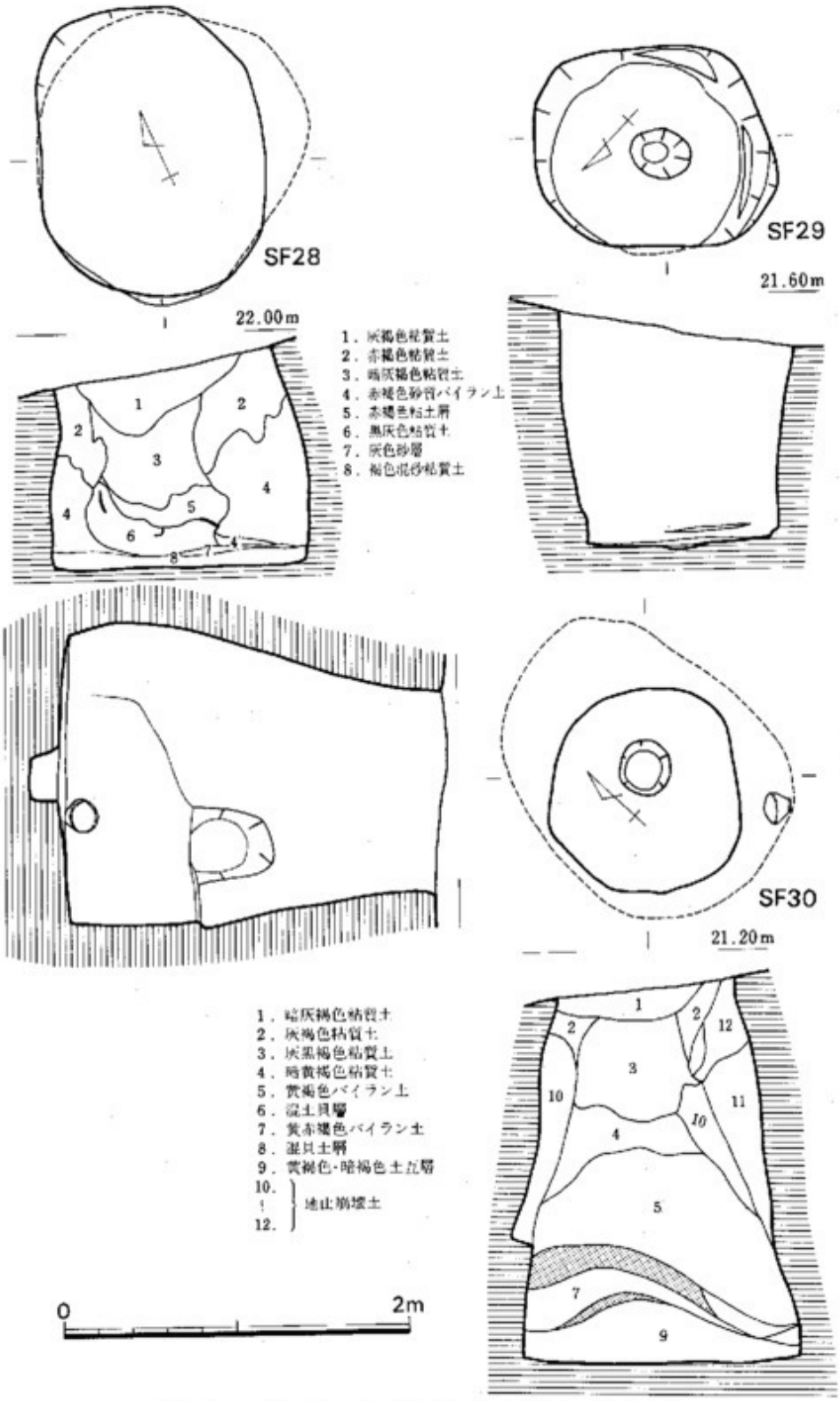


Fig.10　装状竪穴実測図 Ⅶ（縮尺1/40）

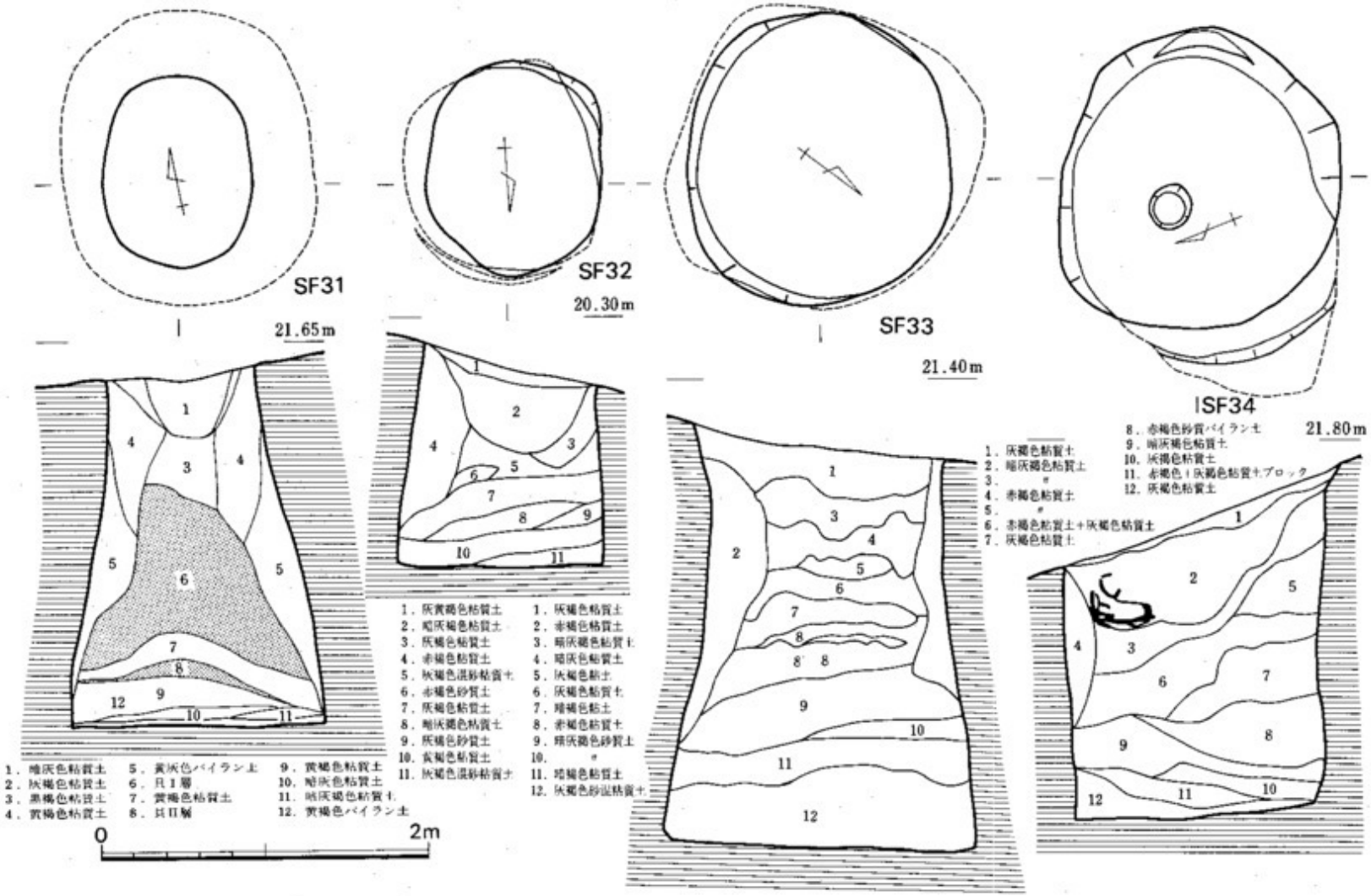


Fig.11　袋状竪穴実測図 Ⅷ（縮尺1/40）

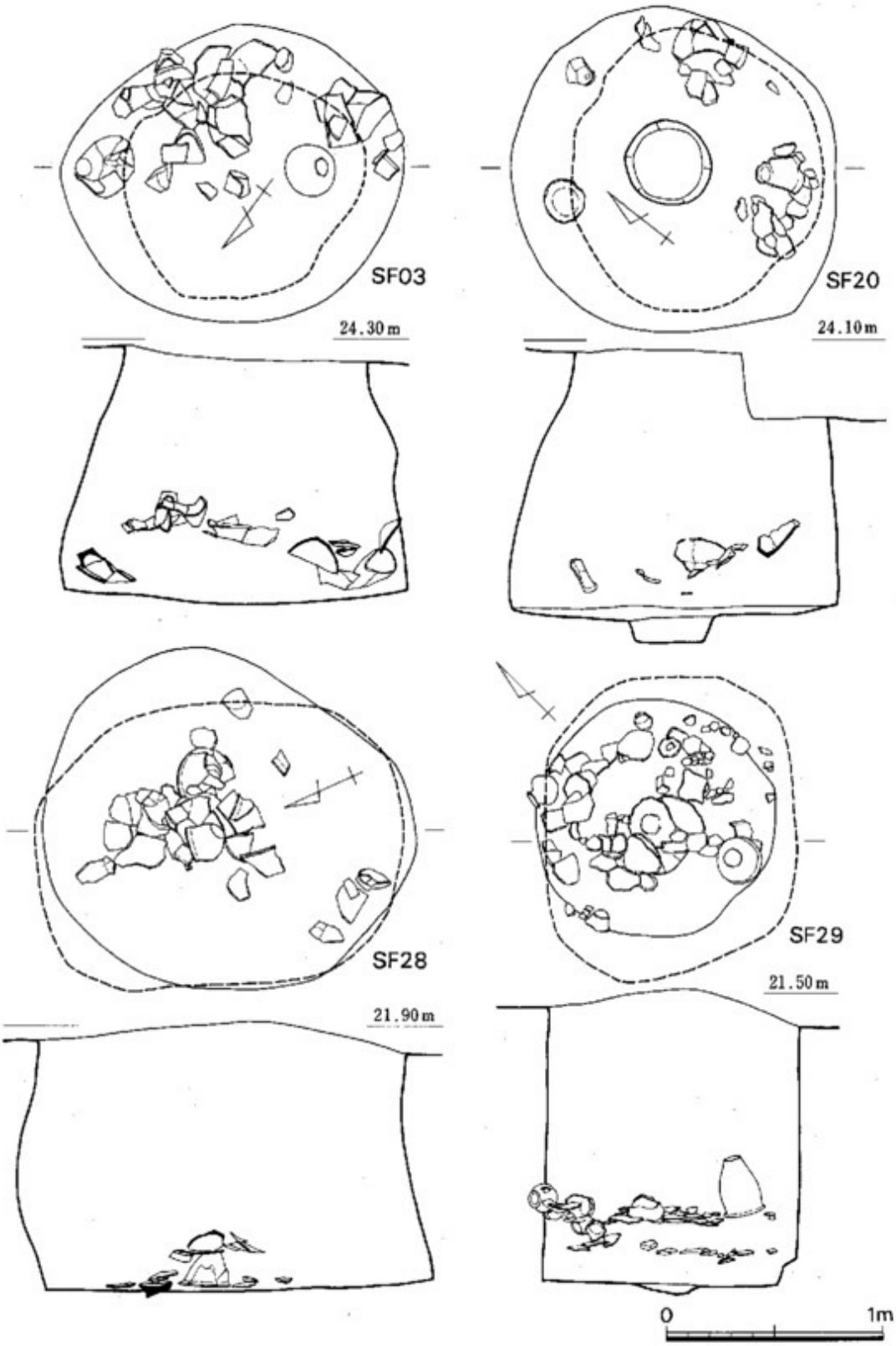


Fig.12　袋状竪穴遺物出土状況実測図（縮尺1/30）

Tab.2　袋状竪穴一覧表

	平面形（床面）	上面径×深さ（床面径）	床面標高	床面積	形態分類	埋没状況	遺物出土状況類型	床面ピット有無（計測値）	出土遺物概要	備考
		cm	m	㎡						
1	長楕円形（長楕円形）	170×120×100 (130) (120) (163×130)	23.230	1.700	III	B	1		弥生土器（甕・高杯片），黒曜石片，礫。遺物は少ない。	中期初頭
2	円形（円形）	140×135×189 (100) (100) (174×170)	21.770	2.268	I－a	B	4		甕，床面に多量の弥生土器（甕・壺）木炭片多し。	前期末～中期
3	不整円形（不整円形）	104×110×120 (100) (100) (157×138)	23.095	1.624	I－a	C	4		床面と中位にまとまる。復元可。有機物が多い。弥生土器（甕・壺），黒曜石片。	前期後半
4	不整円形（不整円形）	146×136×108 (90) (90) (164×150)	22.862	1.520	I	B	1			
5	不整円形（円形）	137×130×105 (105) (105) (155×155)	23.360	1.848	I	B	3		床面にある程度の量で出土するが，破片のみ，復元可。弥生土器(甕)。	前期末
6	円形（円形）	100×94×125 (90) (90) (164×180)	23.160	2.244	I	B	4		中層から上位にまとまりがみられる。復元可。二層あり，床面に弥生壺。	前期後半
7	円形（円形）	214×204× (230×225)	22.586	3.748	I－b	A	1		弥生土器片(甕か)1点，黒曜石剥片，安武岩片，結十塊。	前期末
8	円形（円形）	134×130×79 (100) (100) (125×118)	23.515	1.136	II	A	1			
9	不整円形（円形）	137×135×142 (80) (80) (180×170)	23.008	2.516	I	C	1		中層より柱状片刃石斧1，弥生土器甕片，黒曜石剥片，床面から壺片，甕片	SK01墓壙を切る。中期初頭
10	円形（円形）	125×115×28 (?) (?) (116×110)	23.550	0.892	IIorIII	A	1			
11	不整円形（長楕円形）	188×190×105 (170) (170) (186×164)	23.395	2.388	III	C・D	1			
13	円形（円形）	115×108×31 (107×97)	24.012	0.856	I	A？	1		弥生壺片が上層より出土。	中期初頭
14	不整円形（円形）	168×138×216 (100) (100) (160×154)	22.247	1.956	II	A？	1		弥生土器甕・壺片，鉢片が上部より出土。	前期末 SF16に切られる
15	不整円形（円形）	128×165×100 (100) (100) (144×136)	23.329	1.496	I－a	A？	1		弥生土器片が上層に出土。	中期初頭
16	不整円形（円形）	150×150×150 (100) (100) (155×144)	22.597	1.832	IorII	B	1		弥生土器甕片が床面に出土。	中期初頭 SF14を切る

	平面形（床面）	上面径×深さ（床面径）	床面標高 m	床面面積 ㎡	形態分類	埋没状況	遺物出土状況類型	床面ピット有無（計測値）	出土遺物概要	備考
18	円形（円形）	168×154×86 cm（175×165）	20.850	2.656	I－b	A－1	1			
20	不整円形（円形）	115×130×125（100）（100）（150×150）	22.815	1.788	I－a	B	4	○（38×38×14）	弥生土器（甕・壺）土製紡錘車，投弾，石斧片。	前期末
21	不整円形（円形）	157×138×186（100）（100）（138×120）	21.560	1.406	IIorIII	B	3	○（40×36×25）	弥生土器片1片。	前期末～中期 SK02・03を切っている
22	不整楕円形（不整円形）	98×85×209（80）（75）（168×160）	21.053	1.656	II	B	2		弥生土器片（甕・鉢）。	
23	円形（円形）	125×110×174（175×168）	21.860	2.252	II	B	4		床面に太形蛤刃石斧弥生土器（甕）。中層に扁平片刃石斧叩石。	前期末
24	不整楕円形（不整円形）	180×144×207.5（130）（133）（214×207・105×97）	16.457	3.120	I	A－2	4	床面は2段作りになっている	中層に遺物のまとまり，最下層に弥生土器（壺）。	前期末
25	円形（円形）	130×140×116（130）（130）（148×145）	22.520	1.696	I	B	4		床面に並ぎにした弥生甕，中層遺物のまとまり（2～3個体分）木炭片，焼さ多し。	前期後半
26	円形（円形）	86×75×165（80）（75）（166×154）	19.110	1.956	I－a	A－2	1	○（13×13×6）	遺物は少ない。弥生甕片。	
27	円形（円形）	110×115×140（93）（100）（136×134）	20.560	1.512	I－b	C・D	4		貝層あり，貝層をはさんで上下層床面にまとまる。弥生土器（甕，壺，鉢）。	前期後半
28	楕円形（円形）	168×130×125（130）（130）（168×150）	20.680	2.016	I－b	C	4		木炭片多し，床面～中層にかけて多量の遺物。	前期末～中期
29	不整円形（円形）	134×122×137（100）（100）（111×105）	20.160	0.956	I	A－2	3	○（30×35×4）	床面に多量に遺物がまとまる。	前期後半
30	円形（隅丸方形）	117×114×225（100）（100）（178×138）	18.900	2.080	I	B	4	○（31×29×17）	貝層あり，貝層中に底部穿孔の弥生土器（甕）完形品あり。	前期後半
31	楕円形（隅丸方形）	117×90×218（178×154）	19.920	2.328	II	B	4		貝層あり，有機質，木炭多し，床面に遺物がまとまる。弥生土器（甕・壺）。	前期後半
32	不整円形（円形）	128×108×135（90）（93）（128×118）	18.840	1.208	II	C・D	2		中層に遺物のまとまりあり，木炭片多し。弥生土器（甕・壺・高杯・鉢）。	前期後半
33	円形（不整円形）	178×167×258（190×184）	18.562	2.736	I－a	B	4		床面・中層に遺物のまとまり，木炭片，有機物多し。弥生土器（甕・壺）。	
34	不整円形（楕円形）	171×184×216（100）（100）（148×210）	19.502	2.672	I	A－2	2	○（28×26×9）	上層にまとまる。	

2．甕棺墓

丘陵尾根部に集中する袋状竪穴の掘り下げの過程で，小児用甕棺墓3基を検出した。いづれも弥生時代前期後半～前期末にかけてのものである。甕棺墓は他にはみられなかったが，表面採集品の中に金海式に比定できる大型壺形土器の口縁部破片があることから，規模の小さな甕棺墓地が存在していた可能性がある。

SK01（Fig.13，PL.21）

SF09の北壁部分で検出された。墓壙はSF09によって切られており，遺構検出面では平面的に確認できなかったため，その形状については不明確である。おそらく，不整円形の竪坑を掘った後やや斜めに掘りくぼめたものと思われる。棺は壺形土器と鉢形土器を組み合わせている。鉢形土器は，頸部から上部を打ち欠き，主軸が真北で伏角が31°20′で据えられた壺形土器を覆うように被せている。棺内には，人骨および副葬品はみとめられなかった。

上棺はいわゆる亀甲タイプの鉢形土器で，口径27.4cm，器高 9.1cm，底部径25cmを測る。底

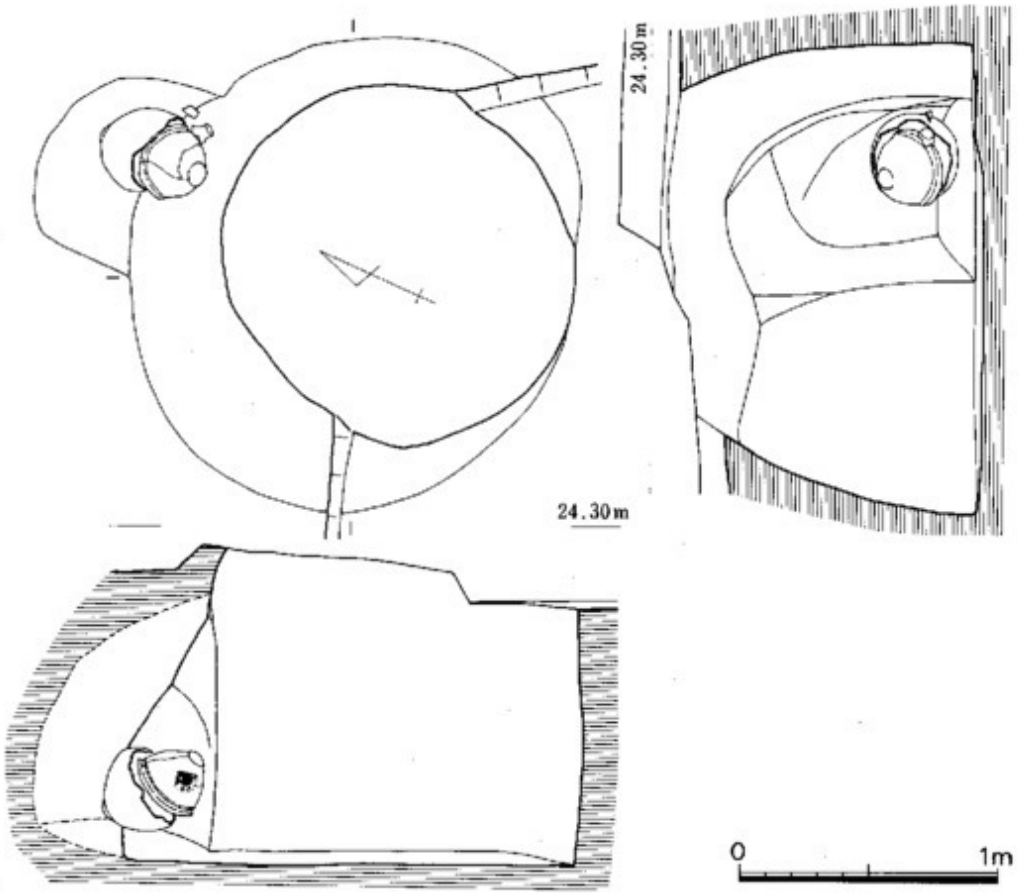


Fig.13　SF09内SK01出土状況実測図（縮尺1/30）

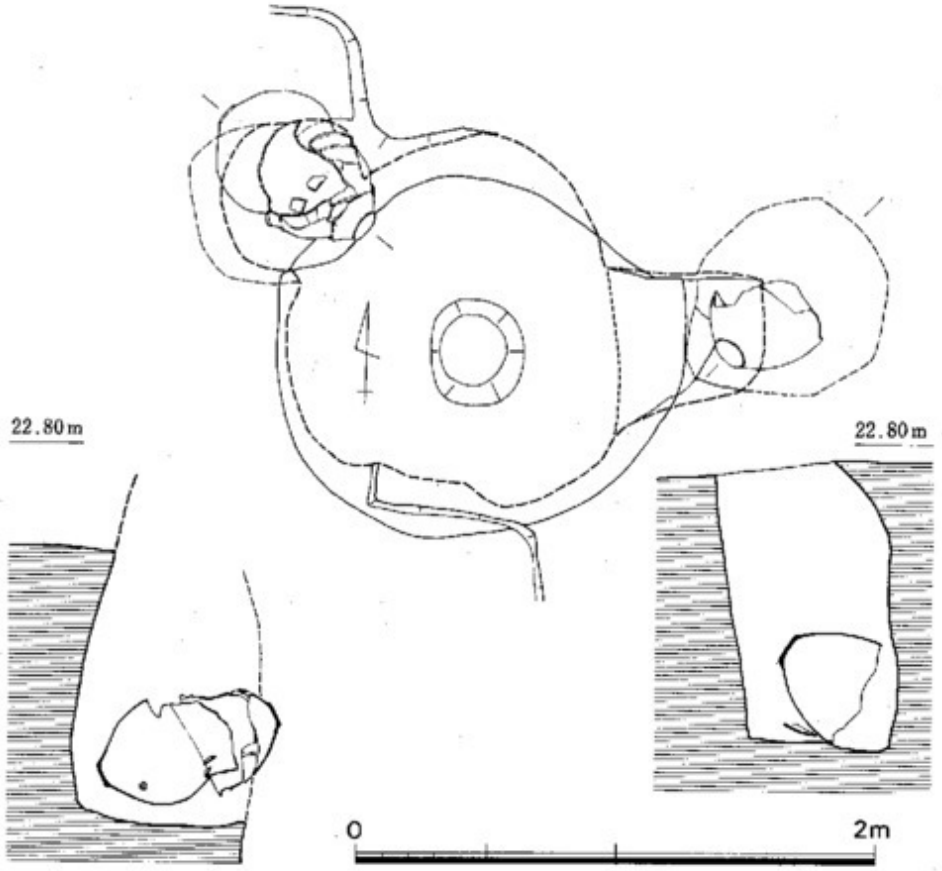


Fig.14　SF21内SK02, SK03出土状況実測図（縮尺1/30）

部は厚く成形上円盤貼付の名残りを若干とどめている。胴部には口縁下約 4.5cmに弱い三角突帯がつく。口縁部にはヘラ状工具による刻目が施されている。三角突帯から口縁部にかけてはナデ成形であるが，残る外面および内面はヘラ磨きが施されている。焼成は良好。胎土はやや粗い。底部から胴部の一部にかけて二次的な火を受けた痕跡がある。下棺は，中型の壺形土器で，頸部の付け根の弱い三角突帯と，肩部の一条の沈線間にヘラ状工具による無軸羽状文が施されている。胴部最大径は中位よりもやや上にあり，36.8cmを測る。現存高31.4cmで，焼成はやや悪い。内面はナデ仕上げ，外面はヘラ磨きが施される。日常用器の転用と思われる。

ＳＫ02（Fig.14，PL.21）

ＳＦ21の東壁部分で検出された。墓壙はＳＦ21により切られており，その上部の形状は不明であるが，不整円形の竪坑を掘削し棺を埋置したものと思われる。棺は単棺で，胴部中位から上部を打ち欠いた大型の壺形土器を用いている。人骨は出土しなかったが，屍体を墓壙床面に安置した後，覆い隠すように棺を置き，土を埋め戻したものと思われる。棺の主軸方位は，N

43′－E，伏角33°30′で埋置されている。

棺は，その全体の形態については，胴部中位から上部が打ち欠いてあるため知り得ない。底部はＳＫ01下棺と比較し，より分厚く，底部と胴部との境目に若干の稜をもっており，むしろ後述するＳＫ03の下棺として用いられた壺形土器に近い形態を有す。内面は丁寧なナデ仕上げ外面はヘラ磨きが施されている。日常用器の転用と思われる。

ＳＫ03（Fig.14，PL.21）

ＳＦ21の西北壁部分で検出された。墓壙上部から，東壁部がＳＫ02と同様ＳＦ21によって切られており，さらにＳＡ11からも一部削平されているため，墓壙の形状については不明であるが，不整長楕円形の竪坑をＳＫ02同様掘削したと考える。ＳＡ11の床面から墓壙床面まで深さ0.96ｍを測る。棺は，上棺が鉢形土器，下棺が口縁部を打ち欠いた中型の壺形土器である。棺の主軸方位はＮ－53°30′－Ｗで，伏角22°20′の傾斜で埋置しており，覆口式による。下棺の胴部中位からやや下位には，焼成後の外面からの打撃による穿孔がみられる。

上棺は，口径45.4cm，器高31.7cm，底部径10.5cmを測る鉢形土器である。口縁部は如意形で外へ大きく開き，その端部には弱い刻目が施されている。口縁直下には，三角突帯が貼付され口縁部同様に，ヘラ状工具による刻目が施されている。内面はナデ成形で，外面は口縁から突帯にかけてはナデ成形，底部から突帯までは，縦および斜位のハケ目調整がみられる。下棺は全体にやや細身の感がある壺形土器で，頸部が弱くしまり，肩部上端部に浅い一本の沈線が廻る。胴部の膨みはそう強くないが，丸味をもって続き，やや厚手の底部に接する。外面は胴部横位のヘラ磨きで，内面はナデ成形。胎土は粗砂が目立つ。焼成良好。現存高48.7cm，胴部最大径40.5cm，底部径11.7cmを測る。

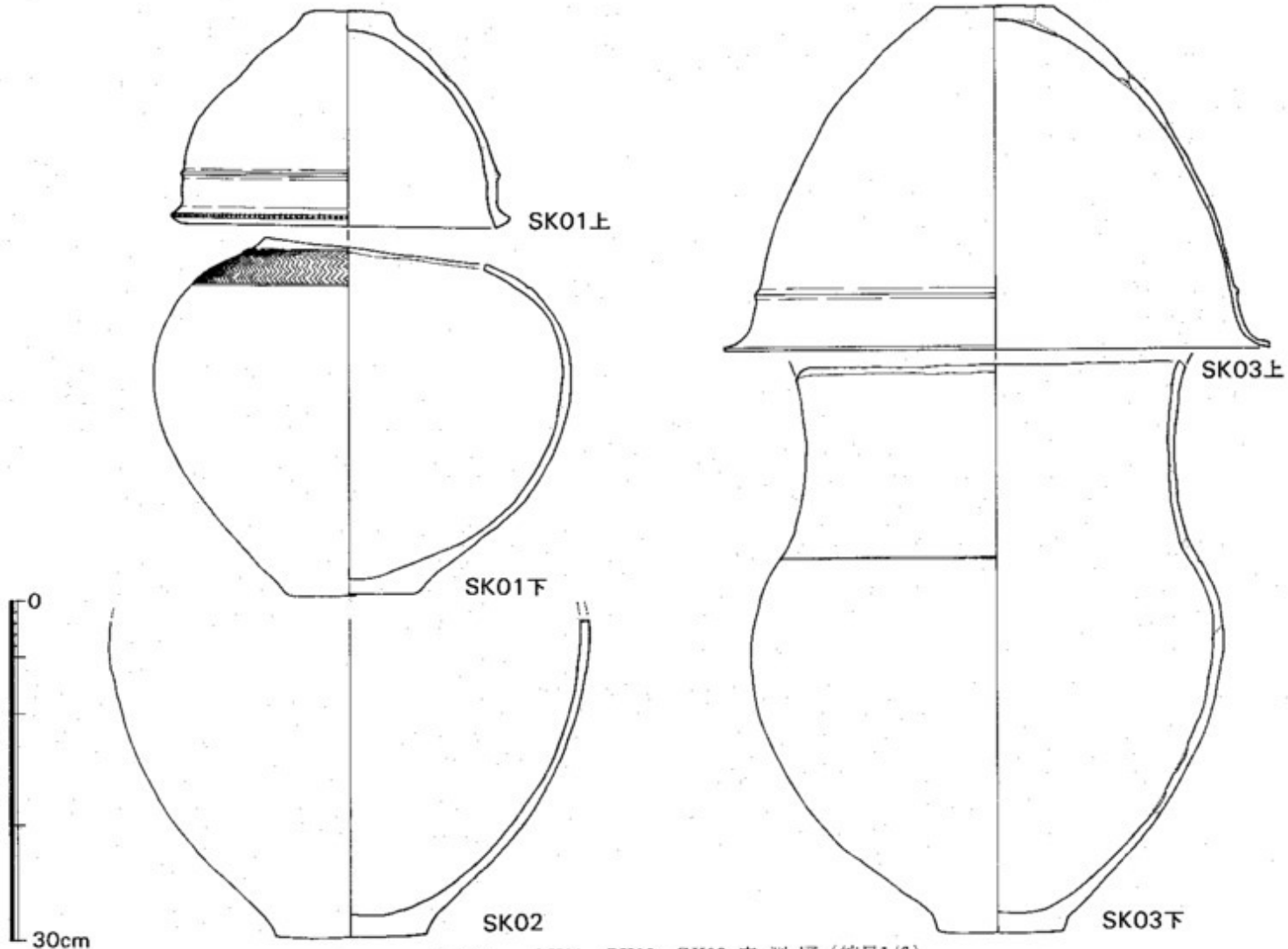


Fig.15　SK01, SK02, SK03 実 測 図（縮尺1/6）

3．竪穴住居跡

竪穴住居跡は総数20軒を検出した。調査区東端の平坦部から尾根に沿って西方に展開する分布状況を示し，北側の急斜面部分には認められなかった。西側から南側斜面にかけては，柱穴状のピット群が検出され，さらにいくつかの竪穴住居跡の存在が考えられたが，後世の削平などで明らかにしえなかった。これらの竪穴住居跡の中で，ＳＡ01のみが弥生時代のもので，他はすべて古墳時代のものである。

SA01（Fig.16，PL.22）

調査区東端平坦面にあり，平面円形を呈する。南側３分の２をＳＤ01，ＳＡ02によって切られ，北側を東西に走る溝ＳＣ01に切られている。東西の径6.65m，北側の壁高は32cmを測る。床面は北から南へゆるく傾斜し，ＳＡ02に切られている。柱穴はＰ５だけが認められ，床面からの深さは54cmである。他の遺構と重複しない部分の覆土中から少量の弥生土器片が出土したが，床面遺存の遺物は認められなかった。円形竪穴住居跡は本住居跡のみであり，西方の尾根上や斜面に古墳時代の住居跡との重複は認められず，本住居跡は第１次調査区より続く弥生時代住居跡の北限に位置するものと考えられる。

SA02（Fig.16，PL.22）

平面隅丸方形を呈し，ＳＡ01を切り中央部をＳＤ01に切られている。古墳時代住居跡の中で最も東側に位置し，同時代のものとの近接，切り合い関係は無いが，調査区域南側にグループをなすものが存在するかもしれない。主軸をほぼ南北（Ｎ1°Ｗ）にとり，北壁中央部にかまどを付設する。遺存状態は良好で，四壁を明瞭に残している。壁長は北壁長4.80m，南壁長4.80m，東壁長4.50m，西壁長4.30mを測る。壁高は南壁で25cmを残し，床面はＳＡ01床面より15cm程度掘り下げている。西壁から北壁のかまどまでと，東壁，南壁の一部に溝状の掘り込みがある。東南隅は長さ1.2m，幅0.5m程度の溝状の張り出し部が続いており，排水を意識した施設と考えられる。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４個であり，四隅からほぼ対角線状の位置関係にある。Ｐ１～Ｐ４の柱穴間の距離は，各々2.20m，2.60m，2.30m，2.60mを測り，床面からの深さは，各々42cm，10cm，14cm，20cmであり，Ｐ１が非常に深い。かまどは黄色粘土を用いて構築されているが，コの字形もしくは馬蹄形の形態は失なわれ，長さ1.20m，幅0.60mの不整形の赤変した焼土塊を残すにすぎない。遺物は覆土中に須恵器，土師器片を多く含んでいるが，北壁から西壁に続く周溝内から，比較的良好な遺存状態で完形品が出土した。

SA03（Fig.17，PL.23の１）

本遺跡の最も高位に検出された住居跡で，平面隅丸長方形を呈し，主軸をほぼ南北（Ｎ17°Ｅ）にとる。南側は，ＳＡ04とＳＡ05に切られており，ＳＡ06を含めてこれら４軒の中では最

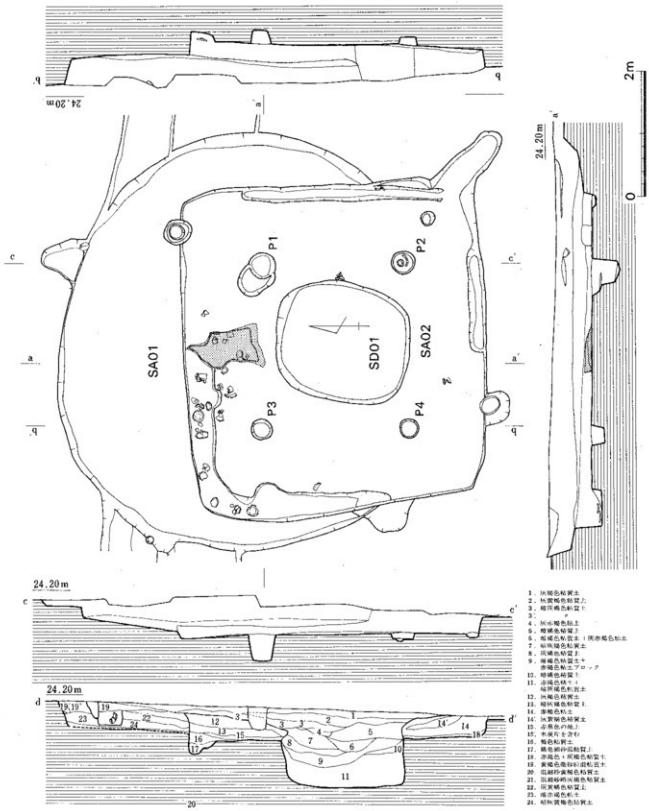


Fig.16　SA01, SA02 実 測 図（縮尺1/60）

も古い切り合い関係を示している。北壁長は3.70m，西壁長推定4.90mで南北に長い。壁高は東壁で30cmを残しており，床面はほぼ水平である。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４個であり，壁長に比例して南北に長い配置となっている。Ｐ１～Ｐ４の柱穴間の距離は，各々2.50m，2.00m，2.30m，1.90m，床面からの深さは，各々20cm，24cm，25cm，42cmである。東壁南半部に長さ80cm，幅55cmの浅いピットが掘り込まれ，この部分に焼土塊や炭化物が集中していることから，かまどが付設されていたと考えられる。覆土は３層に分かれ，各々の層に須恵器，土師器片を含むが，床面からは土師器の甕体部片が出土したのみである。

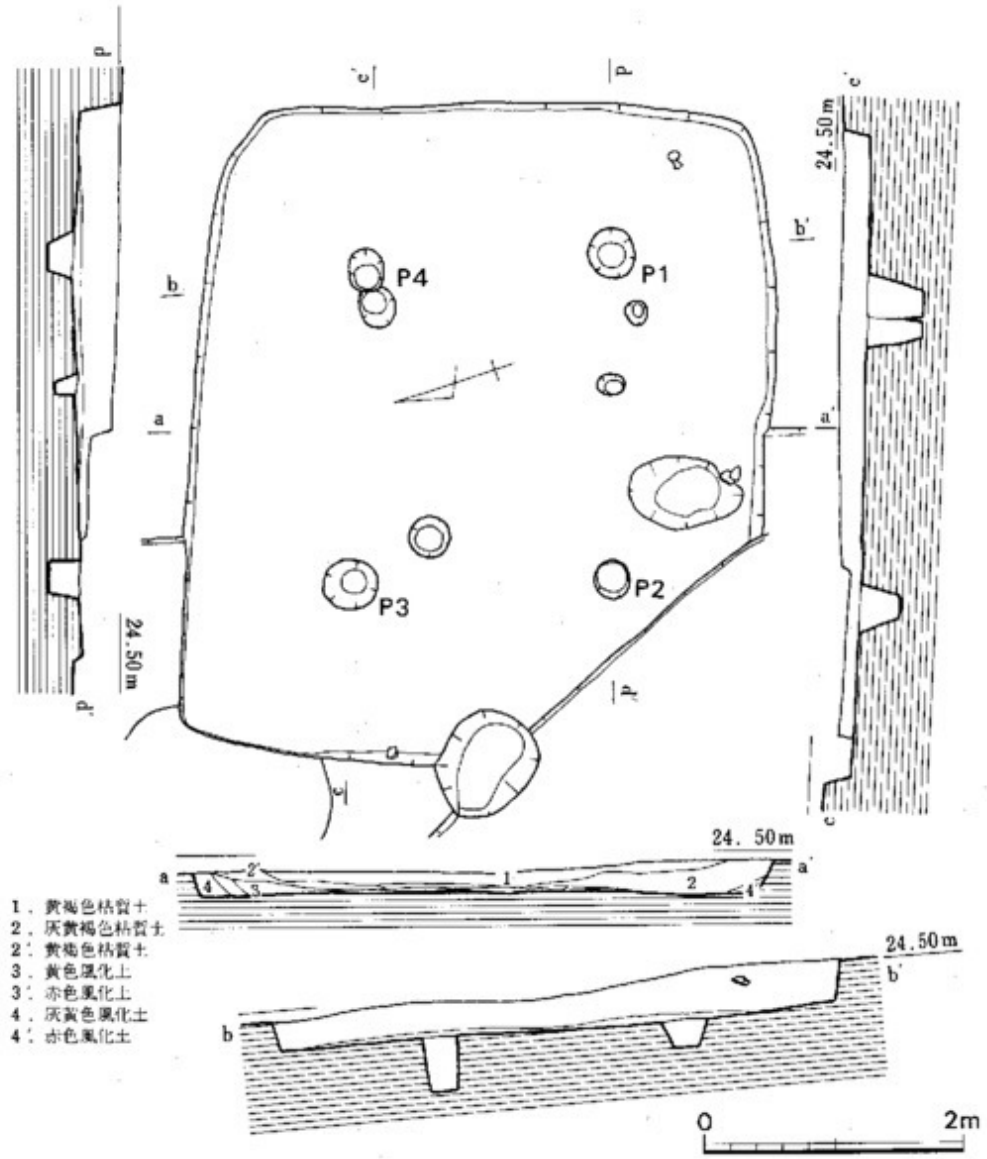


Fig.17　SA03　実　測　図（縮尺1/60）

SA04（Fig.18, PL.23の２）

ＳＡ03の南側に接して東壁北側をＳＡ05に，南側をＳＡ06に切られており，これら４軒の竪穴住居跡の中では２番目の古さを示すもので，平面隅丸方形を呈し，主軸をN70°Wにとる。西壁の南側寄りに偏してかまどを付設する。壁高は最大56cm，最少14cmで遺存状態は良好である。壁長は北壁長6.20m，南壁長6.15m，東壁長5.80m，西壁長5.60mを測り，東西がやや長い。床面はほぼ水平であり４個の主柱穴が検出されたが，ほぼ対角線の位置関係にあるものの，ＳＡ02などと比較して壁際に近い。Ｐ１～Ｐ４の柱穴間の距離は，各々3.30m，4.00m，3.30m，4.00mであり，柱間が長くなっている。床面からの深さは，各々25cm，40cm，40cm，35cmとばらつきがある。周溝などの施設は認められず，西壁の西南隅から2.20mの位置にかまど構築する。このかまどは黄色粘土を用いて構築されているが，当初の形態は破壊されており，長さ90cm，幅110cm，厚さ25cmの赤変した焼土塊が広がり，焚口の凹みと，土師器の破片を残すのみである。住居跡の覆土は６層にわたって堆積し，各々に須恵器，土師器の破片を多く含んでいるが，床面に遺存した状態の遺物は少量である。

SA05（Fig.19, PL.24）

ＳＡ03とＳＡ04を切りＳＡ06によって切られており，これら４軒の住居跡の中で３番目に営まれたものである。平面隅丸方形を呈し，主軸をN28°Wにとる。四壁の遺存状態は良好であるが，西南隅はＳＡ06によって失われている。壁長は，北壁長5.90m，南壁長6.30m（推定），東壁長5.40m，西壁長5.80m（推定）であり，平面形は東壁に向かってややすぼまる状態を示す壁高は東壁が最も高く最大32cm，西壁での最小６cmを測るが，これは地山が東北から南西へ傾斜しているためである。床面はほぼ水平であり，Ｐ１～Ｐ４の４個の主柱穴をもつ。これらの柱穴の配置は対角線上の関係になく，いびつである。Ｐ１～Ｐ４の柱穴間の距離は，各々2.20m，2.90m，2.70m，2.40mとばらつきがある。また床面からの深さは，各々14cm，16cm，12cm，10cmであり，いずれも浅くなっている。かまどは東壁のやや南寄りの位置に壁際に接して構築されている。黄色粘土を固めて作り，長さ94cm，幅90cm，平面形はコの字形である。中央部には土師器の甕が残されている。住居跡の覆土は３層に分かれ，各々に遺物を多く含む，特にII層中からは須恵器，土師器，紡錘車などが多量に出土し，この住居跡の年代決定の手がかりとなる床面遺存の須恵器，土師器も出土している。

SA06（Fig.20, PL.25の１）

ＳＡ04とＳＡ05を切り，ＳＡ03を含む４軒の竪穴住居跡の中で最も新しく営まれたものである。主軸をほぼ南北（N87°E）にとり，等高線に対し直交して造られている。４軒の中では最も小形の住居跡で，平面は方形を呈す。傾斜面にあるため，南壁の全部と，東西両壁の延長部を欠いているが，北壁長4.20mと同規模の四壁がめぐる平面方形の竪穴住居跡であろう。北壁

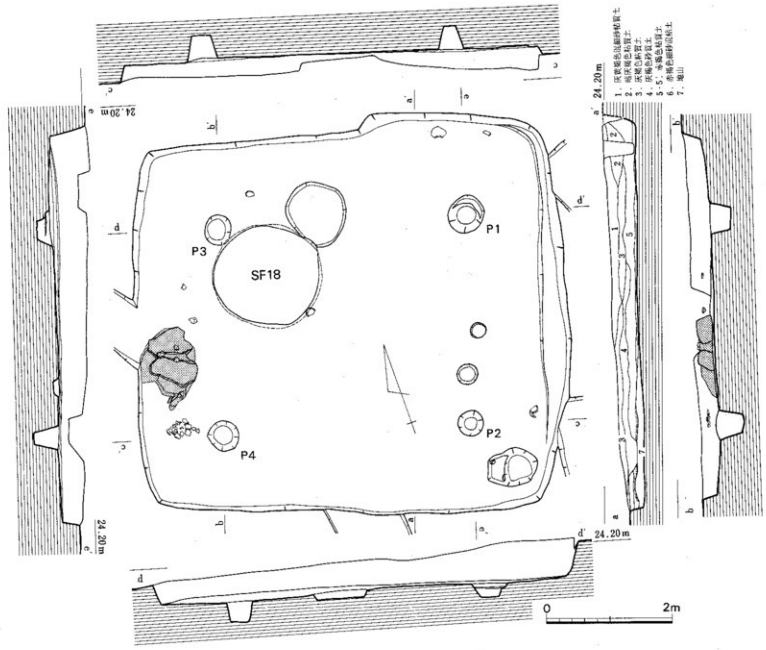


Fig.18　SA04　実　測　図（縮尺1/60）

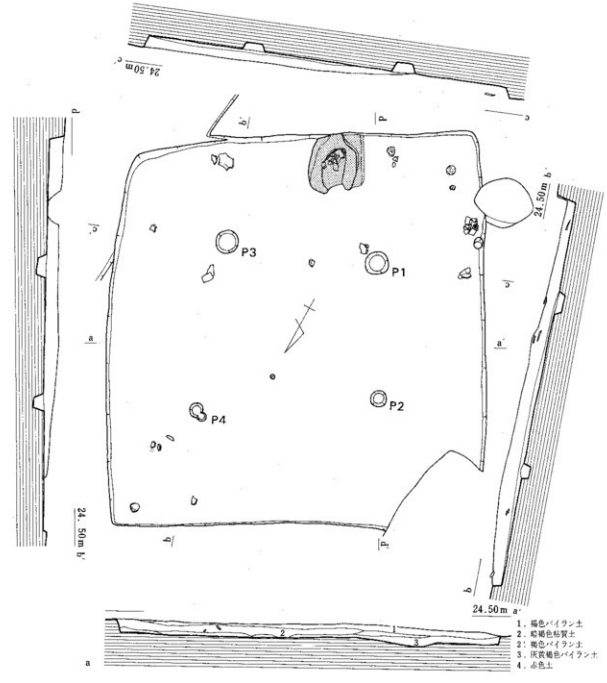


Fig.19　SA05　実　測　図（縮尺1/60）

の高さは32cm，床面はほぼ水平である。主柱穴は4個を対角線上に配している。P1～P4の柱穴間は，各々1.50m，1.60m，1.50m，1.60mであり，東西，南北の柱間距離が一致する。床面からの柱穴の深さは，各々25cm，28cm，30cm，30cmを測る。かまどの付設は認められないが，北壁際の浅い掘り込みや焼土塊などから，北壁に構築されていたかまどが破壊されたものと考えられる。この住居跡の覆土は2層に分けられ，II層中に須恵器，土師器片を包含する。また床面からも，少量の須恵器，土師器が出土した。

SA07（Fig.21，PL.26の1）

SA06の南方4.5mを隔てた位置にあり，主軸を北西一南東（N24°W）にとる。SA08の大部分を切っており，西壁をSD02に切られている。大部分が調査区を外れるために全体の規模と構造は不明であるが，北壁長は5.0mを測り，隅丸方形の平面をなすものであろう。北壁ほぼ中央部に長さ84cm，幅80cmを測り平面コの字形のかまどを付設し，土師器の甕が据えられている。覆土中から須恵器，土師器の破片を出土するが，確実に床面遺存の遺物は認められなかった。

SA08（Fig.21，PL.26の1）

北壁と東西壁をわずかに残すのみで大部分をSA07によって切られ，東壁延長部も調査区を外れる。等高線に直交して主軸を南北（N1°E）にとる。唯一残る北壁長は3.75mであり，小形の住居跡である。西北壁隅から東壁まで幅40～20cm，床面からの深さ4～5cm程度の浅い周溝

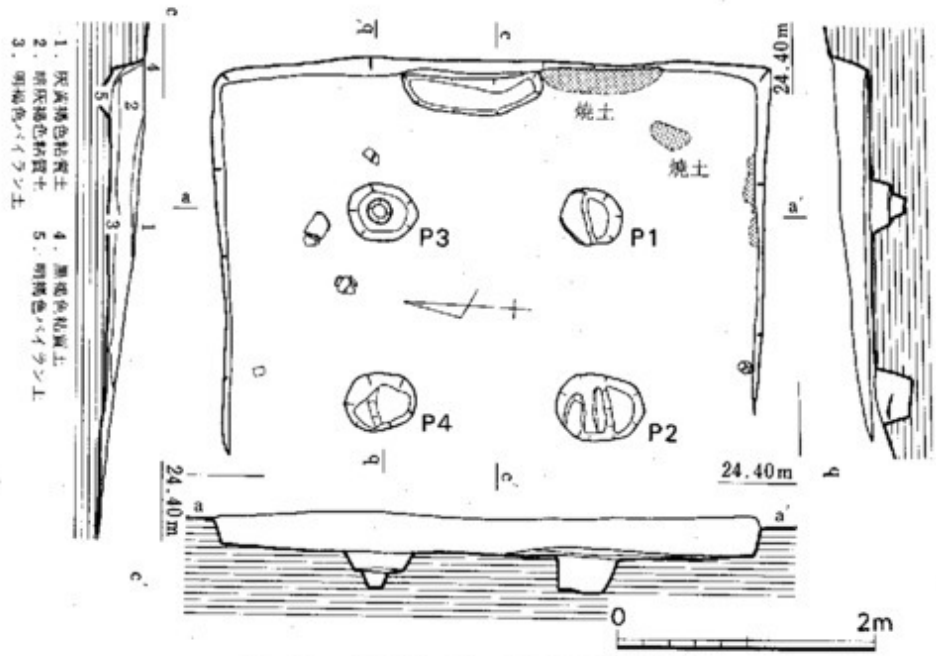


Fig.20　SA06　実　測　図（縮尺1/60）

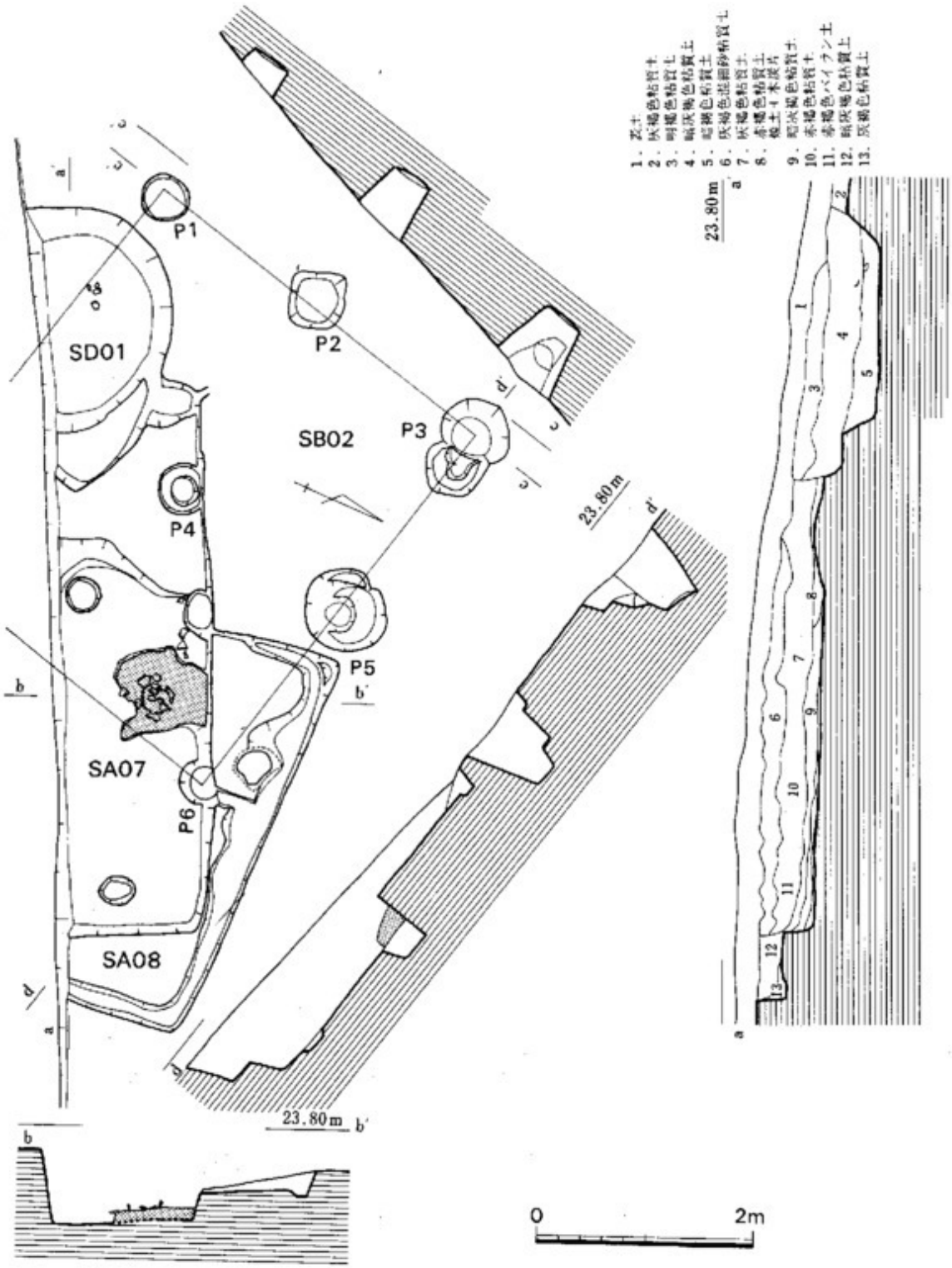


Fig.21　SA07, SA08, SB02, SD02 実 測 図（縮尺1/60）

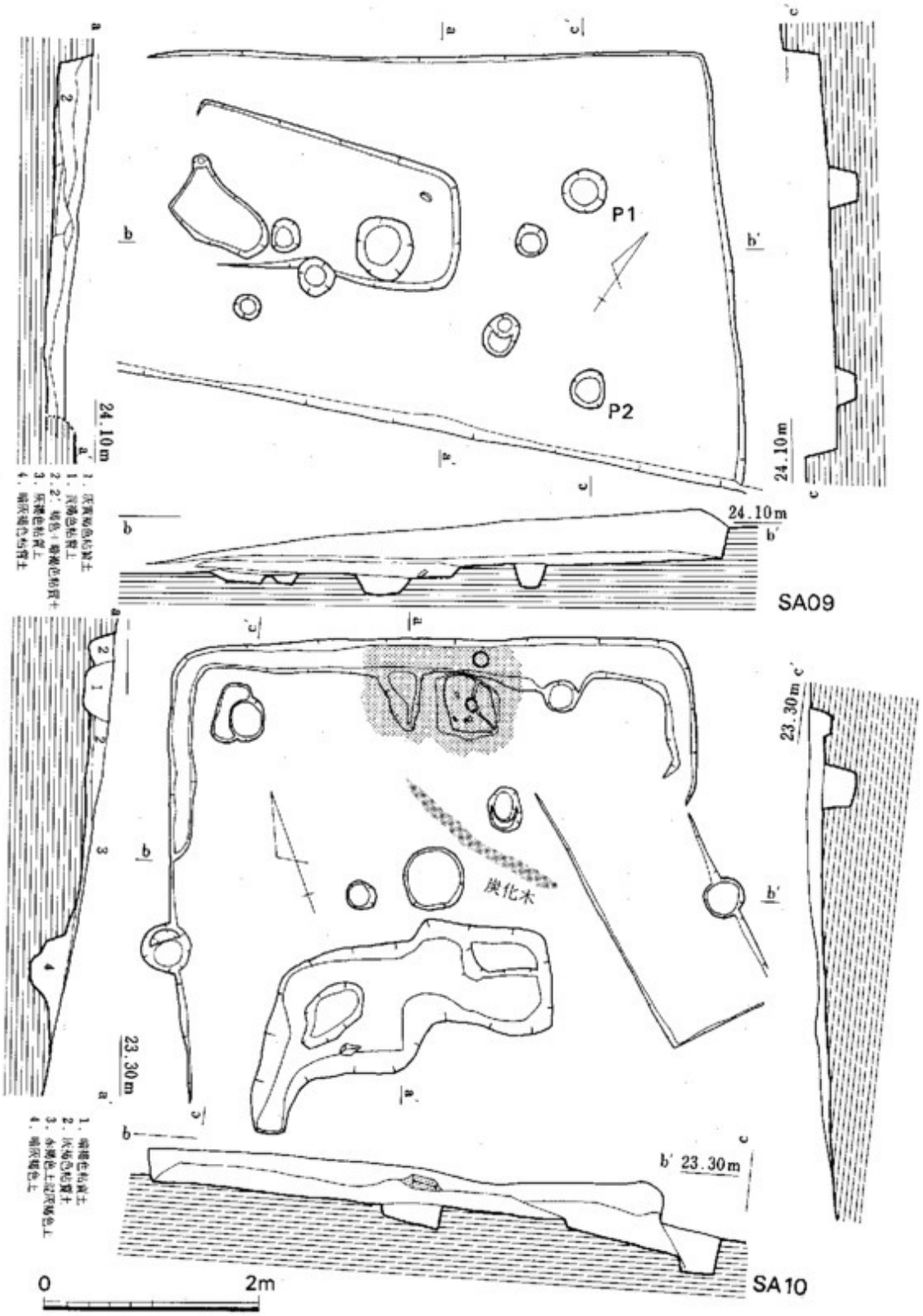


Fig.22　SA09、SA10　実　測　図（縮尺1/60）

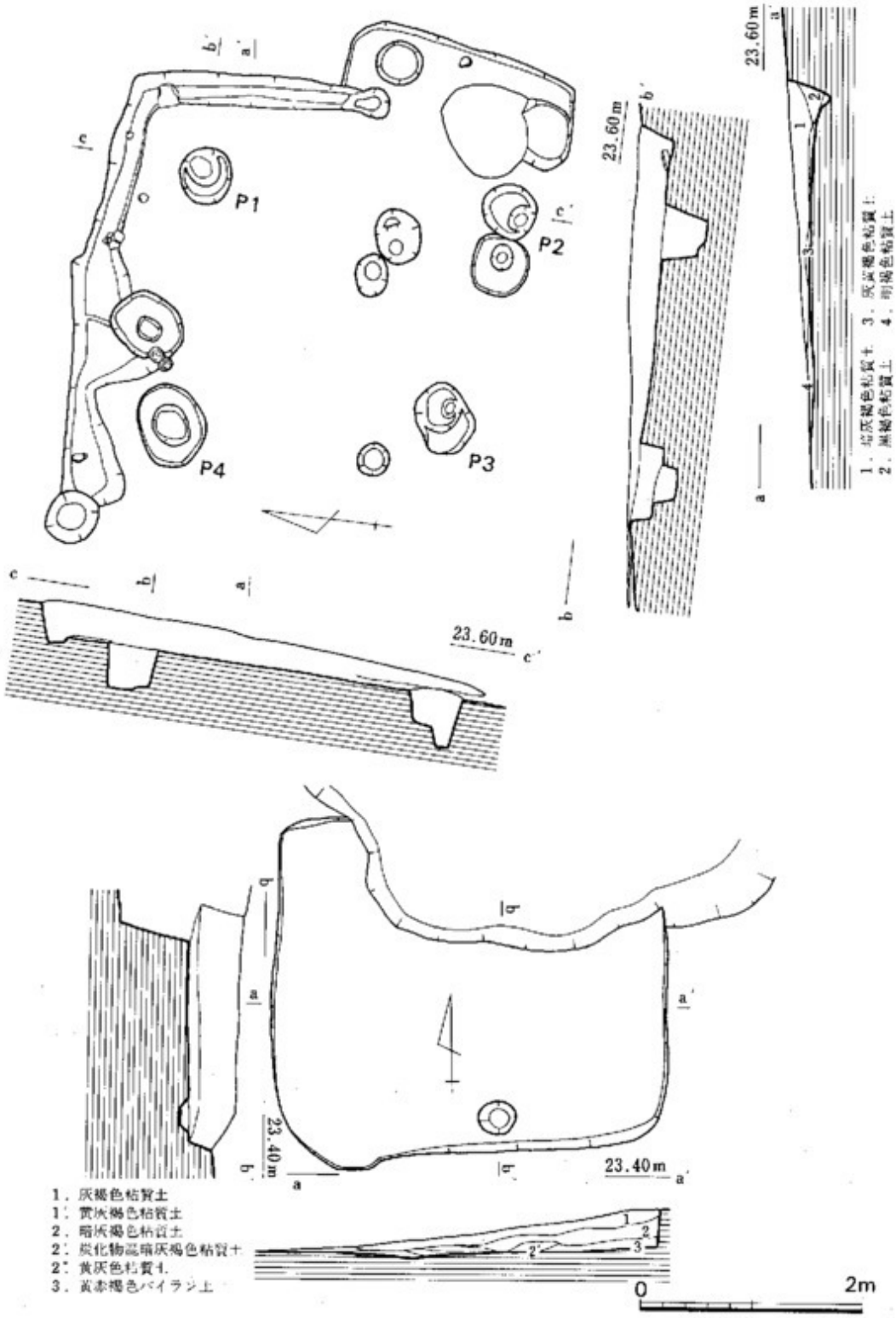


Fig.23　SA11, SA12 実 測 図（縮尺1/60）

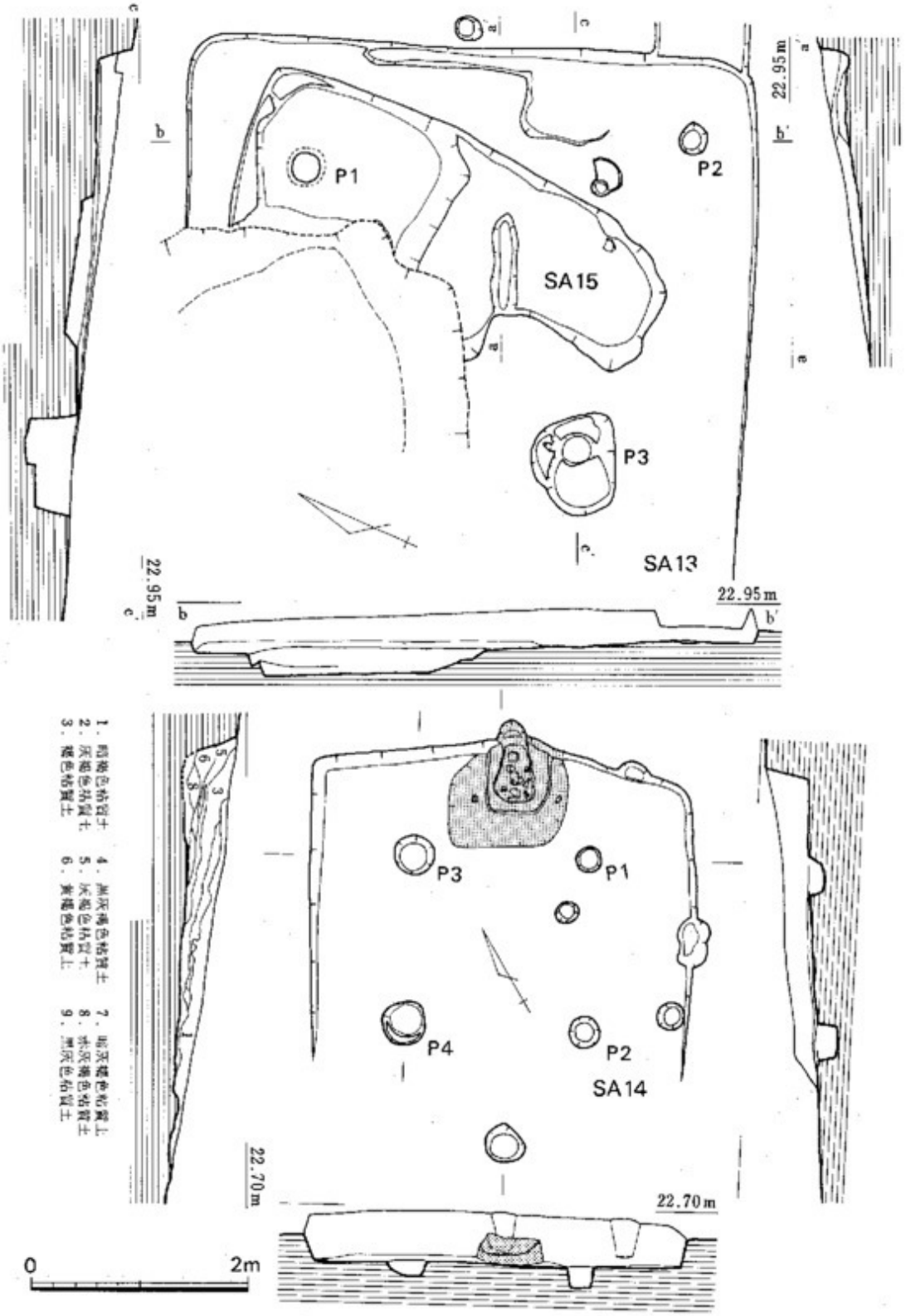


Fig.24　SA13, SA14, SA15 実 測 図（縮尺1/60）

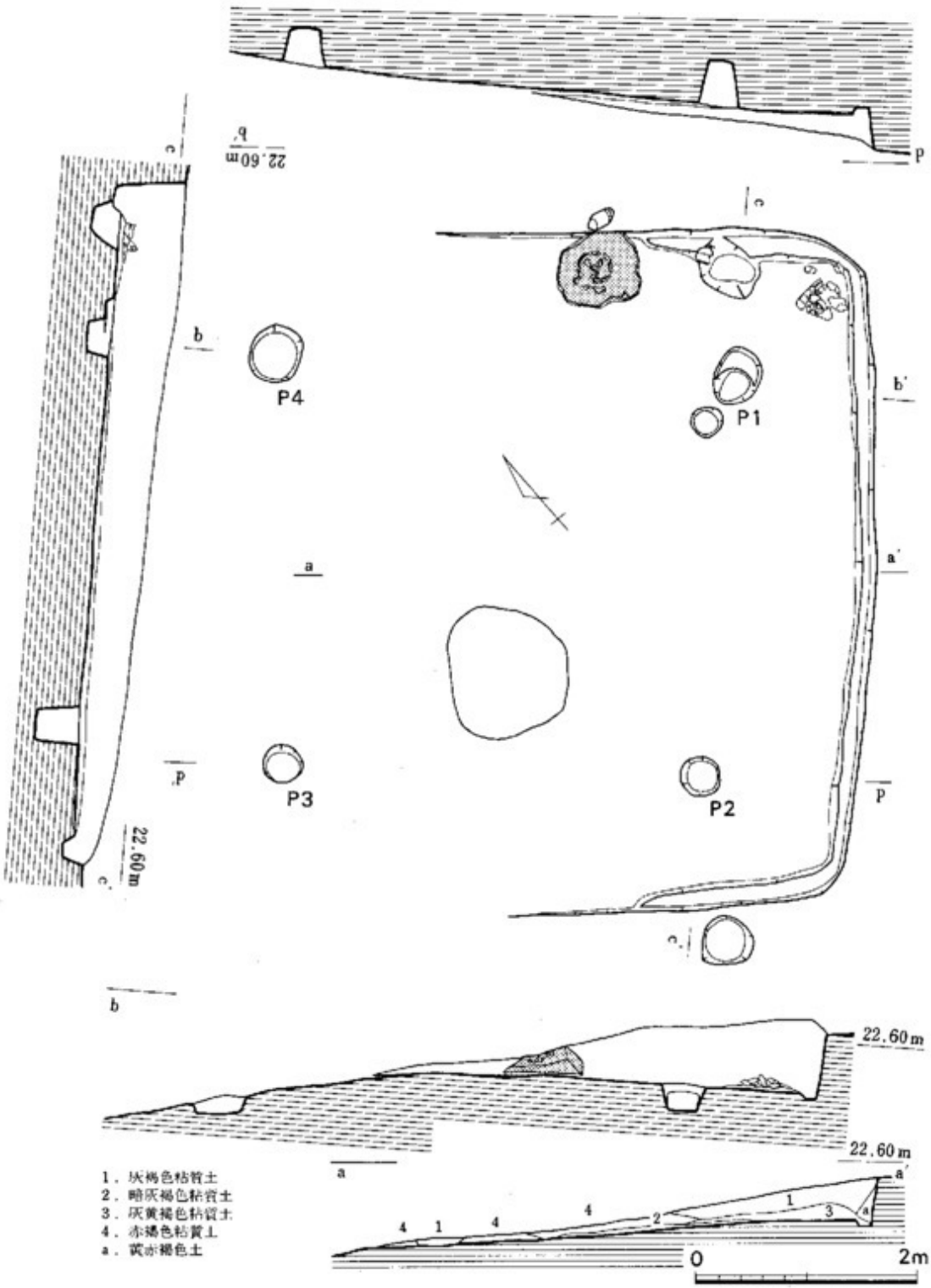


Fig.25　SA16　実　測　図（縮尺1/60）

がめぐっている。ＳＡ07によって大部分が切られているため，出土遺物は少量の須恵器，土師器の細片である。

SA09（Fig.22，PL.26の２）

ＳＡ08の東方1.5ｍを隔てた位置にあり，南半部は調査区を外れる。竪穴の方向はＳＡ05，ＳＡ07とほぼ一致するが，残存壁にかまどは付設されておらず，主軸の方位は不明である。他の住居跡と同様に平面形は隅丸方形を呈すが，北壁西端部は地山の傾斜によって5.20ｍの長さで消滅し東壁は南側4.05ｍで調査区を外れる。壁高は北壁が最も高く，北東隅で39cmの高さである。床面は北東から南西へゆるやかに傾斜を見せている。床面には８個の柱穴状のピットを検出したが，Ｐ１とＰ２が主柱穴の可能性がある。Ｐ１～Ｐ２の距離は1.90ｍ，床面からの深さは，各々28cm，20cmである。床面やや西寄りに，長さ2.50ｍ，幅1.20ｍ，深さ10～15cmの平面長方形を呈する掘り込みを検出し，床面から須恵器の杯蓋が出土した。土層の観察では，本住居跡より新しい遺構ではなく，本住居跡に伴うものか，あるいは竪穴住居構築以前の土壙であろう。住居跡の覆土は大きく２層に分かれ，須恵器，土師器を少量含む。床面に遺存しているものは認められなかった。

SA10（Fig.22，PL.27の１）

ＳＡ04の南方５ｍ，ＳＡ07の西方３ｍの位置にあり，主軸をほぼ南北（Ｎ20°Ｅ）にとる。平面は端整な隅丸方形を呈すと考えられるが，急斜面に等高線と直交する方位で築かれており，東西両壁を途中で消失し，南壁は認められない。北壁長は4.60ｍ，東壁は長さ1.50ｍ，西壁は長さ4.20ｍで失なわれている。北壁の高さは15cmを測り，床面は南側に急傾斜している。主柱穴は他の住居跡と同様に４個であろうと考えて床面を精査したが，確認できなかった。西壁の途中から北壁および東壁にかけて幅25～30cm，深さ５～６cmの周溝がめぐっている。かまどは北壁中央部に黄色粘土で築かれており，破壊されて当初の形態をとどめていないが，長さ80cm，幅100ｍ程度の平面コの字形を呈するものであったと考えられる。床面南半部には，住居跡より古く掘り込まれた不整形の土壙が検出された。遺物は皆無で遺構の性格は不明である。住居跡覆土中の遺物は，須恵器，土師器の細片で，周溝内およびかまどから，土師器の杯が出土した。

SA11（Fig.23，PL.27の２）

ＳＡ04の西方５ｍの位置にあり，主軸をほぼ南北にとる。北東から南西へ向けての地山の傾斜によって，西壁および南壁は消失している。現存北壁長は4.0ｍ，東壁長も4.0ｍであり，大略４ｍ平方の隅丸方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。しかしながら本住居跡の東壁南半部は，幅65cm，長さ２ｍの張り出しがあり，他の住居跡と形態を異にしている。壁高は東壁で最大38cmを測り，北壁から東壁中央付近まで幅20cm，深さ５～８cmの周溝をめぐらしている。床面からは柱穴状のピットが８個検出されたが，本住居跡の主柱穴はＰ１～Ｐ４と考えられる。

P 1からP 4の柱穴間は，各々3.0m，1.90m，2.50m，2.30mであり，配置も不規則である。床面からの深さは，各々40cm，45cm，45cm，40cmを測る。住居跡の覆土中から須恵器，土師器片，周溝内から須恵器杯身，土師器杯，甕が出土した。

SA12)(Fig.23，PL.28の1)

S A11の北北西2.5mの位置にあり，等高線と並行して主軸をほぼ南北（N1°E）にとる。平面隅丸方形を呈し，北側は樹木の抜き穴で破壊されている。南壁長3.20m，西壁長2.80mと小形であり，壁高は東壁で38cm，西壁で4cmを残すのみである。床面や壁周辺に柱穴らしきピットは検出されなかった。周溝やかまどなどの施設も現存部においては認められない。遺物もきわめて少なく，覆土中から須恵器，土師器の細片を少量出土したのみである。

SA13（Fig.24，PL.28の2）

S A 11の西方2.5mの位置にあり，等高線に直交して主軸を北東－南西（N70°E）にとる。北西部分約4分の1を樹木抜き穴によって破壊されているが，端整な隅丸方形の平面をなす竪穴住居跡である。遺存状況の良好な東壁長が5.0m，南壁は南東隅から5.0mの位置で地山と接しており，四壁ともに5.0m程度の寸法であったと考えられる。壁高は東壁で最大30cmを測るが，南北両壁とも地山の傾斜にしたがって低くなり，床面も西方に傾斜している。東壁には北側から中央部にかけて，壁に沿う幅20cm，深さ3～4cmの浅い溝状の掘り込みを検出したが，全体には連続しない。床面での柱穴状のピットはP 1～P 3の3個検出し，床面からの深さは，各々26cm，2cm，40cmであり，主柱穴の可能性をもつのはP 1とP 3である。覆土は須恵器，土師器を包含する灰褐色粘質土だけであるが，東壁中央部付近では炭化物を混じえるブロックがあり，東壁に付設されたかまどが破壊されたものと考えられる。

SA14（Fig.24，Pl..29の1）

SA10の西方3.6mを隔てた位置にあり，地山の傾斜に直交する形で主軸を北東－南西(N30°E)にとる。平面隅丸方形を呈し，南端部はさらに削り取られており，かまどを付設する北壁のみが完存し，南壁は遺存しない。北壁の長さは3.40m，東壁と西壁の現存長は，各々2.80mで同じである。北壁はかまどを付設する中央部がやや張り出している。北壁での壁高は50cmを測り遺存状態は良好である。床面はほぼ水平に南側の東西壁端まで続いている。本住居跡の主柱穴はP 1～P 4の4個であり，ほぼ対角線上の位置関係にある。P 1～P 4の柱穴間の距離は，各々1.60m，1.70m，1.60m，1.70mと近似している。床面からの深さは，各々18cm，24cm，20cm，15cmである。かまどは北壁中央部に接して築かれており，幅58cm，長さ70cmの平面長方形を呈する。壁際で高さ20cmの焼土化した粘土を残すが，崩壊して当初の形態は失なわれ，中央部に土師器の甕片が遺存するのみである。焚口付近からかまどを囲む90×110cmの範囲には，炭化物を堆積する浅皿状を呈する掘り込みが認められ，かまど構築の前段作業としてなされた

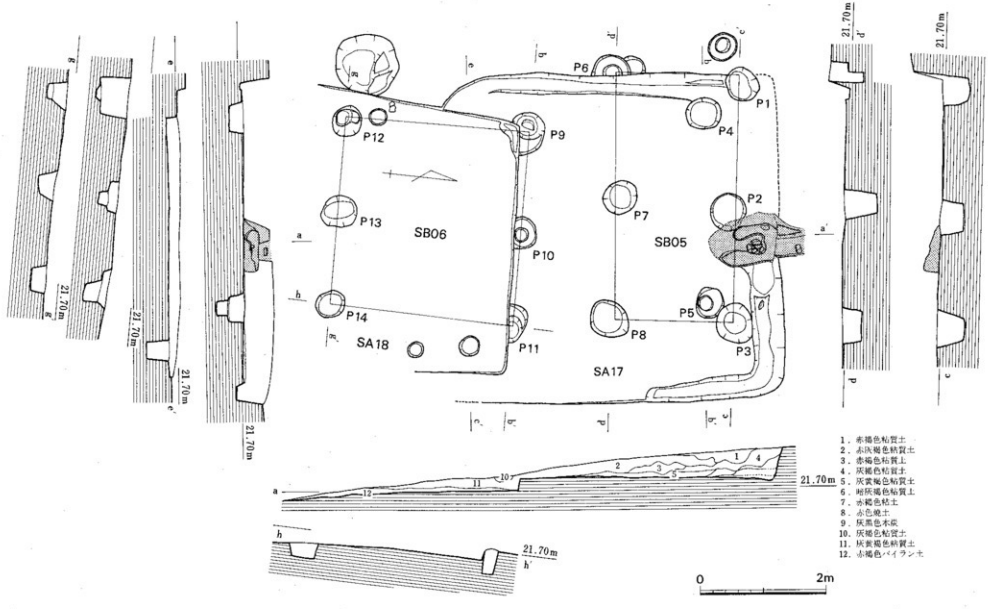


Fig.26　SA17, SA18, SB05, SB06 実 測 図（縮尺1/60）

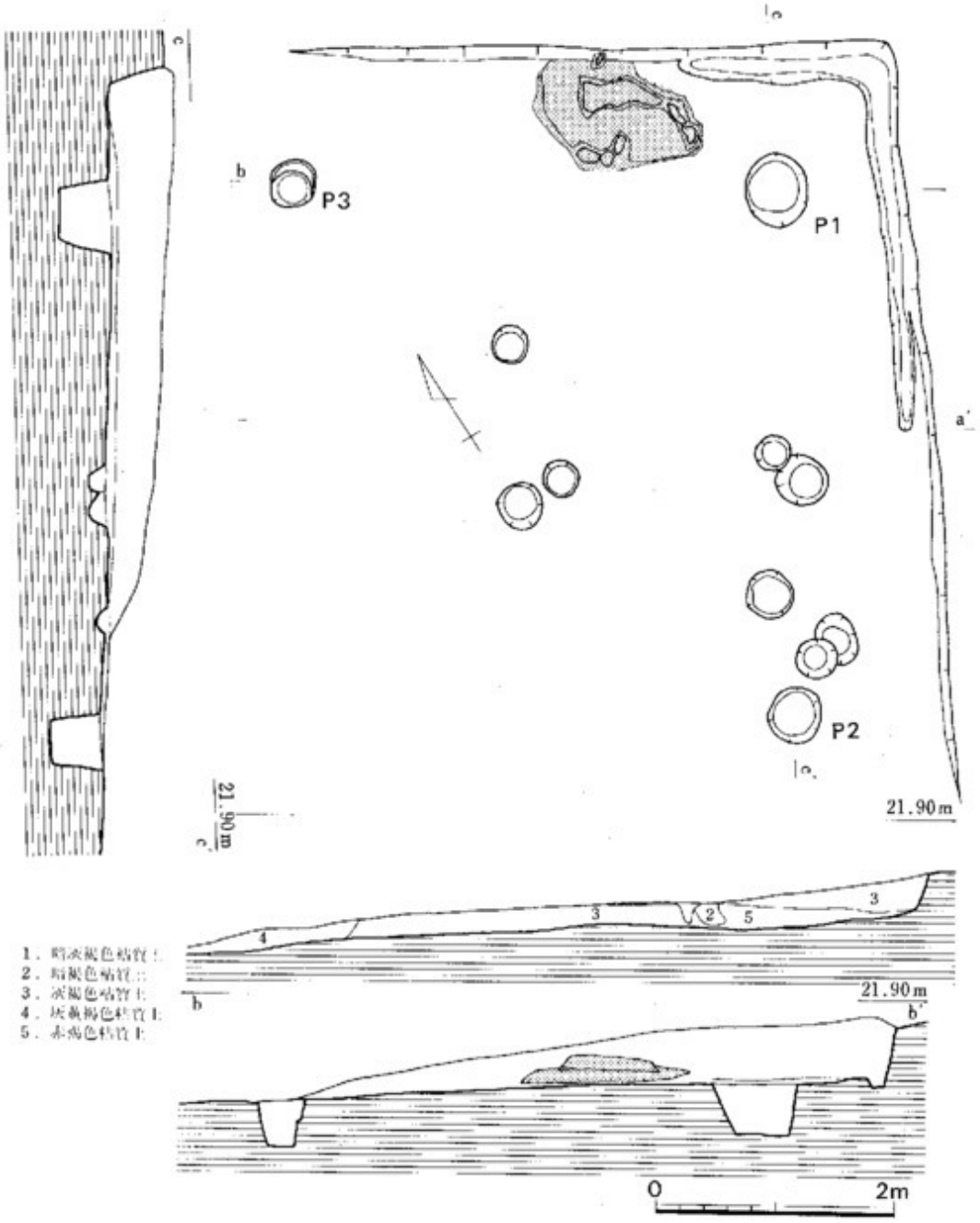


Fig.27　SA19 実 測 図（縮尺1/60）

ものであろう。住居跡の覆土は大略3層に分かれ，斜面上位からの二次堆積の状態を示している。遺物の出土は覆土中のものが殆んどであり，住居跡の年代を確実に示すのは，かまどおよび浅皿状の掘りかた出土のものである。

SA15（Fig.24）

ＳＡ13の床面清掃の過程で検出したもので，東西一南北に主軸をとる住居跡状の掘り込みが認められた。東壁と南北両隅は確認できたが，北壁の延長部は植木の抜き穴によって破壊され

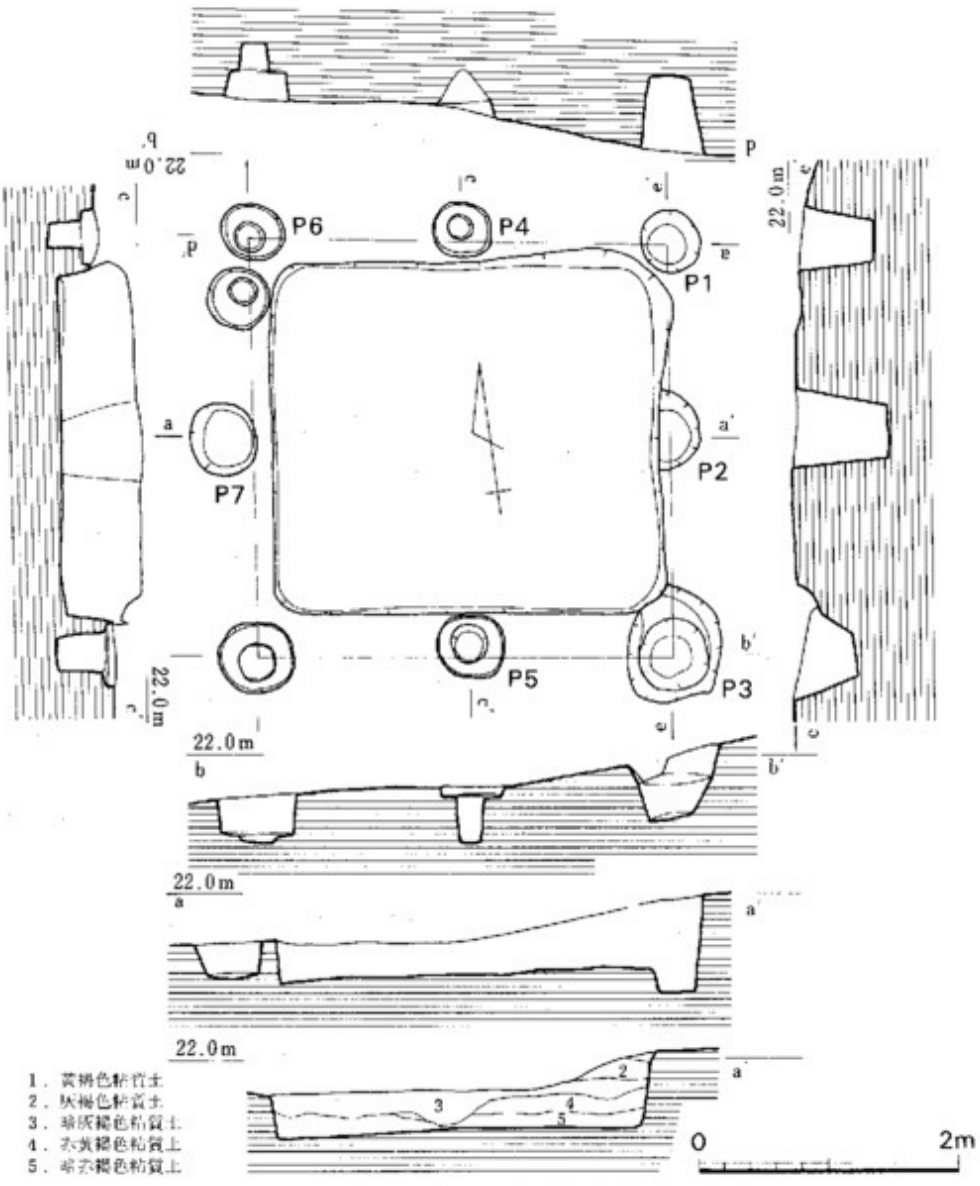


Fig.28　SA20，SB04　実　測　図（縮尺1/60）

て不明であり，南壁も東壁隅から約1.0mの位置より北側に屈曲することなどから，竪穴住居跡と断定できない遺構である。東壁の長さは4.10m，北壁は東壁とのコーナーからほぼ直角にのびており，延長1.60mの位置で植木抜き穴によって消失する。床面は中央付近で南から北へ段をつくっている。東壁の高さは南側で10～15cm，北側で25cm程度である。覆土中に須恵器片を少量含む。

SA16（Fig.25，Pl.29の２）

調査区西側の北西斜面に検出され，ＳＡ12の西方２ｍの位置に近接する。主軸は北東－南西（N41°E）にとり，斜面に並行する方向で造られている。平面隅丸方形を呈する竪穴住居跡であるが，北西側が削られており，西壁を欠いている。完存する東壁長5.80m，北壁および南壁は，各々3.70m，3.0mで床面と接している。壁高は北東隅が最大で床面から67cmである。北壁の東北隅から2.20mの位置にかまどが付設され，その位置から東壁に沿い南壁の途中まで，幅20cm，深さ５～６cmの浅い溝が続いている。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４個であり，ほぼ方形の配置をなす。Ｐ１～Ｐ４の柱穴間の距離は，各々3.60m，3.80m，4.15mを測り，床面からの深さは，各々22cm，21cm，32cm，20cmである。かまどは北壁に接し粘土を用いて構築しており，遺存状態は良好である。幅74cm，奥行68cm，厚さ25cm程度の平面方形を呈するもので，土師器の甕が据えられた状態で検出された。遺物は覆土中から須恵器，土師器片，床面からは北東隅に飯１個体分がつぶされた状態で出土した。

SA17（Fig.26，Pl.30の２）

ＳＡ13の西側に接した位置にあり，平面的にはＳＡ13と重複する。しかしながらＳＡ13の西壁が消失しているため切り合いによる先後関係は不明であるが，ＳＡ13より新しいと考えられる。主軸をほぼ東西（N6°W）にとる平面隅丸方形を呈する竪穴住居跡で，東壁にかまどを付設する。東壁北半部を植木抜き穴によって破壊され，西側約３分の１をＳＡ18に切られている。東壁と北壁の長さは推定5.0m前後，南壁は東南隅から4.60mで消失する。大略５ｍ平方の竪穴であったと考えられる。壁高は東壁で最大46cmを測る。北壁から東壁をめぐり，南壁の東隅から２ｍの位置まで，幅20～30cm，深さ５～６cmの溝がある。北壁および床面から13個の柱穴状のピットを検出したが，本住居跡の主柱穴と考えられるのは，Ｐ４，Ｐ５，Ｐ９，Ｐ11の４個であり，Ｐ９とＰ11は掘立柱建物ＳＢ06と重複する。また，掘立柱建物ＳＢ05の柱穴が本住居跡より古いことは，Ｐ２をかまどの下から検出し，Ｐ６を北壁が切っていることなどから確認できる。柱穴間の距離は，3.10m～2.80mである。かまどは北壁中央部に付設され，幅80cm，長さ110cmの馬蹄形を呈するもので，中央部から土師器の甕片と共に，支脚として使用されたと考えられる焼けた石材が出土した。覆土は大略３層に分かれ，須恵器，土師器を含む。周溝内から須恵器の杯が出土し，本住居跡の年代決定の資料となる。

SA18（Fig.26，PL.30の２）

ＳＡ17の西側約４分の１に重複し，主軸をやや南にふる。ＳＡ17の覆土を切るＳＢ06をさらに切っており，ＳＢ05，ＳＡ17，ＳＢ06との切り合いによる先後関係では最も新しい。平面隅丸方形を呈する竪穴住居跡であるが，西南側は削られている。東壁長は4.0m，北壁はコーナーから3.40m，南壁は同じく1.40mの位置で床と接する。北壁では最大30cm，東壁では24cmの壁高を残している。現存部での周溝やかまどなどの施設は認められず，床面に一定の規則性をもつ柱穴なども検出されなかった。覆土は２層に分かれ，須恵器，土師器の破片を含む。

SA19（Fig.27，PL.31の１）

ＳＡ18の北西に近接する位置にあり，東から西へ急傾斜するところに，主軸を北東－南西（N 32° E）にとっている。平面隅丸方形を呈する竪穴住居跡であるが，西側半分を削られており，全体は不明である。かまどを付設する北壁は東壁とのコーナーから5.0m，東壁は北壁とのコーナーから6.30mの位置で各々壁を消失しており，大形の住居であったと考えられる。北壁のかまど東側から南壁の3.20mの位置まで，幅20cm，深さ３～８cmの浅い溝状の掘り込みが認められる。床面から11個の柱穴状のピットを検出したが，本住居跡の主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ３である。西側に存在したはずの１個は削り取られて消滅したと思われる。柱穴間は，Ｐ１～Ｐ２が4.40m，Ｐ１～Ｐ３が4.0mを測り，床面からの深さは，各々40cm，42cm，38cmである。かまどは北壁の東壁隅から2.40mの位置に築かれ，幅140cm，長さ90cm，厚さ25cmの，押しつぶされた形の焼土化した粘土の範囲を残すのみで，当初の形態はとどめていない。覆土は２層に分かれ，須恵器，土師器を含むが，床面遺存の遺物は検出できなかった。

SA20（Fig.28，PL.31の２）

ＳＡ16の南壁に接し，ＳＡ19の東側２mの位置にあり，標高22.50mと22mの等高線の間に地山の傾斜に沿って造られ，主軸の方位はほぼ南北である。平面隅丸方形の竪穴であり，四壁の遺存状態は良好である。壁長は，北壁2.80m，東壁2.60m，南壁2.90m，西壁2.60mを測り，壁高は最大50cm，最小38cmの間におさまる。床面は平坦であるが，やや西側に傾斜している。床面には柱穴その他の施設は検出されず，竪穴を囲むように四壁の外側に10個の柱穴状ピットがある。この中で竪穴との切り合いをもつものはＰ２であり，竪穴がＰ２を切っている。また北東隅のＰ１はＳＡ16によって切られている。ここでは竪穴をＳＡ20，Ｐ８を除く９個の柱穴状ピットの配列をＳＢ04として，別々の遺構としているが，ＳＡ20がＳＢ04にきわめてすっぽりとおさまることから，あらためて検討したい。なお，ＳＡ20の竪穴覆土は大きく４層あり，須恵器，土師器片を含んでいる。床面遺存の遺物は検出されなかった。

4．掘立柱建物

掘立柱建物は調査区の南側から西側にかけての区域，そして北西側斜面部に合わせて８棟を検出した。これらの建物は竪穴住居跡群と重複しながら，尾根を囲む形で分布している。これらの分布区域には，さらにいくつかの柱穴状ピット群を検出し，建物の数は増加すると思われるが，確実に建物として把握することができなかった。

SB01（Fig.29，PL.33の１）

Ｆ－７～８区の尾根上北西端部にあり，ＳＡ03から４ｍを隔てる。桁行方位をＮ85°Ｅにとる桁行２間梁行１間の建物であるが，柱穴の配置にズレがあり，北側桁行は直線で通らない。建物の規模は桁行3.80ｍ，梁行2.00ｍである。桁行柱間の寸法は，Ｐ１～Ｐ３・Ｐ３～Ｐ５が1.90ｍ，Ｐ２～Ｐ４が2.00ｍ，Ｐ４～Ｐ６が1.80ｍを測り，Ｐ３～Ｐ４の梁間は2.30ｍと広くなっている。柱穴の深さは，50～40cmの間にある。柱痕は全く認められず，他の遺構との切り合い関係も無かった。遺物は建物周辺に器台形土器，柱穴Ｐ２内から弥生土器片などが出土した。しかしながら，これらの遺物は建物の年代を示すものではないと考えられる。

SB02（Fig.21，PL.33の２）

調査区の南端部斜面に，ＳＡ07，ＳＡ08と重複して検出された。すぐに調査区を外れるために建物全体を知り得ないが，主軸方位をほぼ東西（Ｎ76°Ｗ）にとる桁・梁各２間の総柱の建物

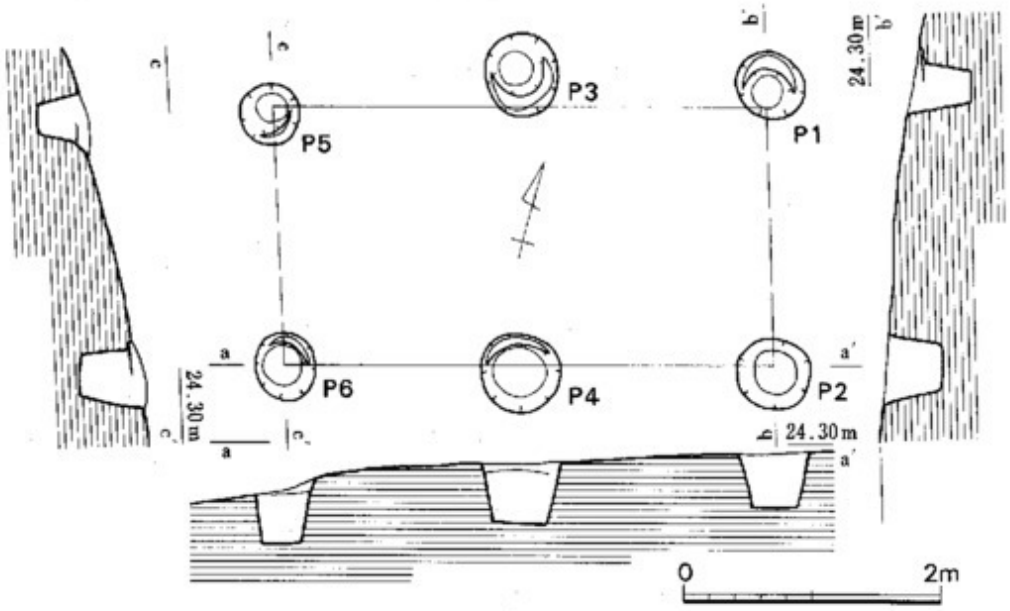


Fig.29　SB01 実 測 図（縮尺1/60）

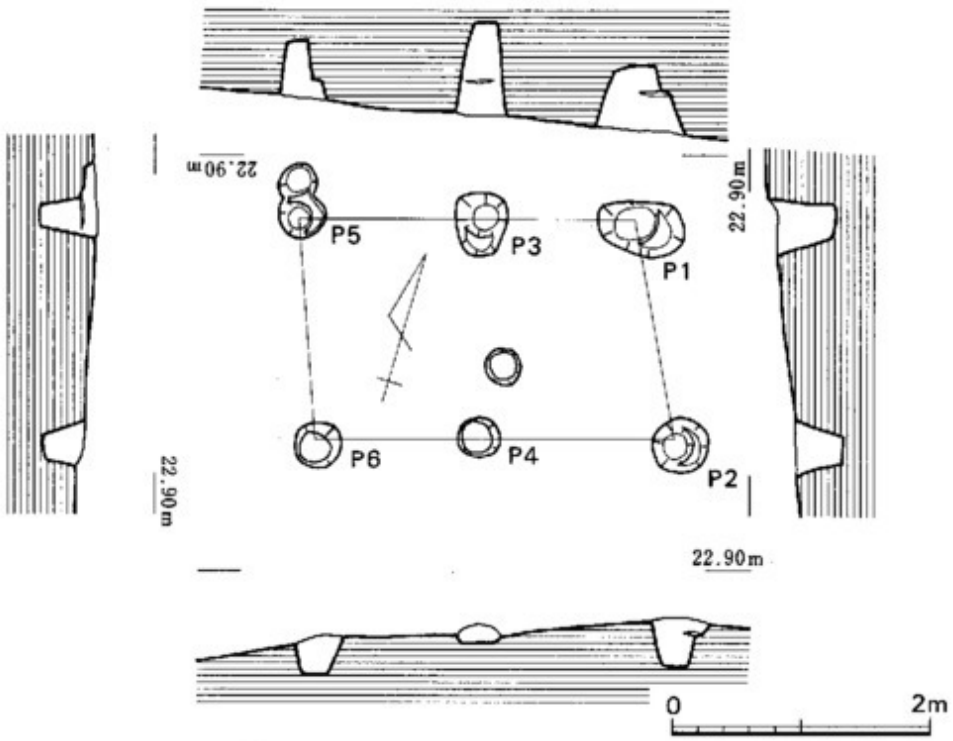


Fig.30　SB03 実 測 図（縮尺1/60）

になると考えられる。規模は桁行4.10m，梁行3.70mであり，柱間寸法は，桁行間でＰ３～Ｐ５が2.10m，Ｐ５～Ｐ６が2.00mを測り，梁行間ではＰ１～Ｐ２，Ｐ２～Ｐ３とも1.85mの等間である。東柱Ｐ４と桁行・梁行両柱間の寸法は各々2.10m，1.85mと同じ寸法となっている。柱穴掘りかたは，円もしくは不整円形を呈し，大きさも不揃いである。ＳＡ07，ＳＡ08との時間的先後関係は，Ｐ６がＳＡ07に切られ，Ｐ４がＳＡ09に切られていることから，ＳＢ02がこれら２軒の竪穴住居跡より古いことが知られる。柱穴内からは，弥生土器の細片，黒曜石片などが出土した。

SB03（Fig.30，PL.34の１）

調査区の西南部斜面Ｇ－５区にあり，竪穴住居跡ＳＡ14の西側に隣接する。桁行方位をＮ76°Ｅにとる２×１間の建物で，桁行間2.58m～2.75m，梁行間1.76m～1.72mを測る。柱間寸法はＰ１～Ｐ３が1.15m，Ｐ３～Ｐ５が1.43m，Ｐ２～Ｐ４が1.51m，Ｐ４～Ｐ６が1.24mを測る。柱穴の掘りかたは不整円形を呈し，深さは30～72cmである。建物北側斜面は長さ4.50mの壁面があり，斜面を削った後に営まれたと考えられる。

SB04（Fig.28，PL.31の２）

調査区西側のＥ－５区にあり，ＳＡ20の竪穴四壁を囲むように８個の柱穴を配する２×２間

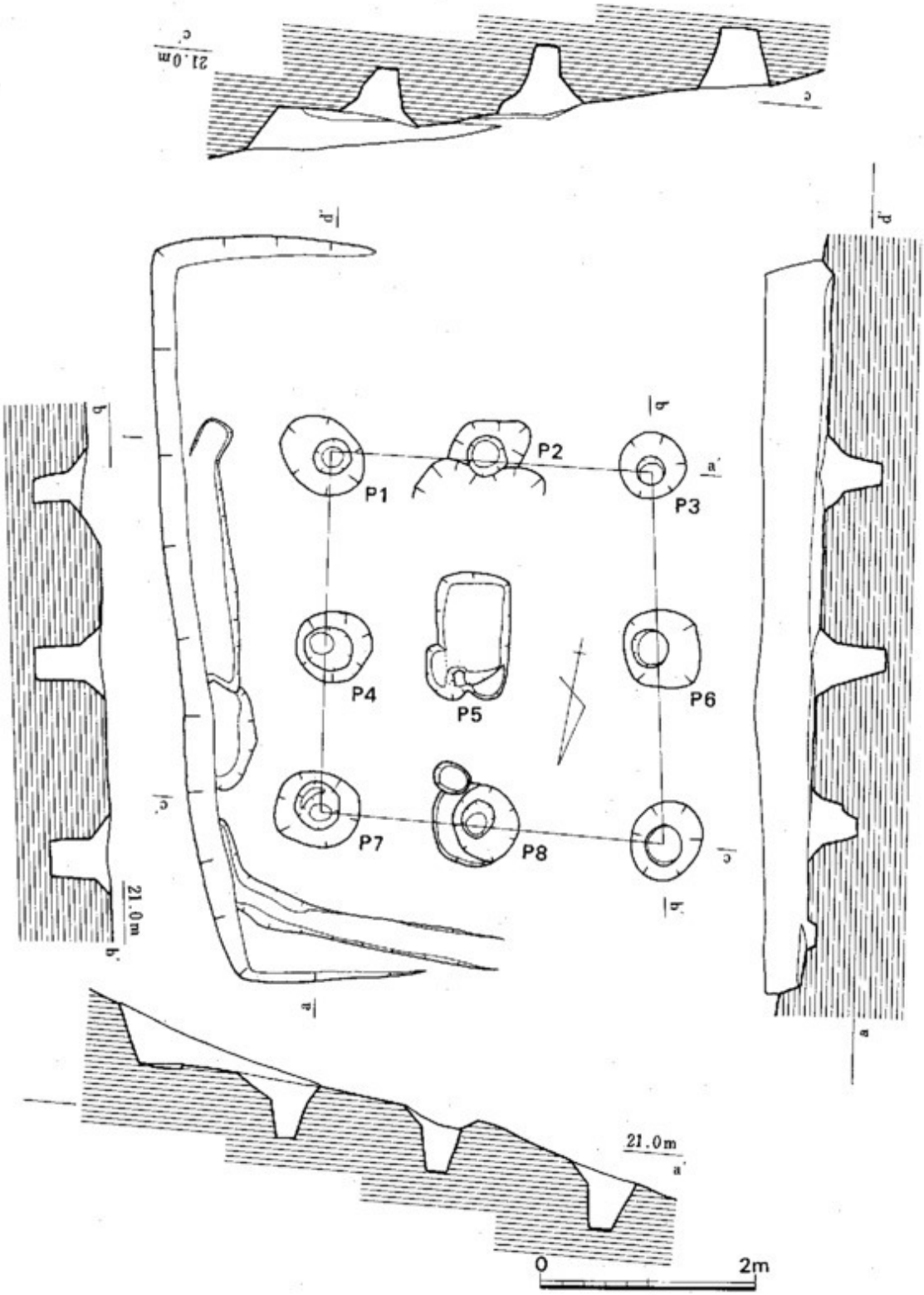


Fig.31　SB07 実 測 図（縮尺1/60）

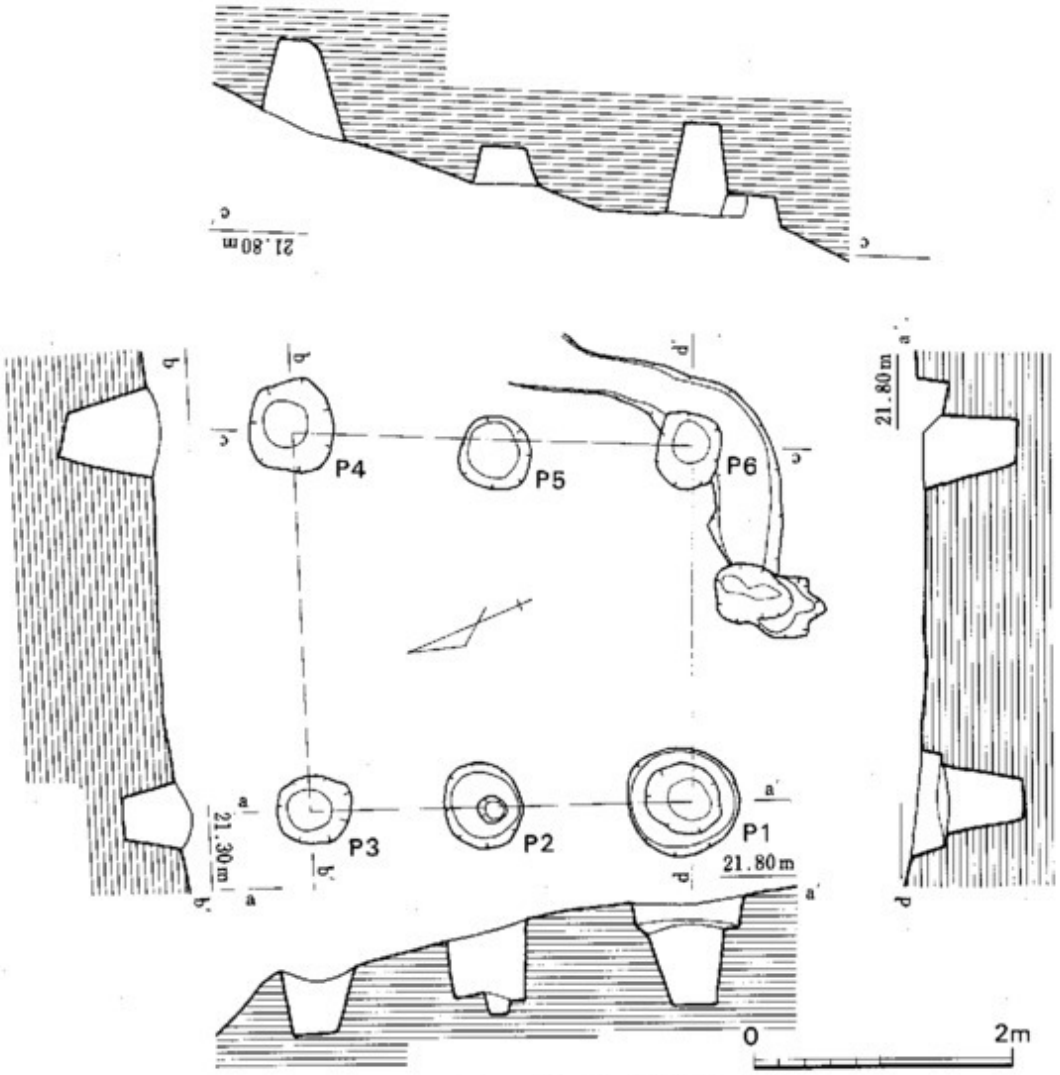


Fig.32　SB08 実 測 図（縮尺1/60）

の建物である。主軸方位をほぼ南北にとり，桁行，梁行とも3.20ｍを測り，正方形の配置である。柱間寸法は，Ｐ１～Ｐ２が1.50ｍ，Ｐ２～Ｐ３が1.70ｍ，Ｐ１～Ｐ４・Ｐ４～Ｐ６が各々1.60ｍである。柱穴の掘りかたは70～40cmの円形で，深さは25～50cmを測る。竪穴住居跡の項で記したように，ＳＢ04とＳＡ20との関係は，柱穴Ｐ2を竪穴が切っており，時間的先後関係ではＳＢ04が古いことを示している。しかしながら，平面的なＳＢ04柱穴の配置は明らかに方形竪穴を意識しており，両者は同一の遺構を構成するものであろう。また，竪穴の床面には柱穴の掘り込みは全く検出されなかったが，ＳＢ04がＰ２とＰ７を除く１×２間の建物であったとしても，さらに竪穴に伴う掘立柱建物としての可能性が高くなるだろう。

SB05（Fig.26，PL.34の２）

調査区西側の竪穴住居跡ＳＡ17に重複して検出し，切り合い関係によってＳＡ17より古いことが確認された。桁行方位をほぼ南北（Ｎ84°Ｅ）にとる１×２間の建物で，桁行3.80ｍ，梁行2.00ｍを測る。桁行柱間寸法は，Ｐ１～Ｐ２が2.10ｍ，Ｐ２～Ｐ３が1.70ｍ，Ｐ６～Ｐ７・Ｐ７～Ｐ８が各々1.90ｍで対称とはなっていない。柱穴掘りかたは50～60cmの不整円形で，深さは30～50cmを測る。柱穴掘りかたの遺物はきわめて少量の須恵器の細片である。

SB06（Fig.26，PL.35の１）

ＳＢ05西側1.2ｍの位置に近接して並び，桁行方位をほぼ南北にとる１×２間の建物で，切り合い関係では竪穴住居跡ＳＡ17の覆土を切り，さらにＳＡ18によって切られていることから，ＳＡ17より新しく，ＳＡ18より古いことが知られる。建物の規模は，桁行3.20ｍ～3.00ｍ，梁行2.90ｍを測り方形に近い柱穴の配置をなし，ＳＢ04の規模と同程度である。桁行柱間寸法はＰ９～Ｐ10が1.70ｍ，Ｐ10～Ｐ11が1.50ｍ，Ｐ12～Ｐ13・Ｐ13～Ｐ14が1.50ｍ等間となっている。柱穴掘りかたは，40～50cmの不整円形で，深さは25～40cmを測る。遺物は須恵器，土師器の細片が少量出土した。

SB07（Fig.31，PL.35の２）

調査区北西側斜面のＤ－６区において検出した。この区域からＥ－８区にかけての斜面には，弥生土器，土師器，須恵器を混在する包含層が30～40cmの厚さで堆積しており，この層を取り除く過程で地山を削ったテラス状の整地面を検出した。ＳＢ07は，地山の傾斜に直交して幅6.70ｍ，高さ30～60cmの隅丸方形を呈す整地面をつくり，その中に２×２間の総柱建物を配する構造となっている。整地の段は東側でコーナーから1.70ｍ，西側で2.00ｍを測り，竪穴住居跡の壁と同様である。奥壁東寄りの位置から北側へ幅30cm前後，深さ５～６cmの浅い溝が途中まで続いており，排水溝であると考えられる。柱穴は整地壁とほぼ同じ方位で配置され，２×２間の総柱建物となる。東柱の穴は土壙ＳＤ04によって切られている。柱穴の配置は正方形に近いが歪みがあり桁行3.30ｍ～3.40ｍ，梁行3.00ｍ～3.20ｍとなっている。柱間寸法も桁行で最大1.80ｍ，梁行で最小1.40ｍである。掘りかたは70～80cmの不整円形を呈し，深さは45～65cmを測る。

SB08（Fig.32）

Ｄ－６区から続く整地面東端部にあり，ＳＢ07より14ｍ東側に位置する。なお，ＳＢ08との中間には，柱穴群が認められ，同様の建物の存在を追求したが，まとめるには至らなかった。建物は桁行方位をほぼ南北にとる桁行２間，梁行１間の掘立柱建物である。ＳＢ07と同様に建物を方形に囲む形で地山の整地がなされたものと考えられ，東南隅にその痕跡を認めうる。柱穴の平面配置は正方形に近いが歪みを有し，桁行2.96ｍ～3.10ｍ，梁行2.76ｍ～2.96ｍを測る。桁行柱間寸法は，Ｐ１～Ｐ２が1.52ｍ，Ｐ２～Ｐ３が1.44ｍ，Ｐ４～Ｐ５・Ｐ５～Ｐ６が1.55ｍ等間となっている。柱穴掘りかたは48～86cmの不整円形を呈し，深さは30～70cmを測る。柱

穴内からは，須恵器，土師器の細片が出土している。

5．土壙，土壙墓

調査区全域に平面形が円，不整円，楕円，長方形を呈する土壙が点在しているが，性格を明らかにできるものは少ない。平面が円形を呈し，袋状竪穴と思われる遺構が深さが4～5cm程度で地山に達したものもある。これらの遺構については，調査段階で不明遺構として処理し，次に報告する6基について土壙，土壙墓とした。

SD01（Fig.16，PL.22の1）

調査区東南端の竪穴住居跡ＳＡ02の中央部から検出した。平面は隅丸方形を呈すが，四壁は全体に丸味をもつ。長さ2.16m，幅1.90m，深さ1.10mを測る。遺構の掘り込みはＳＡ02の覆土上面からなされており，ＳＡ02が埋まった後に掘られたことが知られる。遺物は上層に弥生土器，中層に土師器片を包含している。しかしながら最下層は赤褐色粘質土と暗灰褐色粘質土がブロック状に混じって厚く堆積し，遺物は全く含んでいない。覆土中の遺物のあり方から，ＳＤ01の年代は古墳時代以降と考えられる。

SD02（Fig.21，PL.36の1）

調査区南端部にあり，南側約半分は調査区を外れる。東側約3分の2を竪穴住居跡ＳＡ07と重複し，ＳＡ07が埋まった後に掘り込まれている。長さ2.4.m，長さ2m前後の平面楕円形を呈す土壙と考えられるが，全体は不明である。壁面は斜めに掘り込み，床面は平坦である。東側は2段掘りとなっており，深さは東側の段で44cm，中央部で60cmを測る。覆土には須恵器，土師器片を含み，床面近くからカーボンが多く検出された。

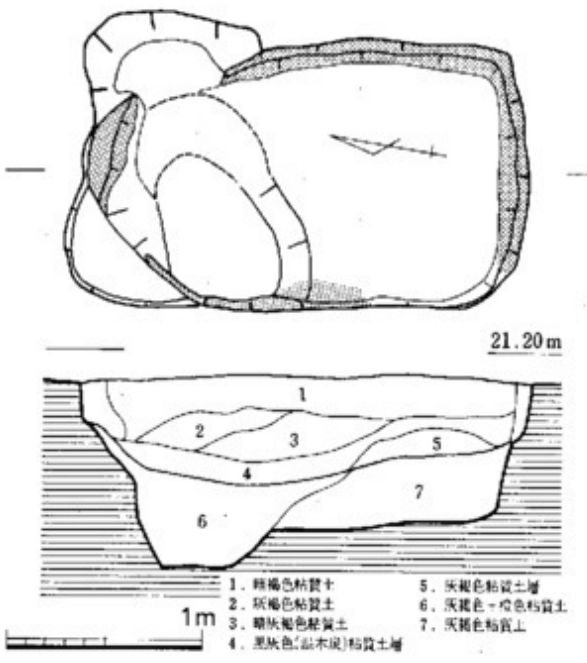


Fig.33　SD04 実 測 図（縮尺1/40）

SD03（Fig.8，PL.15の1）

調査区西側の尾根先端部Ｆ－6区にあり，袋状竪穴ＳＦ25を切っている。長軸方位をN65° Wにと

る平面羽子板状に近い長方形の土壙である。ＳＦ25との重複部をとばしてしまったが，長さ1.09ｍ，幅0.72ｍ，深さ0.23ｍを測り，断面は逆台形状を呈する。周壁は幅４～５cmにわたって帯状に焼土化している。覆土最下層は木炭や灰が厚く堆積しており，この土壙の中で燃焼が行なわれたことを示している。遺物は覆土中から須恵器，土師器の細片が少量出土した。

SD04（Fig.33, PL36の2）

調査区北西側急斜面にあり，掘立柱建物ＳＢ07中央にすっぽりとはまっている。長軸方位をN13°Wにとり斜面に平行して掘られている。平面はＳＤ03と同様に羽子板状を呈し，最大幅0.65ｍ，長さ1.15ｍ，深さは27cmを測る。周壁は幅３～８cmで赤く焼土化し，覆土最下層には木炭や灰が厚く堆積している。ＳＤ04はＳＢ07の東柱穴を掘り込んでいるが，さらに下部に土壙状の掘り込みが認められる。平面はＳＤ04とほぼ重なるが，深さは40cmを測り，断面は逆

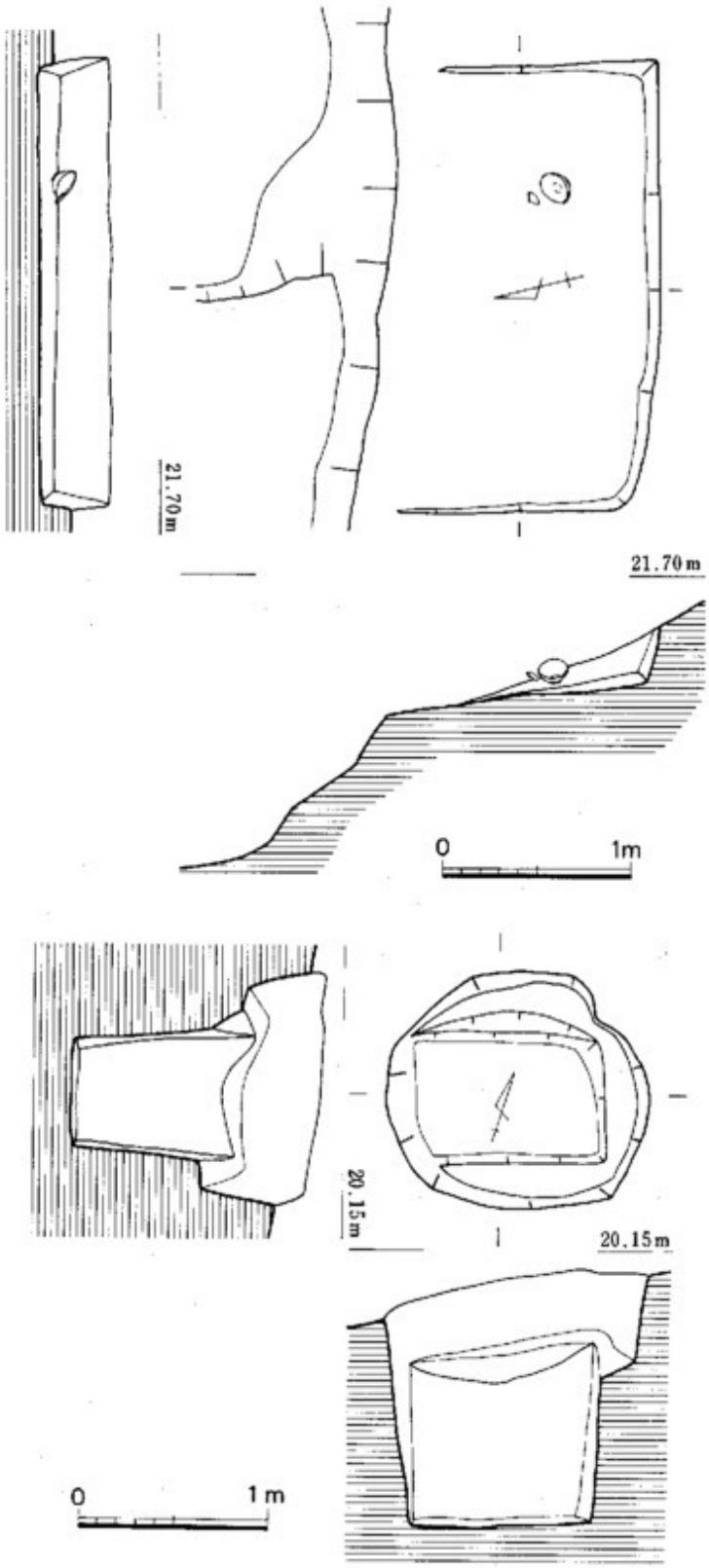


Fig.34　SD05, SD06　実　測　図（縮尺1/40）

台形を呈する。SB07より新しい掘り込みであるが，性格は不明である。ＳＤ04はＳＤ03と同時期の同一機能をもった遺構であると考えられる。

SD05（Fig.34，PL.37の１）

調査区西南端に近い斜面のＧ－４区にある。長軸方位をN72°Eにとり，上面の平面形が長円を呈する土壙である。径1.40ｍ×1.24ｍ，深さ1.30ｍを測る。２段掘りの構造となっており，深さ50㎝前後の位置から長さ1.16ｍ，幅1.10ｍの長方形を呈する掘り込みがある。壁面は垂直に近く，床面は平坦である。形状から土壙墓と考えられるが，性格や年代を示す遺物は検出されなかった。

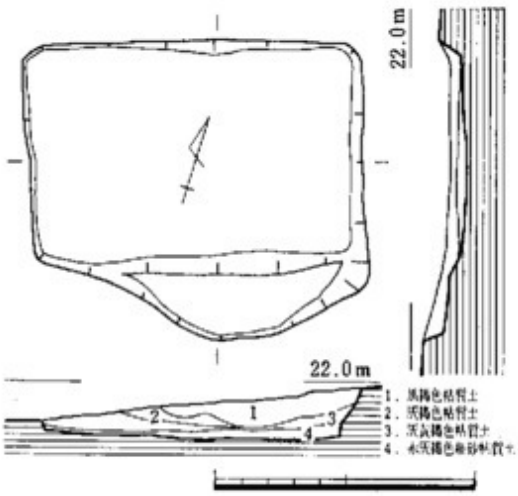


Fig.35　SX12 実 測 図（縮尺1/60）

SD06（Fig.34，PL.37の２）

調査区北東側急斜面のＦ－９区から検出した。斜面に並行しており，長軸方位はN77°Wにとる。北側を削られており全体の形状は不明であるが，平面長方形を呈すと考えられる。長さ2.34ｍ，幅は1.20ｍが残り，壁高は南側高位部で38㎝を測る。壁は垂直に近い状態で掘られ，床面は平坦である。覆土には木炭や焼土を多く含んでいるが，床面に近い位置から龍泉窯系青磁の蓮弁文碗の完形品１個，土師皿片が出土した。これらは副葬品であり，ＳＤ06は中世の墳墓であろう。

６．その他の遺構

すでに述べたように，調査区全域にわたり時期や性格を確認できない遺構を検出した。これらは不明遺構ＳＸとして扱ったが，ここではＳＸ12（Fig.35）についてのみ報告する。ＳＸ12は調査区西側端部のＦ－３～４区にかけて検出され，平面長方形を呈する掘り込るである。長軸をN72°Eにとり，長さ2.60ｍ，幅1.84ｍ，深さ0.42ｍを測る。南側は外部に半月形を呈する段部をつくっている。覆土中には須恵器，土師器片を含んでいる。これらの遺構以外に，調査区東端部付近には，Ｇ－８区からＨ－10区に続く溝状遺構ＳＣ01を検出した。竪穴住居跡ＳＡ01を切って真っすぐ東側にのびており，東端部は削られて消失する。幅1.40～0.90ｍ，深さ30～40㎝の断面皿状を呈する溝で，全長は18ｍを測る。覆土中からは，龍泉窯系青磁碗片や土師器の細片が少量出土した。このＳＣ01の年代は中世のものと考えられる。

図　　版

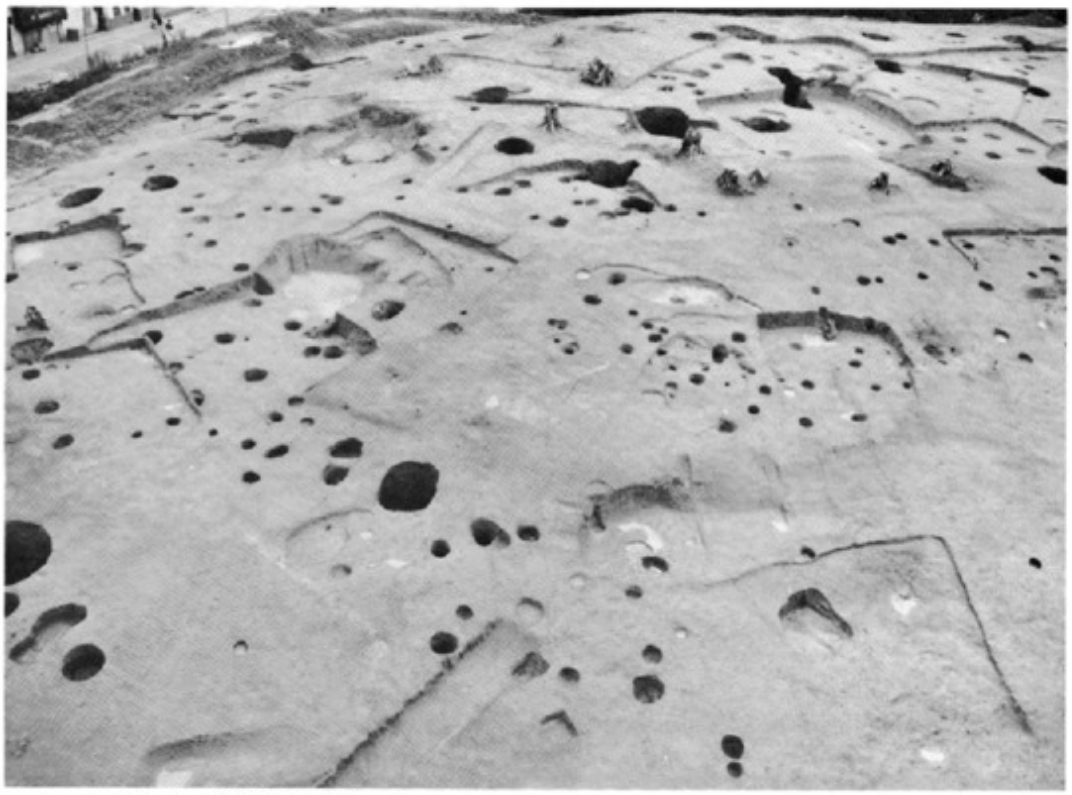
発掘調査を終えて（1981年10月）

1．浄泉寺遺跡遠景（北から）

2．浄泉寺遺跡発掘前近景（北西から）

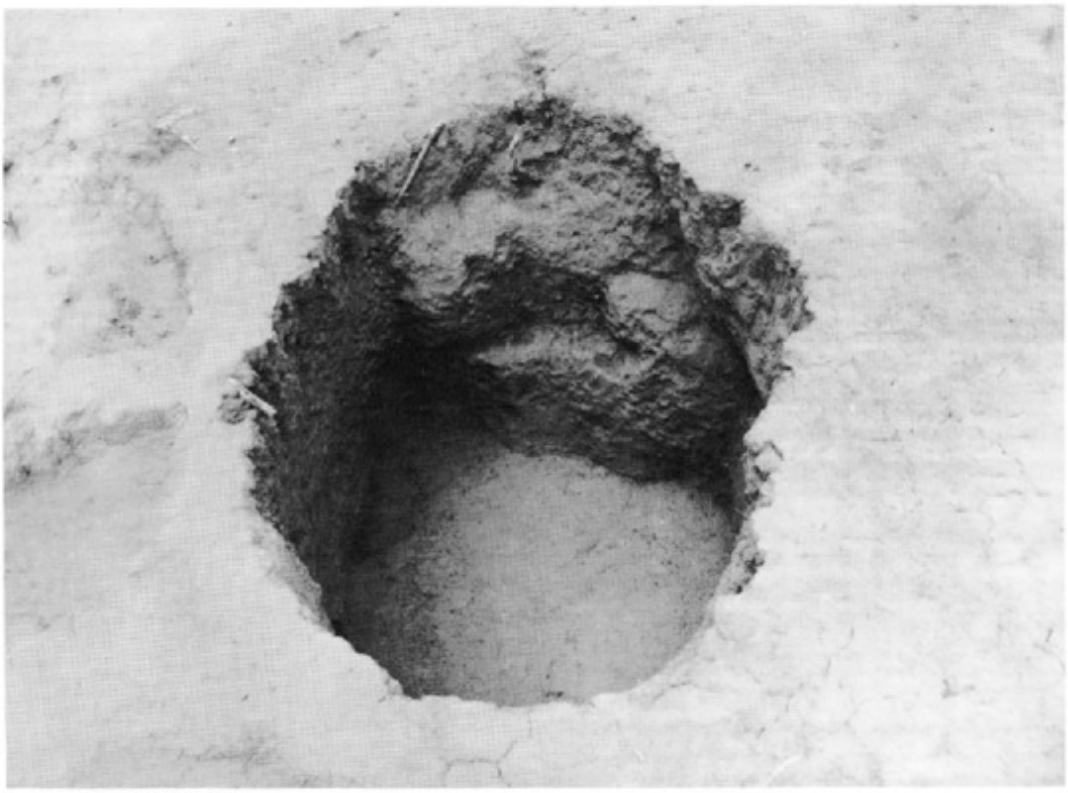
1．浄泉寺遺跡完掘状況（西から）

2．浄泉寺遺跡完掘状況（東から）

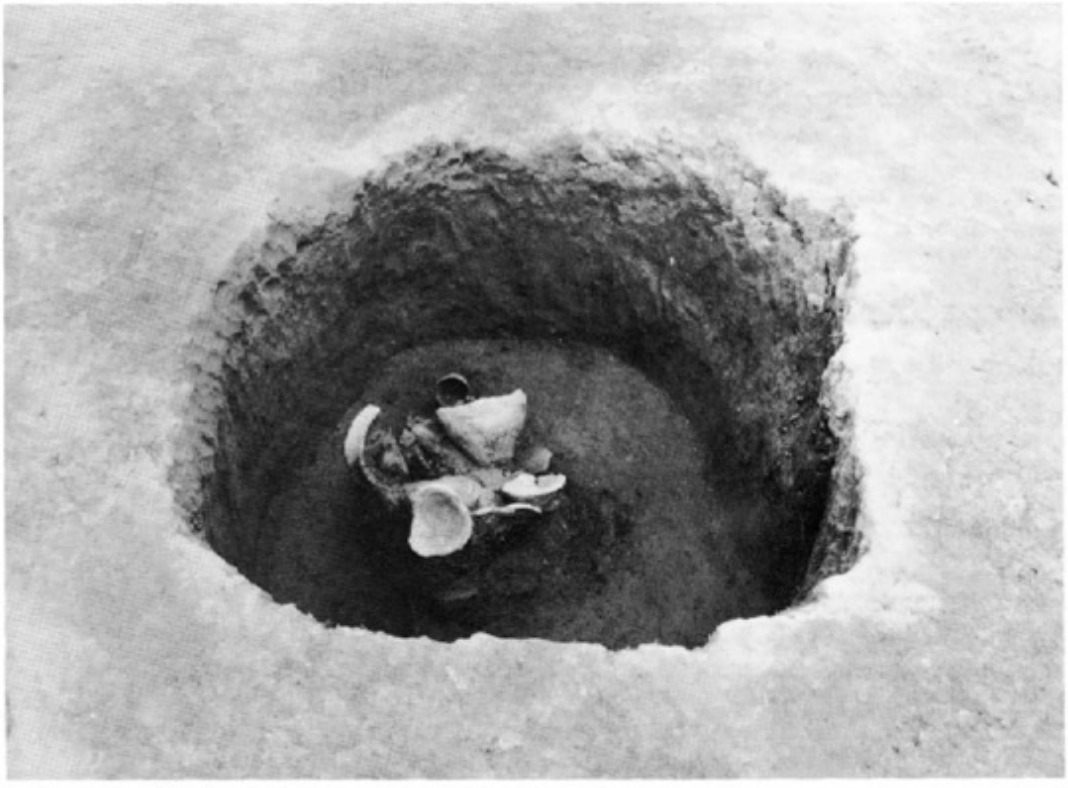


1．浄泉寺遺跡完掘状況（南から）

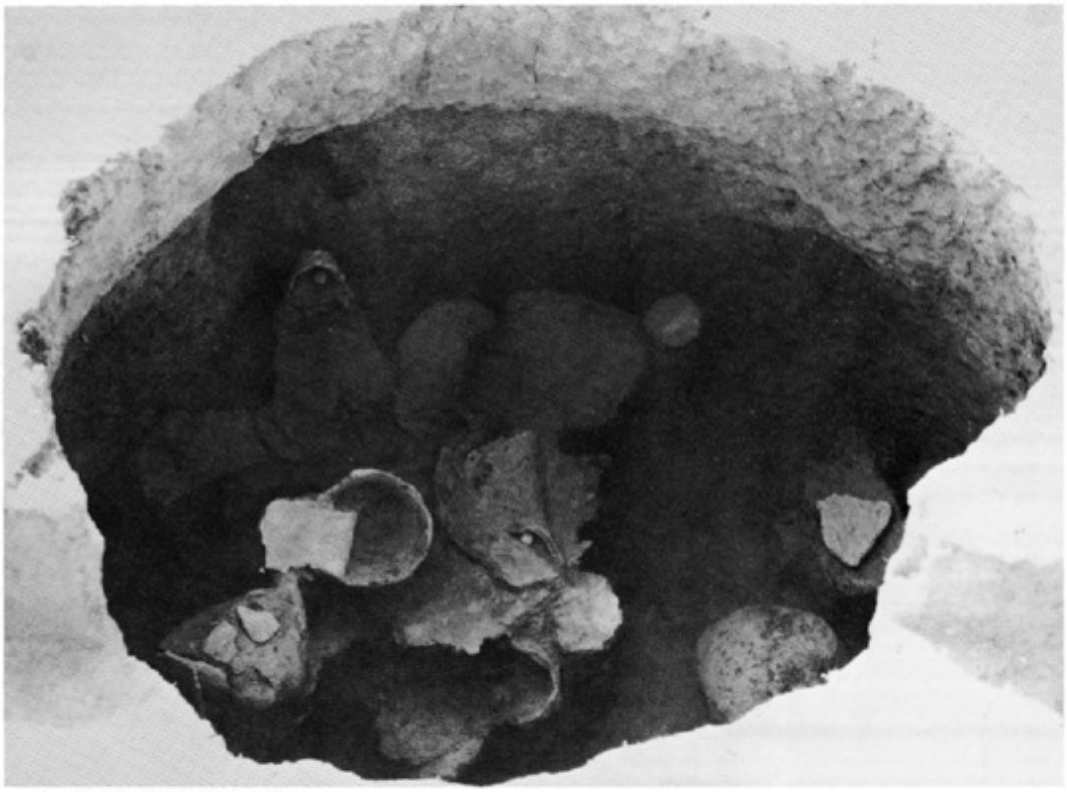
2．浄泉寺遺跡完掘状況（西南から）



1．SF01完掘状況

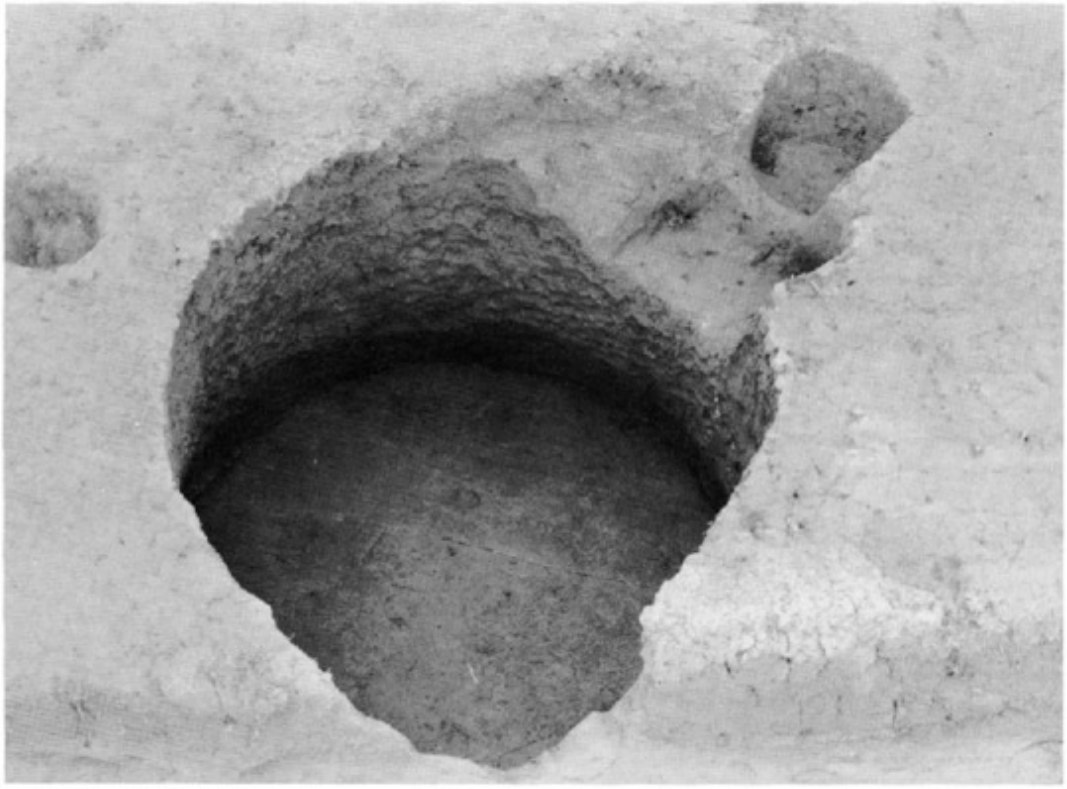


2．SF02遺物出土状況

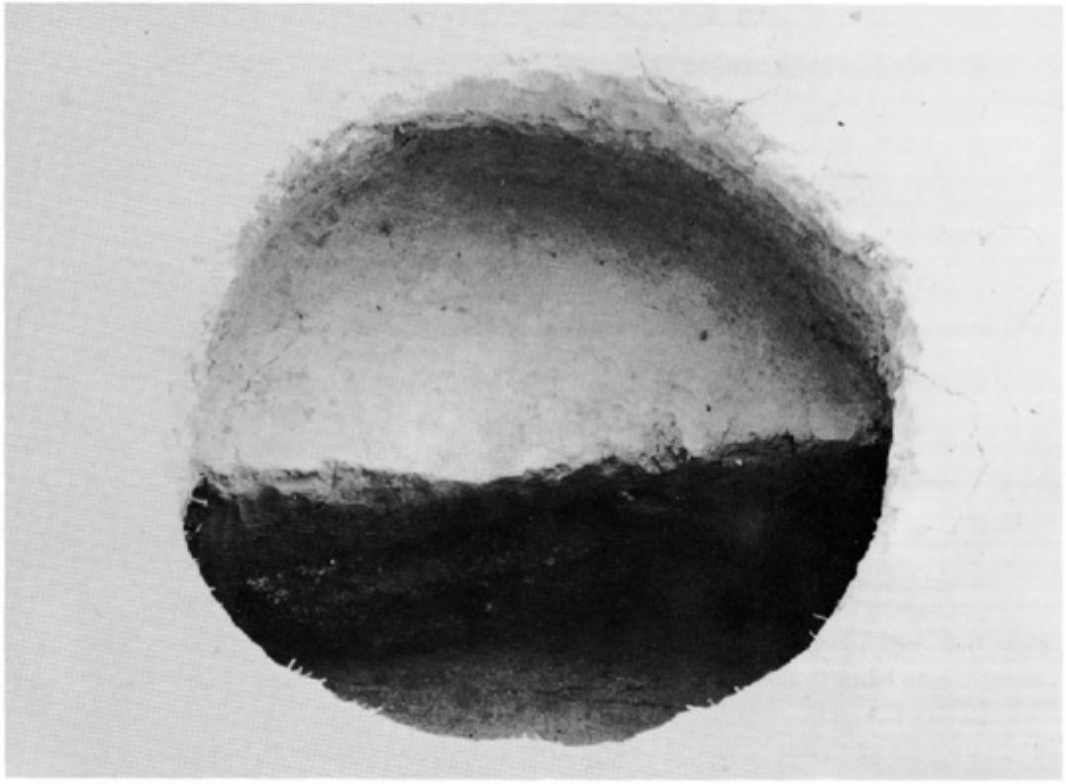


1．SF03遺物出土状況

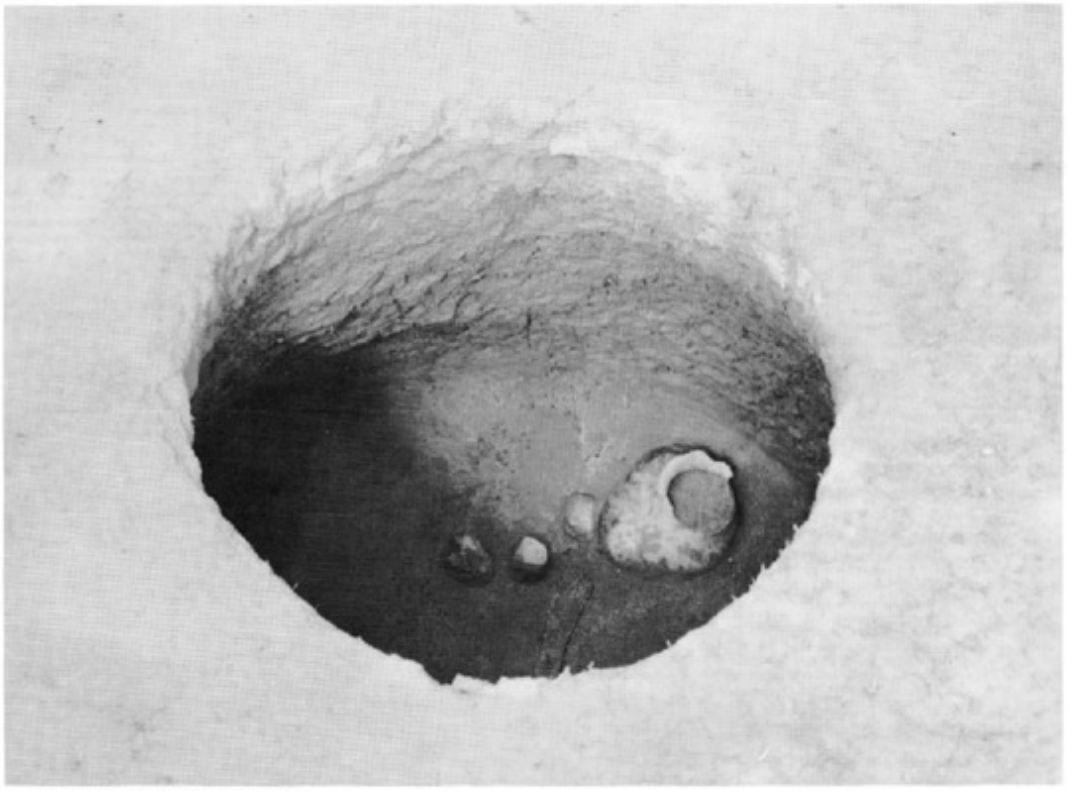
2．SF04完掘状況



1．SF05完掘状況

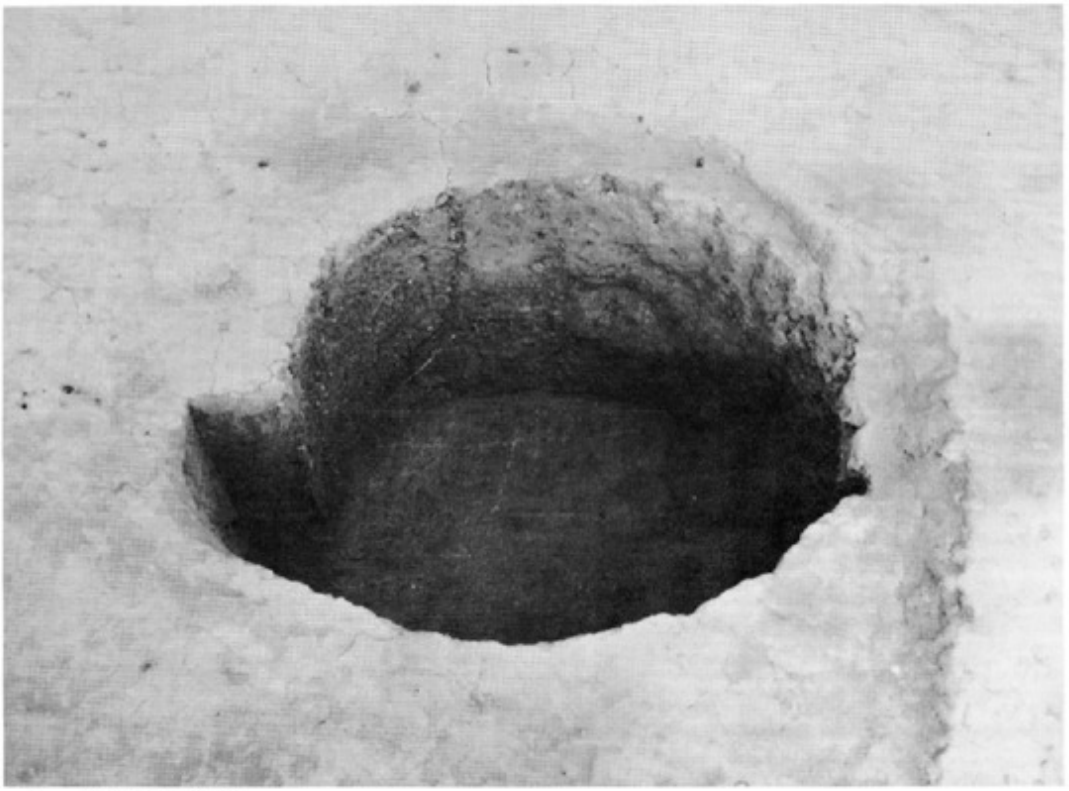


2．SF06貝層出土状況



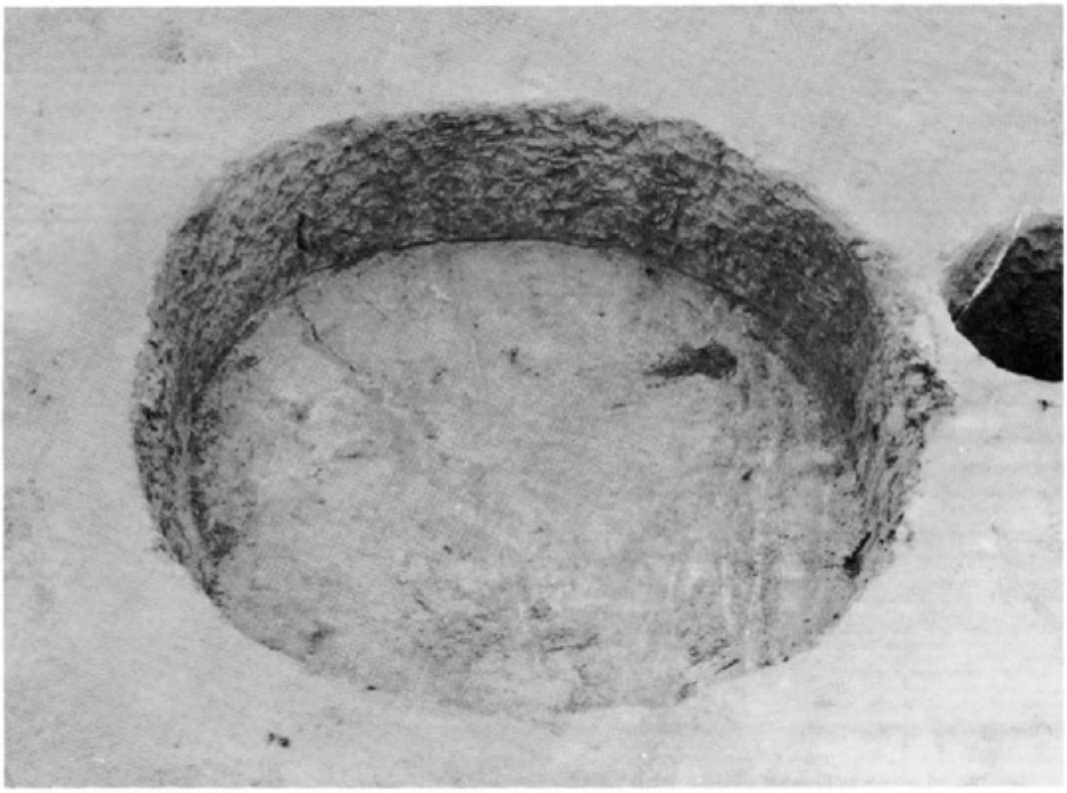
1．SF06遺物出土状況

2．SF07完掘状況



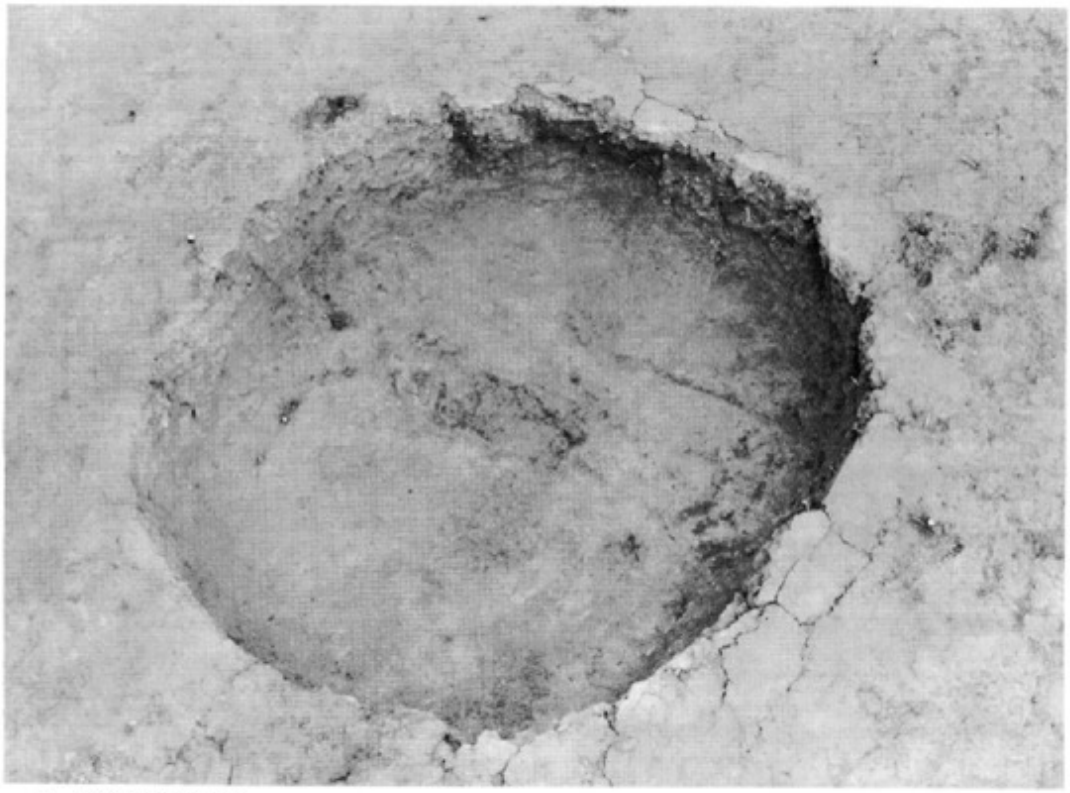
1．SF08完掘状況

2．SF09完掘状況



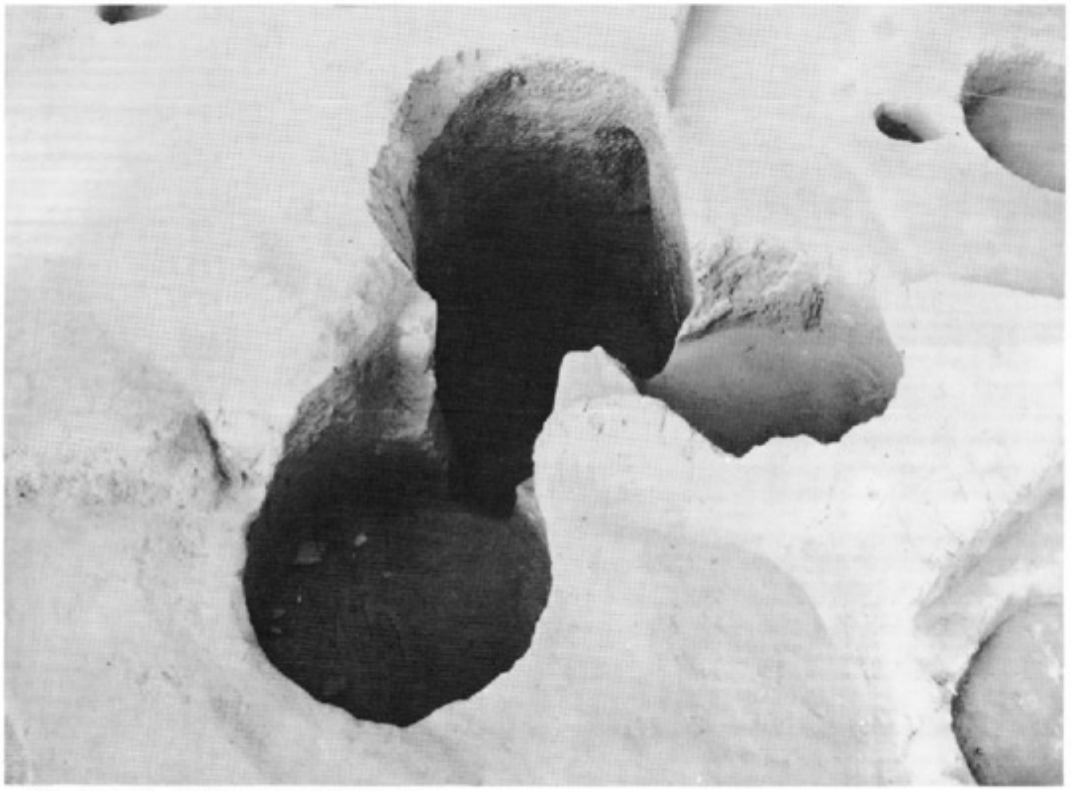
1．SF10完掘状況

1．SF11完掘状況



1．SF13完掘状況

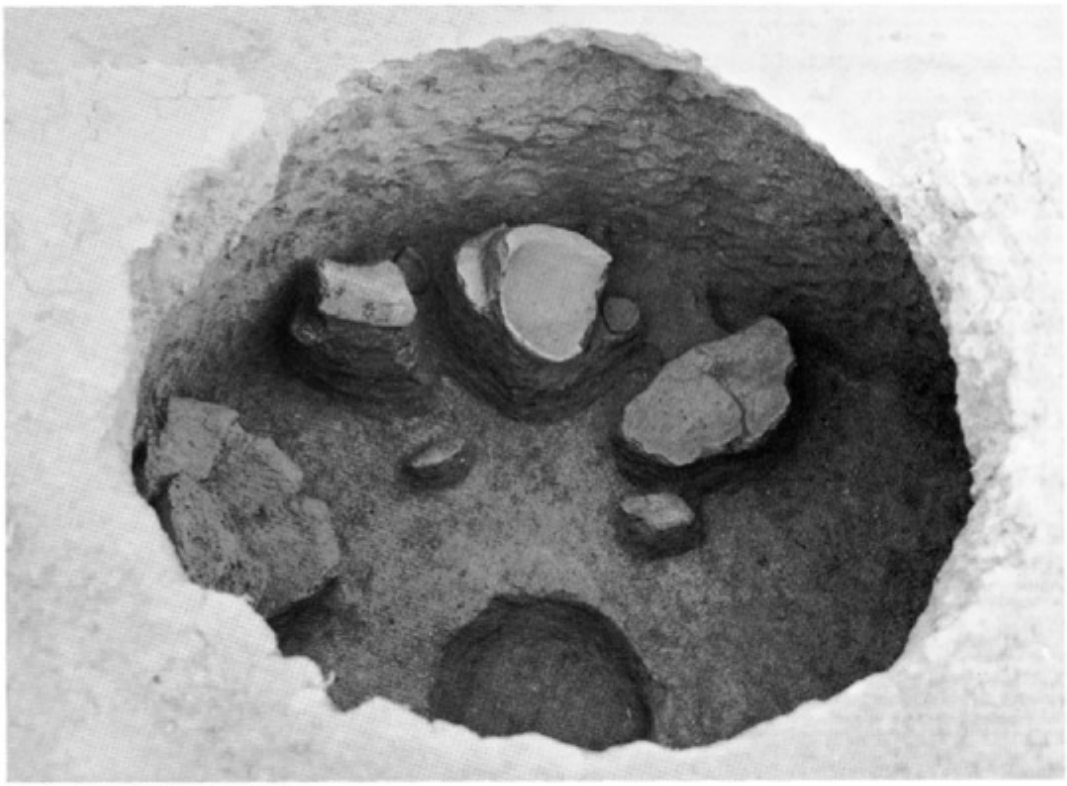
2．SF15完掘状況



1．SF14，SF15，SF16完掘状況

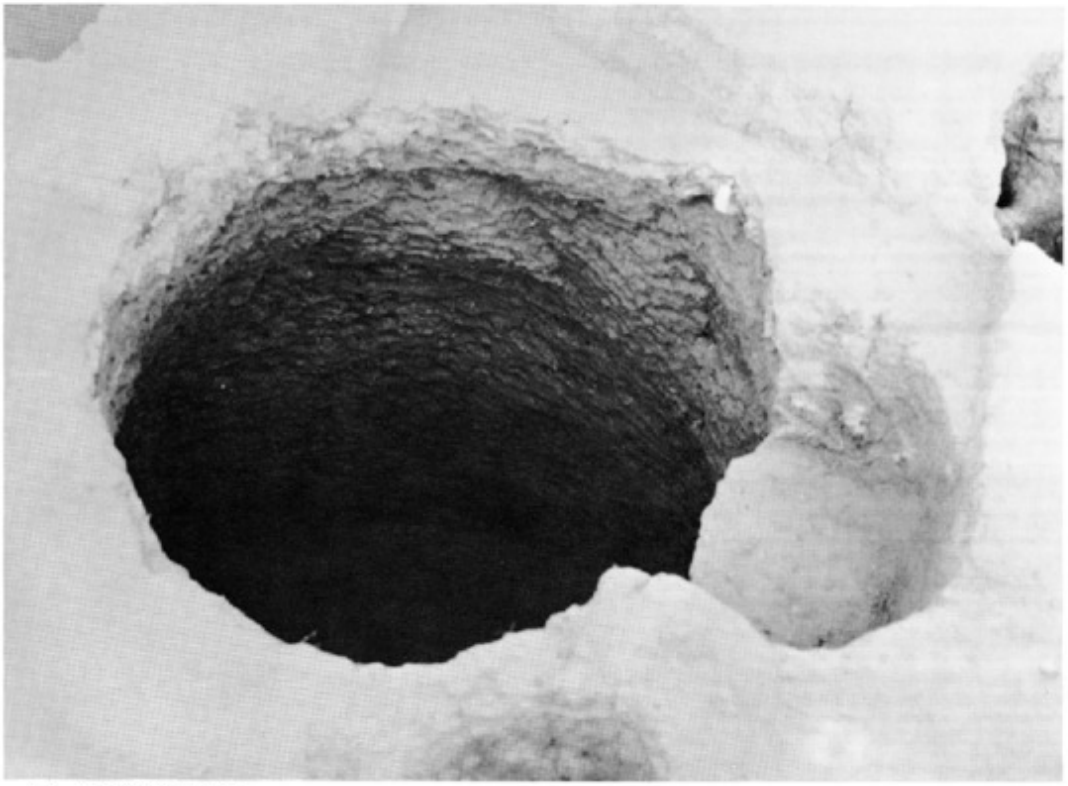
2．SF16完掘状況

1．SF18完掘状況

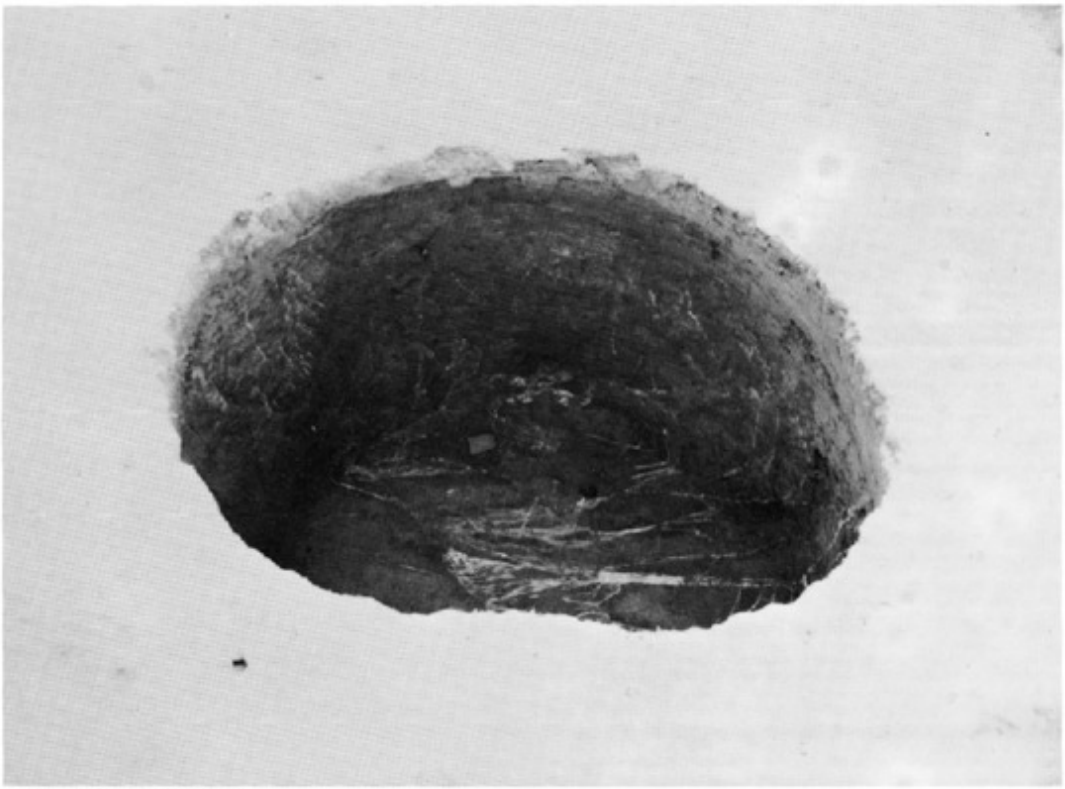


2．SF20遺物出土状況

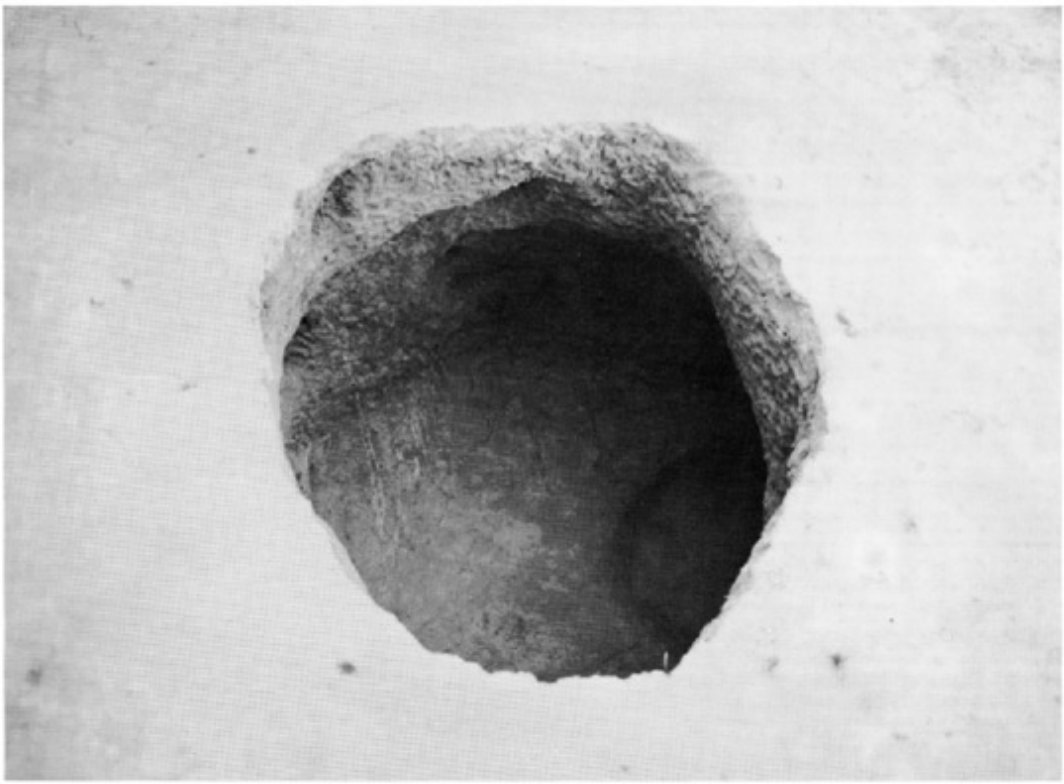
1．SF21完掘状況（奥SK02，手前SK03）



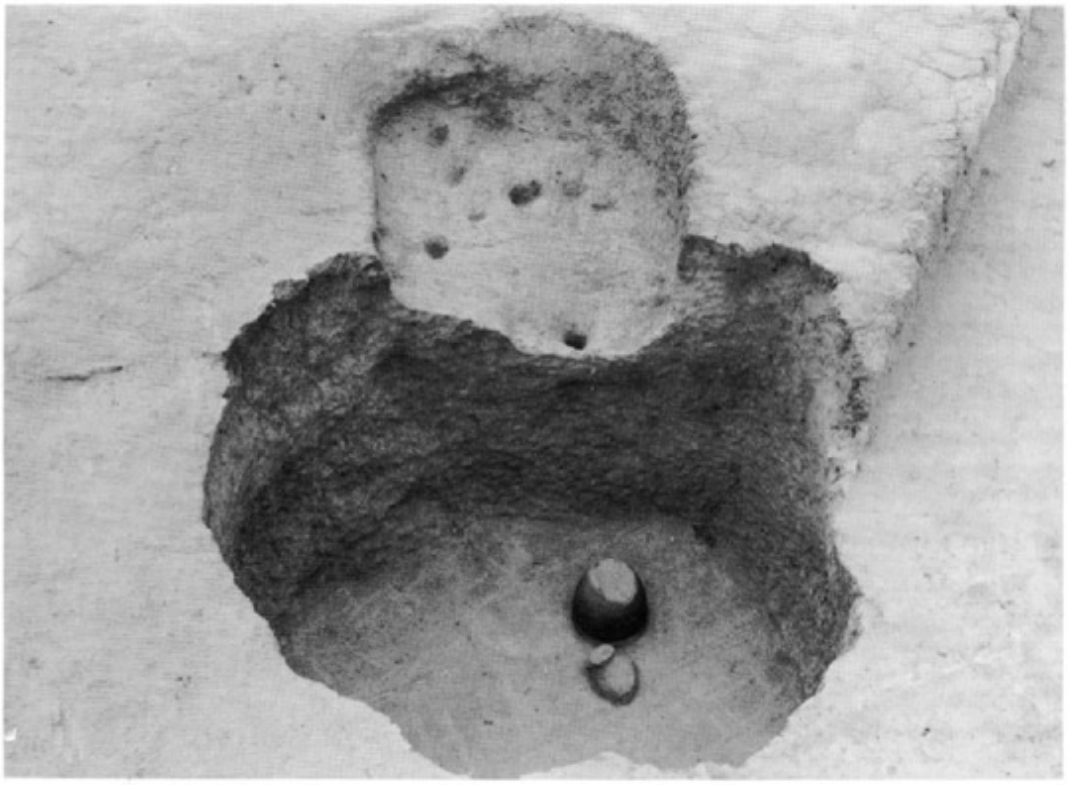
2．SF22完掘状況



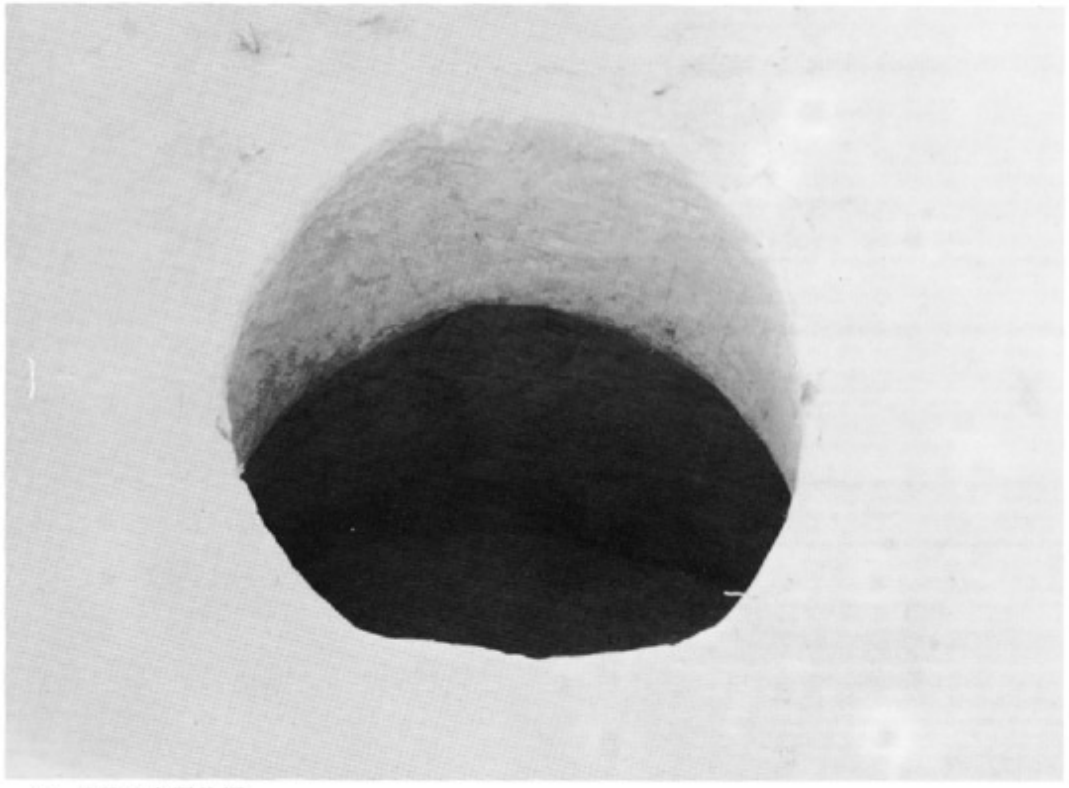
1．SF23完掘状況



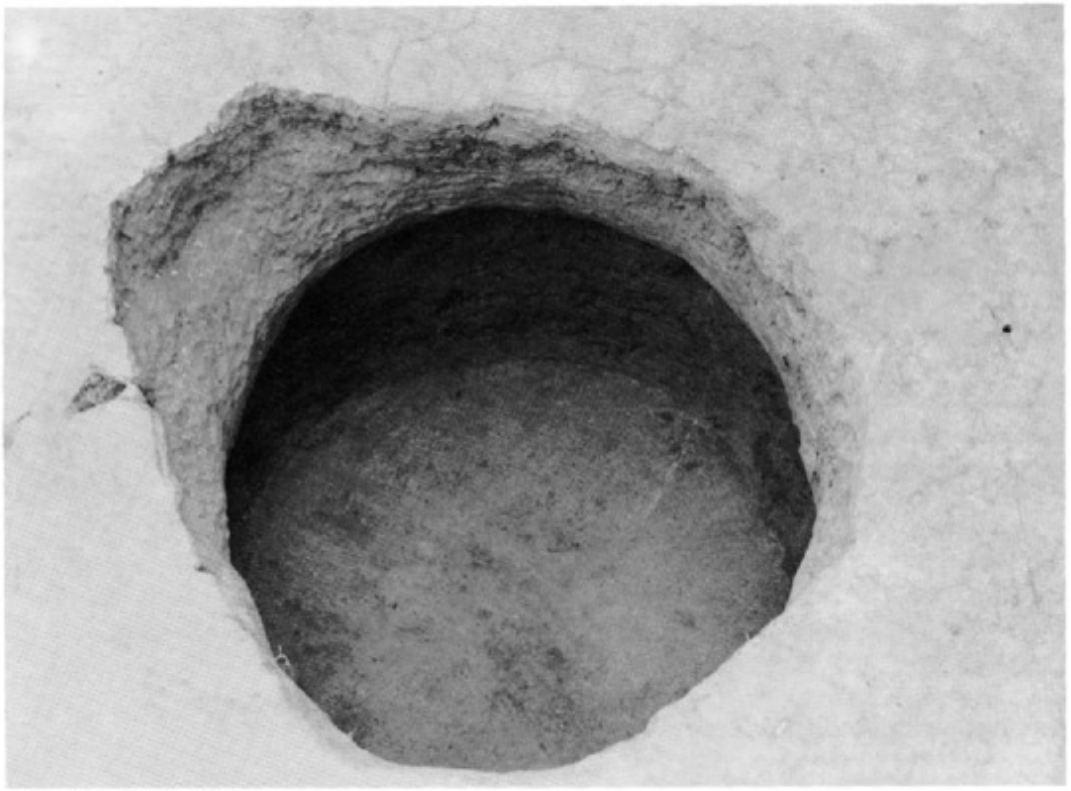
2．SF24完掘状況



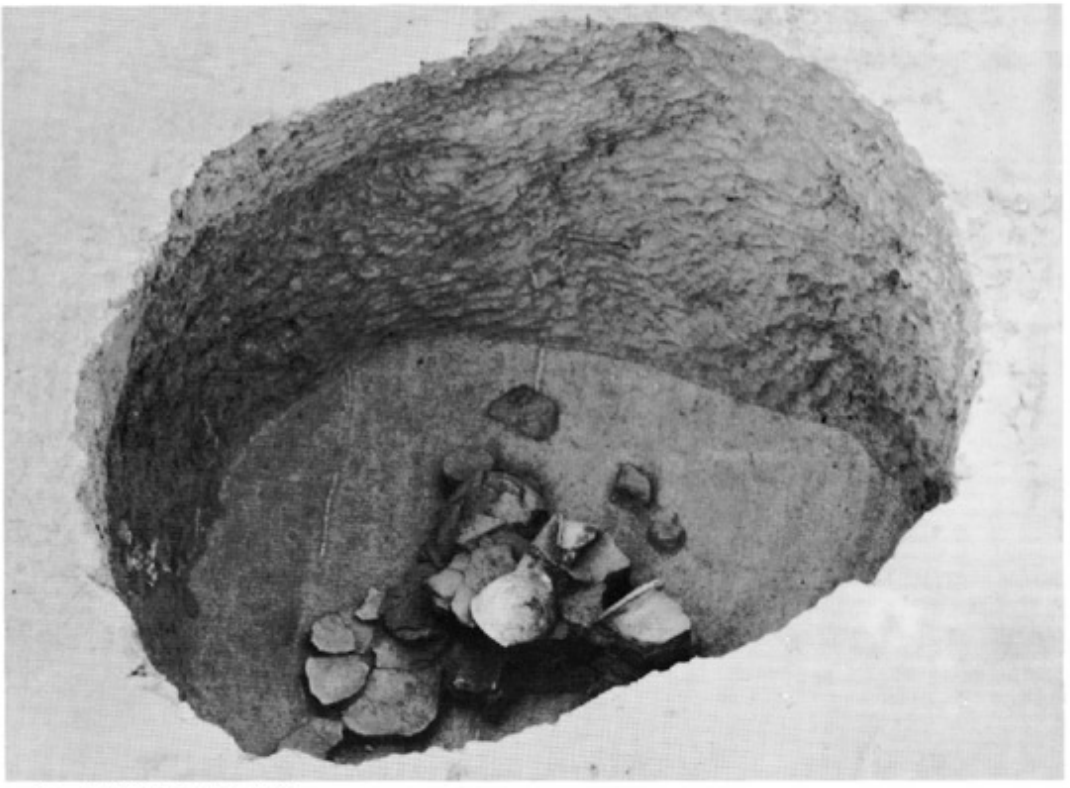
1．SF25，SD03完掘状況



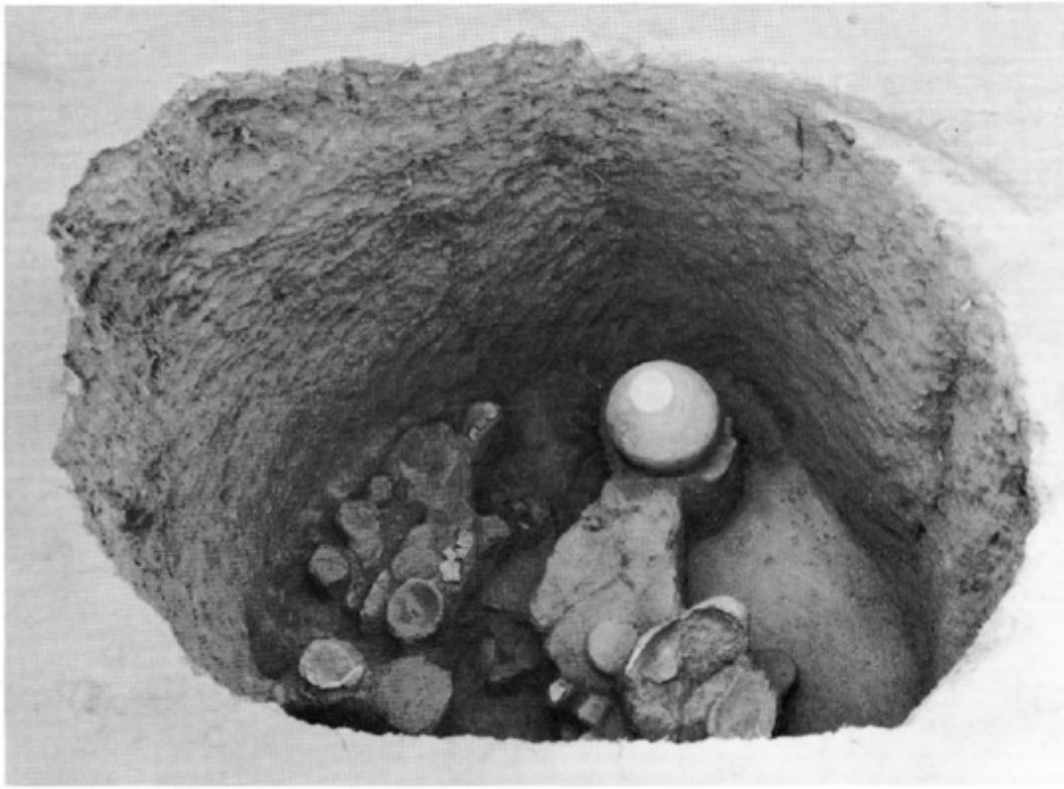
2．SF26完掘状況



1．SF27完掘状況

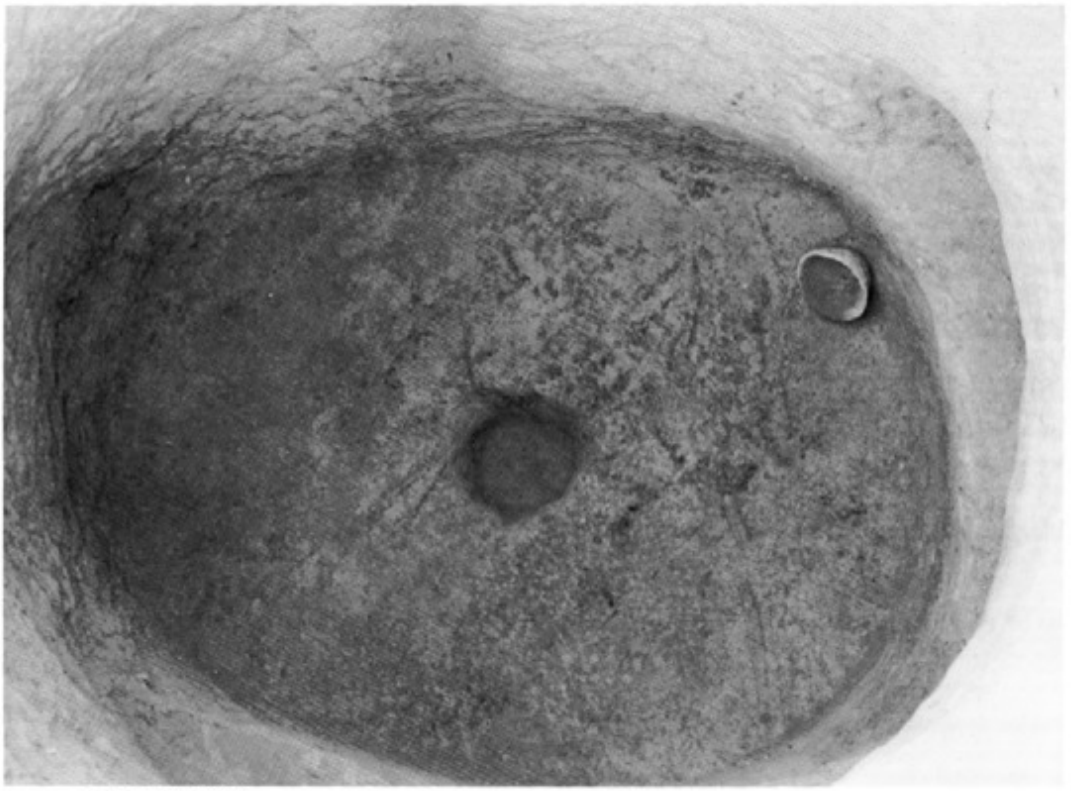


2．SF28遺物出土状況



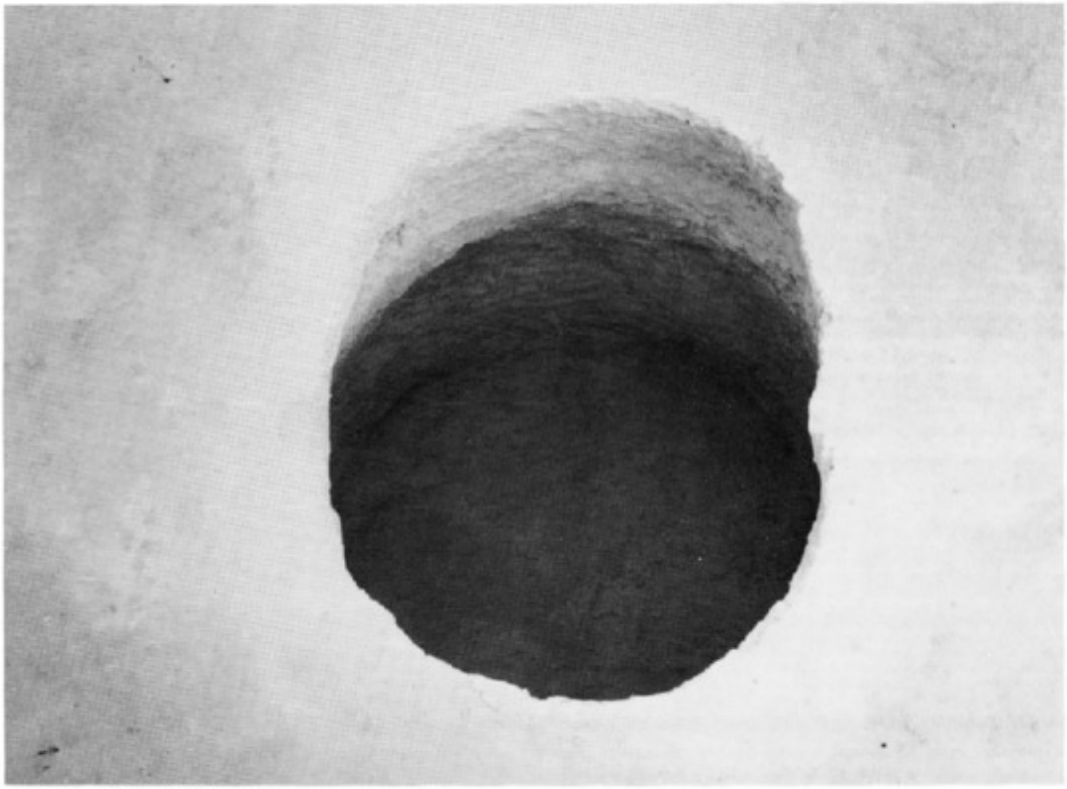
1．SF29遺物出土状況

2．SF30貝層出土状況



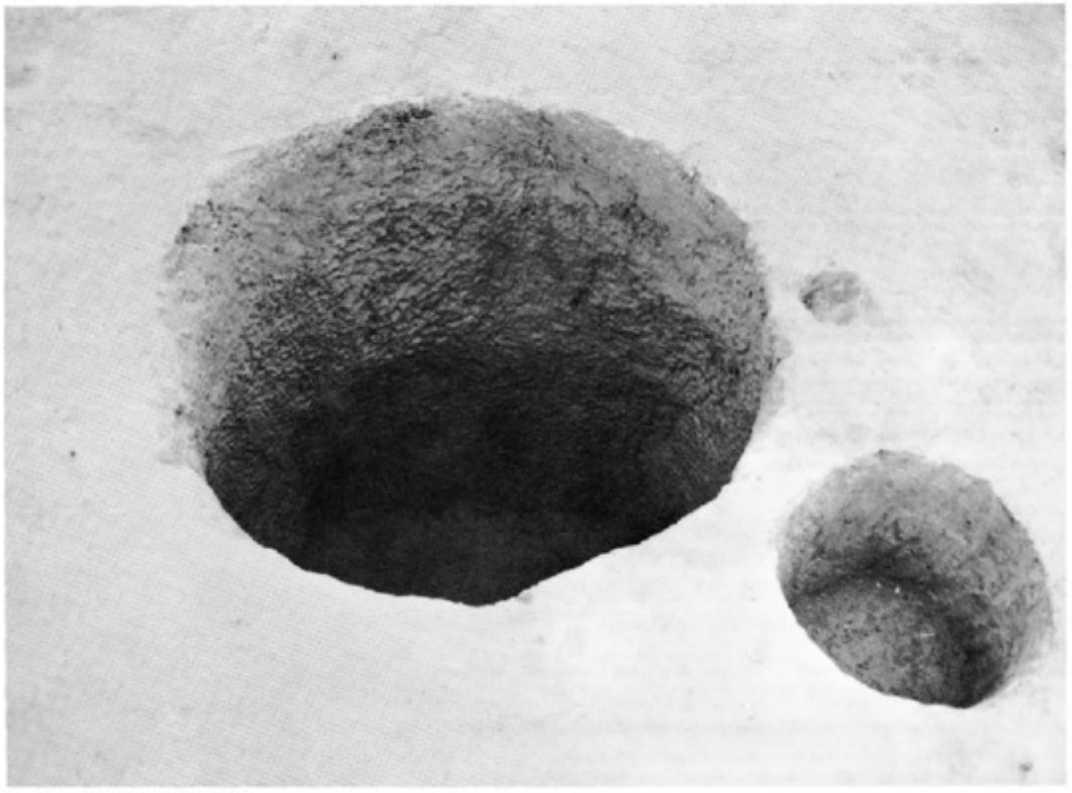
1．SF30完掘状況

2．SF31貝層出土状況

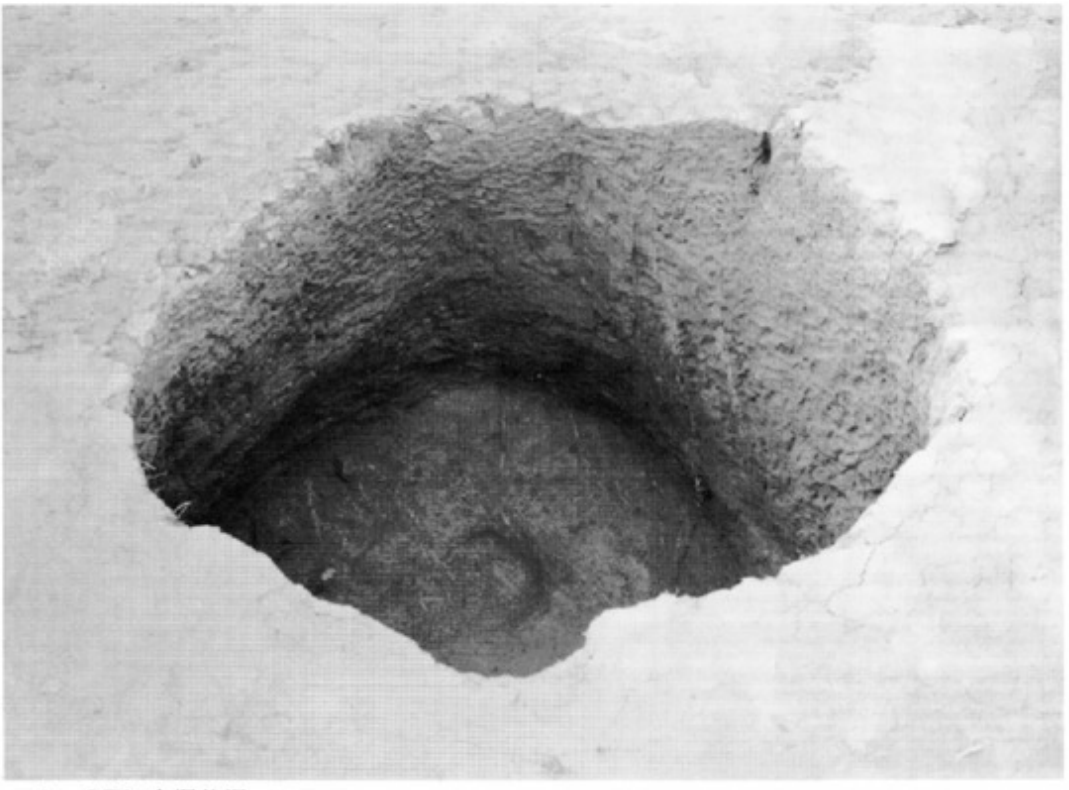


1．SF31完掘状況

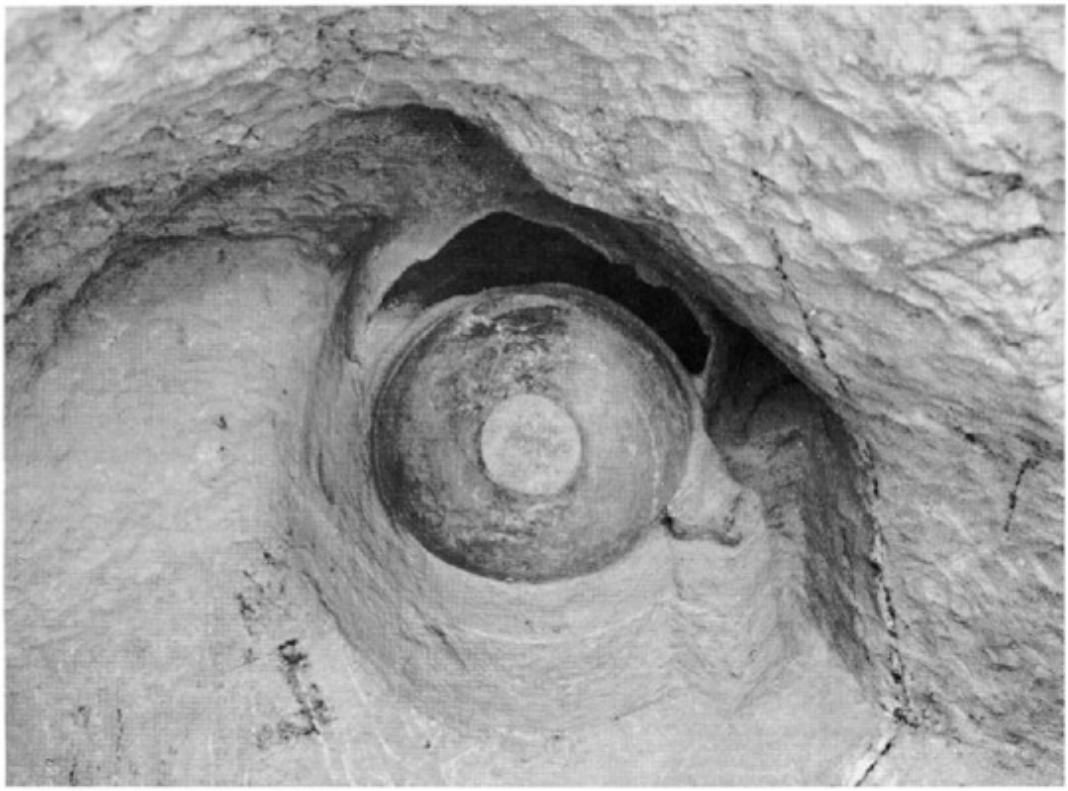
2．SF32断面土層



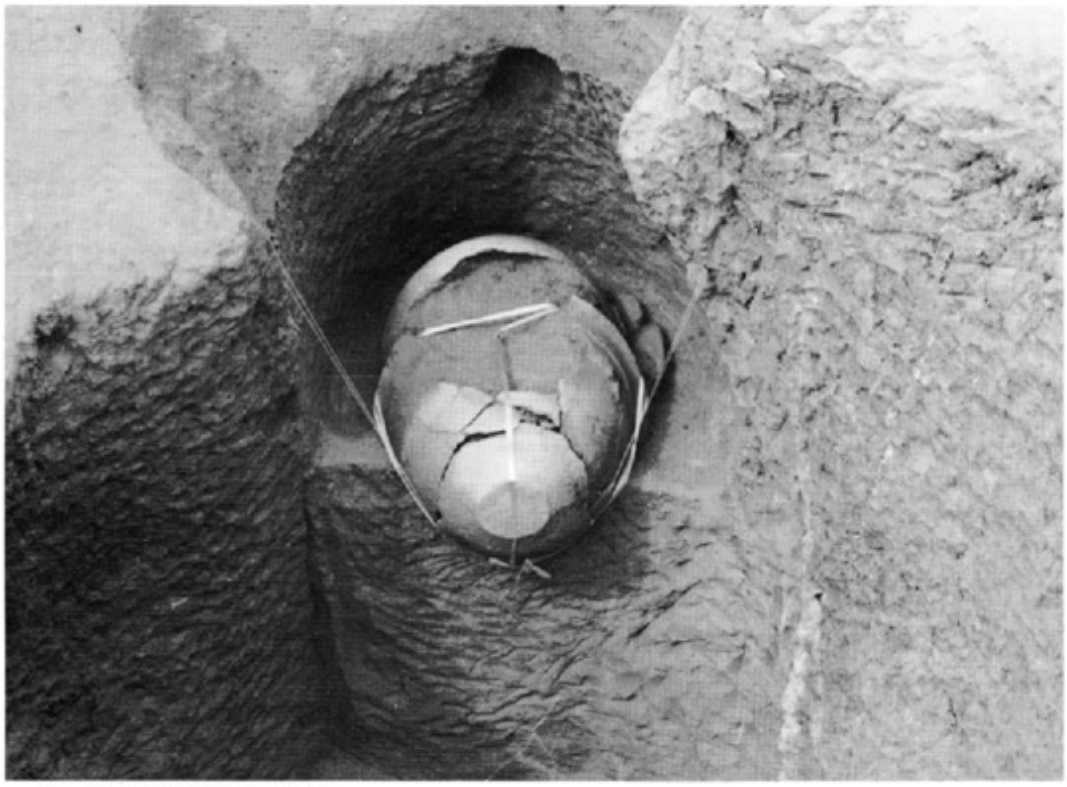
1．SF33完掘状況



2．SF34完掘状況



2．SF09内SK01出土状況



2．SF21内SK03出土状況

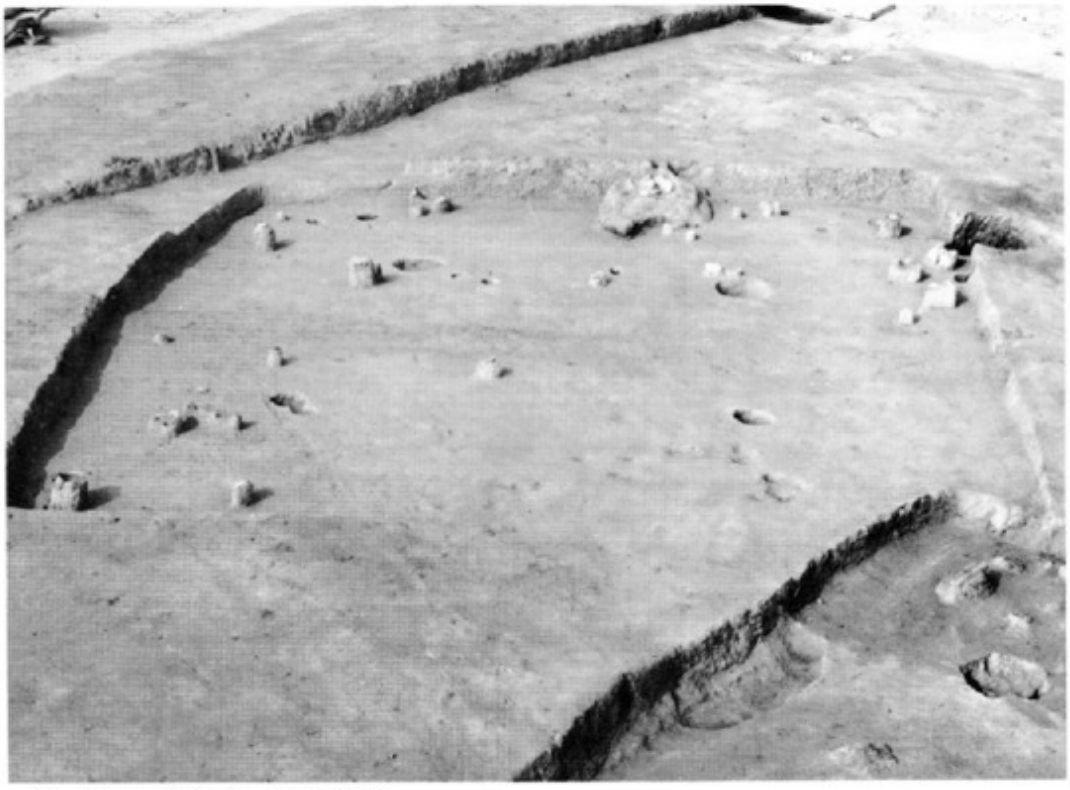
1．SA01，SA02，SD01完掘状況（南から）

2．SA02周溝内遺物出土状況

1．SA03完掘状況（南から）

2．SA04完掘状況（東から）

1．SA05，SA06完掘状況（南西から）



2．SA05完掘状況（南西から）

1．SA06完掘状況（南から）

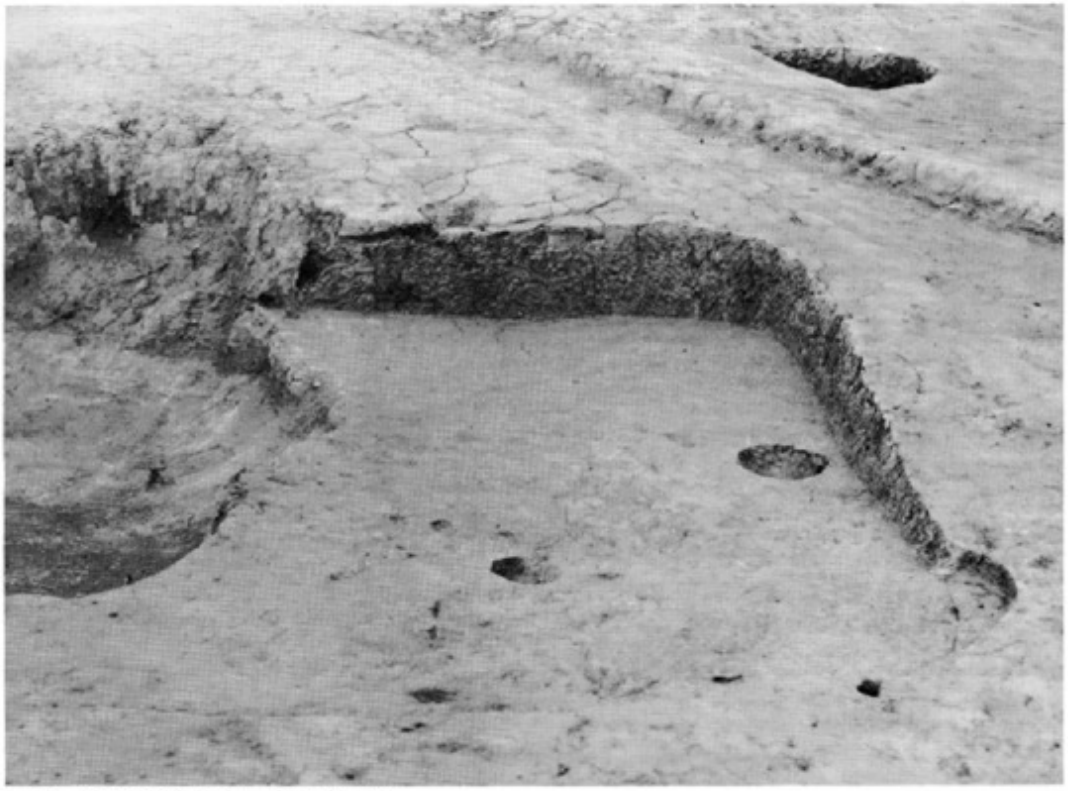
2．SA07検出状況（西から）

1．SA07，SA08，SD02完掘状況（北西から）

2．SA09完掘状況（南西から）

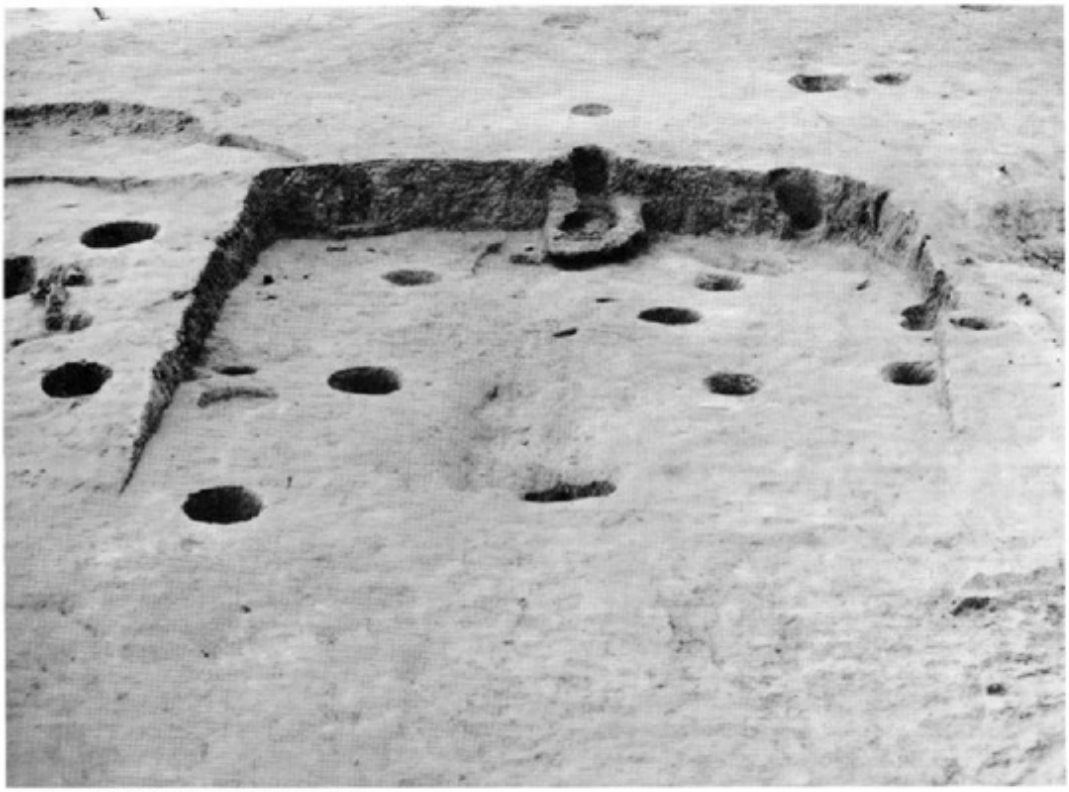
1．SA10完掘状況（西から）

2．SA11完掘状況（西から）



1．SA12完掘状況（西南から）

2．SA13発掘状況（東南から）



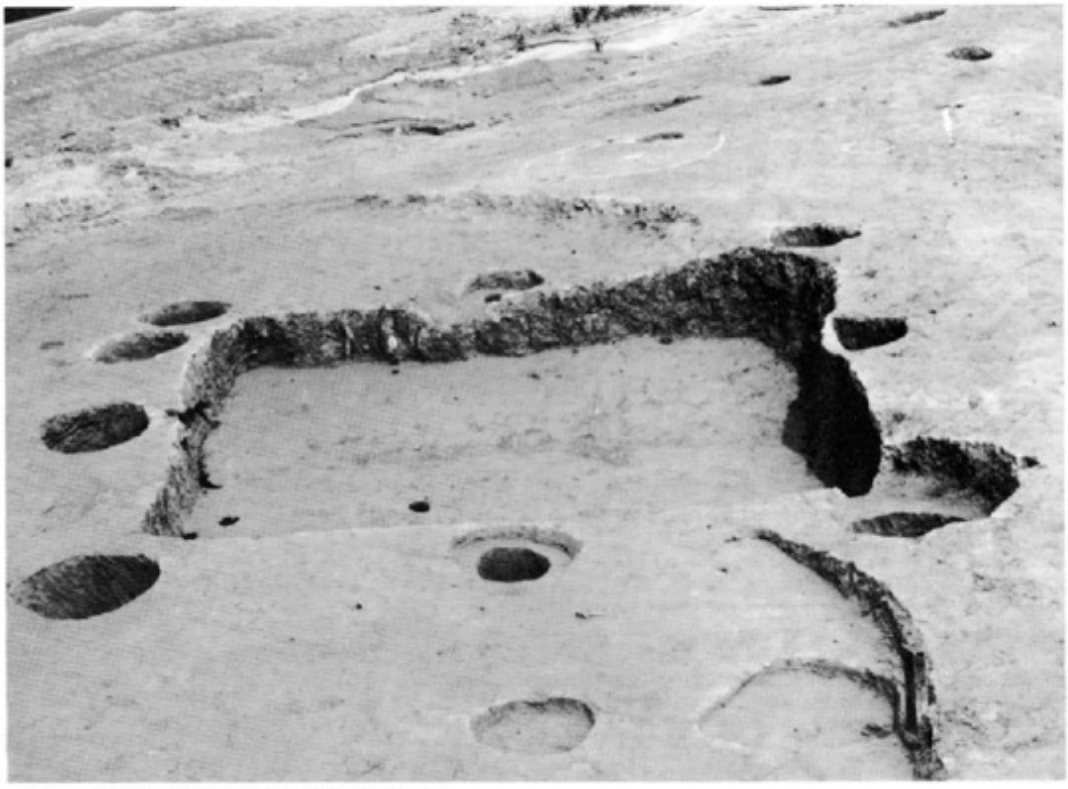
1．SA14完掘状況（南から）

2．SA16完掘状況（南から）

1．SA16北東壁隅土器出土状況

2．SA17，SA18完掘状況（南西から）

1．SA19完掘状況（南から）



2．SA20，SB04完掘状況（南から）

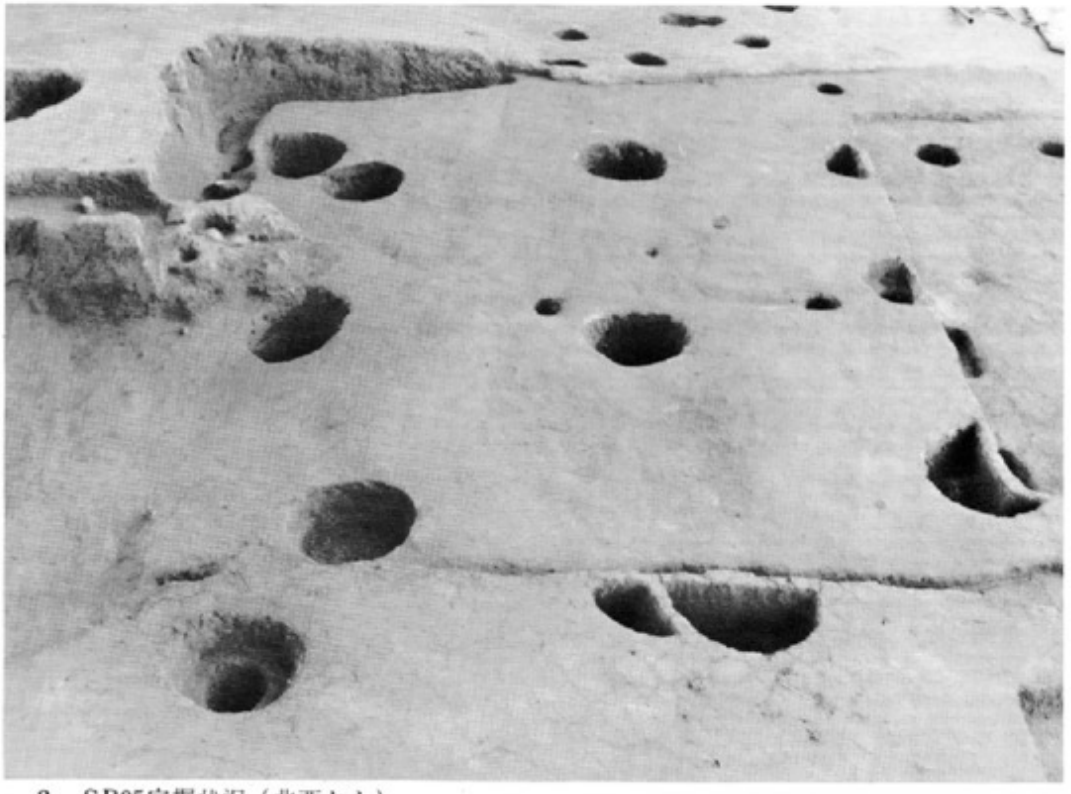
1．SA14かまど

2．SA16かまど

1．SB01完掘状況（北西から）

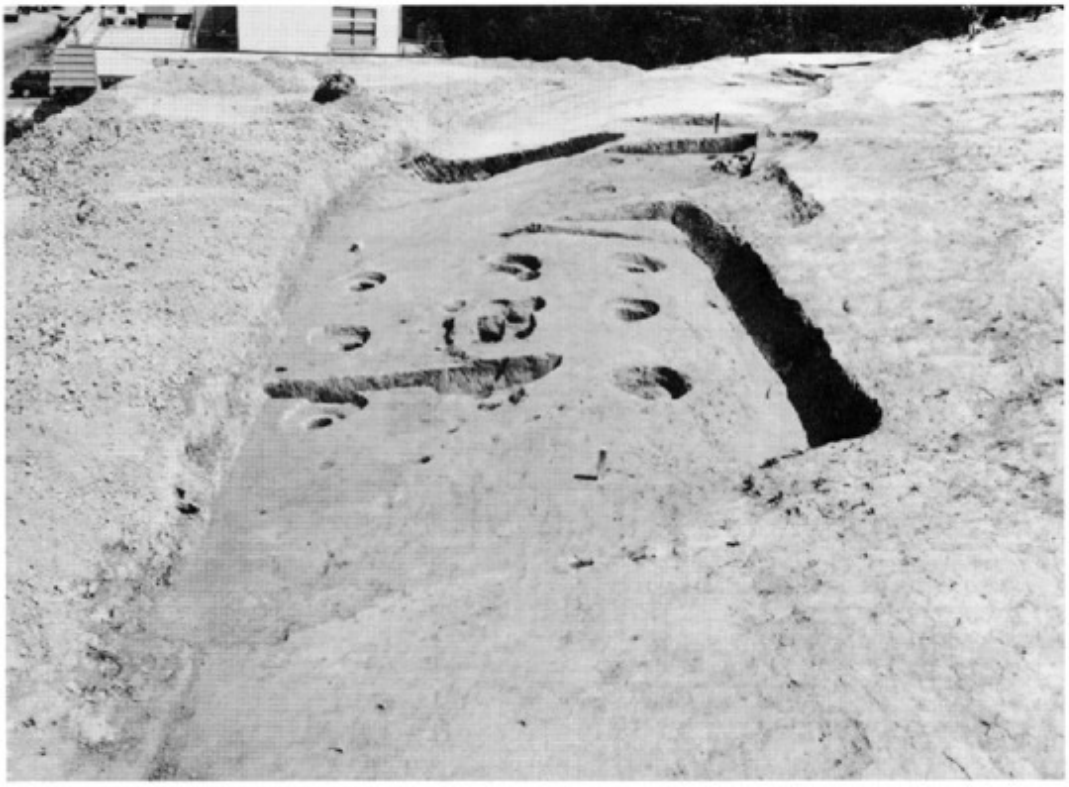
2．SB02完掘状況（南東から）

1．SB03完掘状況（北東から）

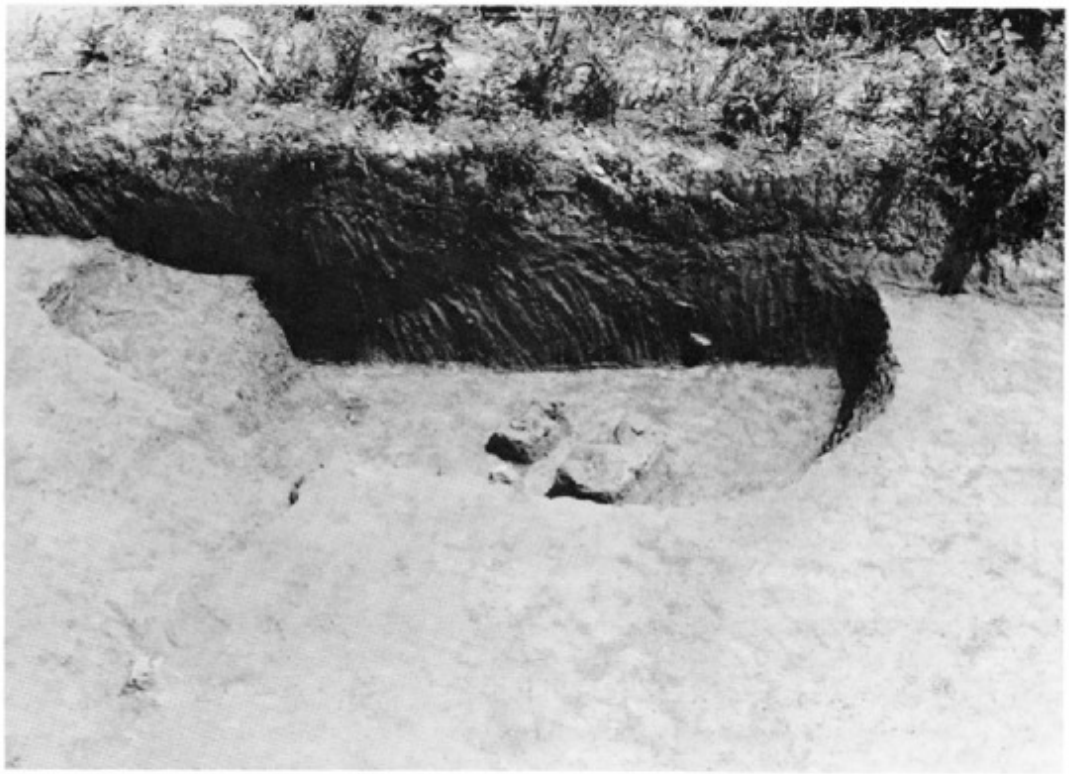


2．SB05完掘状況（北西から）

1．SB06完掘状況（北西から）

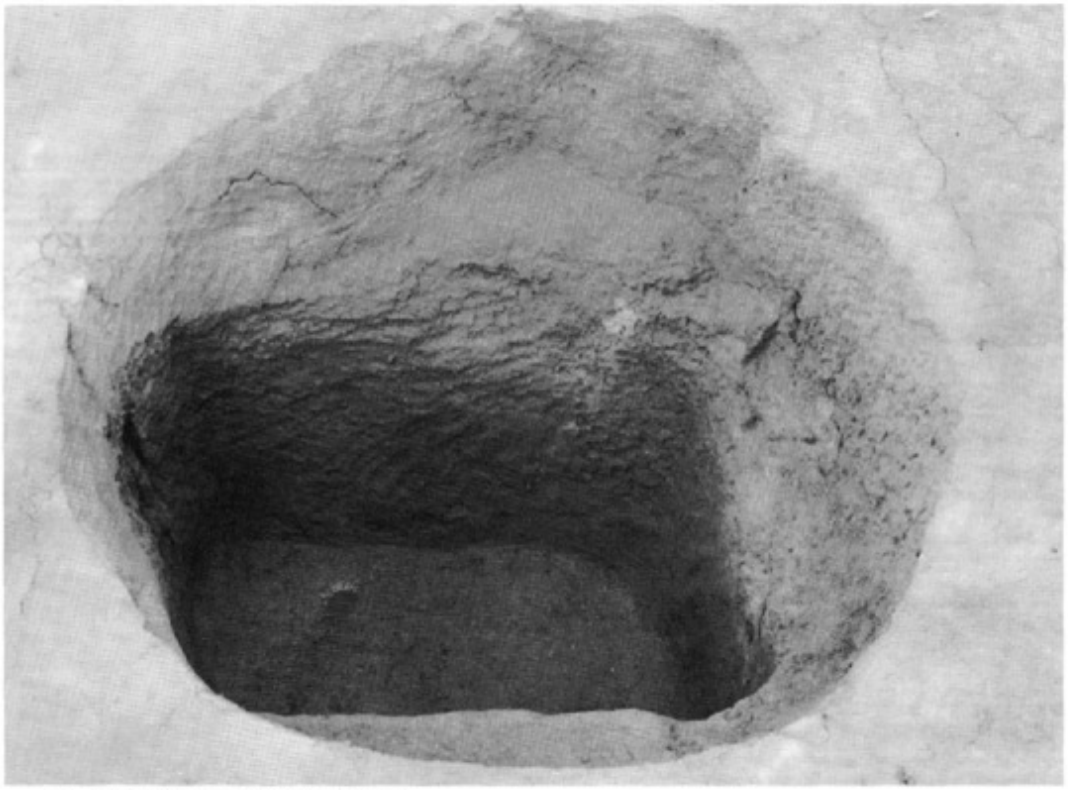


2．SB07完掘状況（南から）

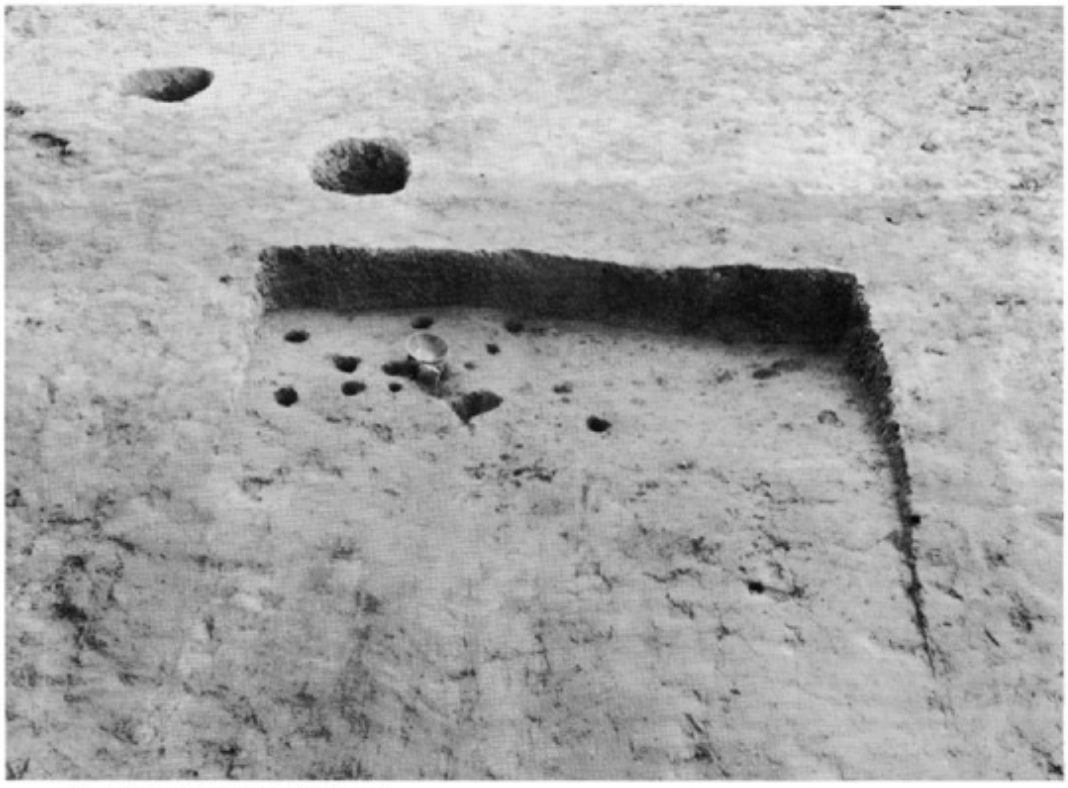


1．SD02完掘状況

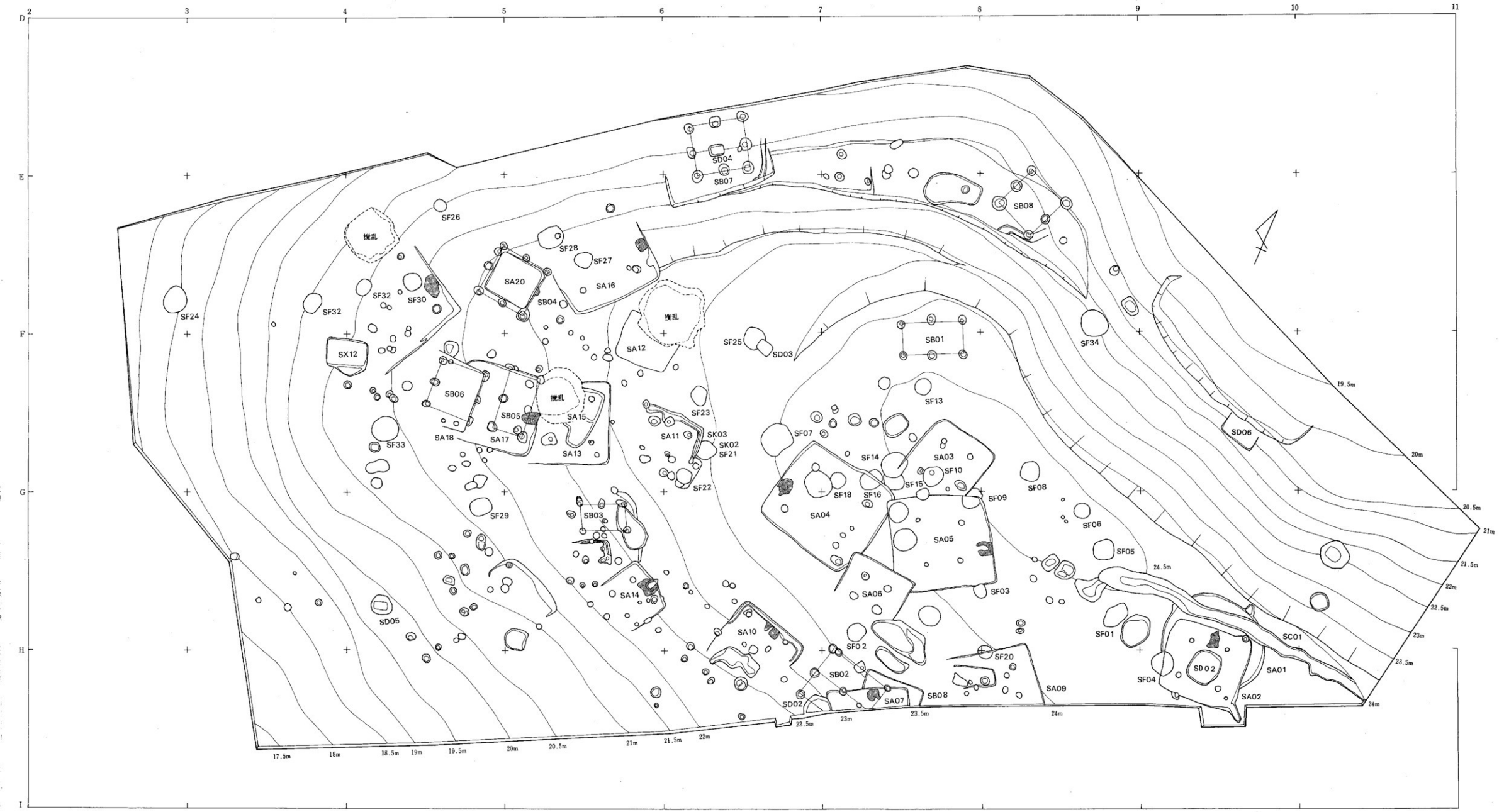
2．SD04完掘状況



1．SD05完掘状況（東南から）



2．SD06完掘状況（北から）



付図　浄泉寺遺跡遺構配置図（縮尺1/150）

福岡市城南区
浄泉寺遺跡
—遺構編—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第99集
1983年3月31日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大手門1丁目8番1号
印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号

浄泉寺遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第99集

1983

福岡市教育委員会